

馬法禮

日

73
3645
419





3438
017

Handwritten text in Japanese characters, mostly illegible due to fading.

Handwritten text in Japanese characters, mostly illegible due to fading.

(419)



門 73
號 3645
卷 419

昭和十三年
四月二十七日
東京

圖書

一 武行九傳集
二 策馬秘傳
三 政馬居
四 三儀集
五 馬法門
六 長馬昏
七 軍馬秘要錄
八 當象馬法禮
九 軍馬秘術
前 軍用馬法禮

一馬ヲ世ノ乗物ニスル根元ハ異朝周ノ代ヨリ
始ルトイヘリ往古ヨリ馬ハ世界ニアレハ乗
業知人ナシ然ニ周ノ武王千徳山ハ行幸
在テ猿ヲ狩玉フ時山ノ猿馬ニ乗ヲ爰
彼ハ逃廻リテ飛行自在ス武王是ヲ見
給ヒ猿氏ニ馬ヲ生捕セ御覽アレハ青毛
ノ馬也又猿ハ人ニ近キ次女ニテ物申猿也
此猿武王ニ向テ申ハ我ハ此山ノ猿ノ司也
猿狩ヲ止玉ハ此馬ヲ進セン一時ニ千里
ヲ走ル馬ナリト云テ下馬シテ武王ノ前ニ
跪キ申武王其時ニ弓弦ヲ弛馬ノ口ニ付テ
手綱トシ乗玉ヒ矢ヲ以テ鞭ニ用テ召ニ
自由乗物是ニ過ス今日ヨリ狩ヲ止玉ト
宣旨有武王ハ王宮ニ還リ玉フ其後回々
之山ヨリ馬ヲ見出乗物ニ用ユ軍事ノ
乗物ハ馬ホト大ナルハナレ日本ニモ神代
ニ天ノ班馬ニ召ト云事有是ハ馬ニハアラス
鹿ニ召タルヲ云ト云リ

一馬ノ手綱ノ事長サ七尺五寸ニ定ル也乍
去用前ニハ一丈ニスル是ハ馬上ノ業ニ取用
アルニ依テ長キヲ用ユ漆様ハ取漆ニ引

ヲ付可深又淺黃紅紫白ナルヘシ此内紅紫
ニクハ將軍家ニ用ラル故ニ下々不用淺
黃一也手細ハ移徒ノ馬ニサス白手細ハ
嫁入ノ騎馬軍陣ニ用ク傳葬禮ノ牽
馬ニモ白手細ナシユコリヲ不掛スニサス也
又神馬獻上ニモ白手細ヲサセ凡是ハ嫁入
軍陣ノ如ク必ヨリ掛仕懸ル也

一 腹帶ノ事七尺五寸ノ定也軍馬ニハ二重腹
帶トテ一丈二尺ニスル也先腹帶ヲ馬ノ背
ニ懸テ下腹ニテ取違テ鞍ヲ置腹帶ノ
兩端ヲ切付ノ韃穴ヘ通シ鞍ノ上ニテメテ
結也

一 手細ヲヨリ懸ル事左ヨリ七ヨリ可成
嫁入ノ時ハ右ヘニツヨリ也

一 轡ヲ鞆ニ仕掛ル事銜ノツボヲ右ハ立左
伏ト仕掛ル也扱手細ヲ引キニサシ内ヘ卷
テ端ヲ折テスボノ手細ノサシ下ニ絞引詰
テ置也左右同シ鞆ノ轡榻ヲハ鞆ノツボヨリ
下ヘ通シ前ヨリ下ノ方ヲ向ヘヤリツボ下ヲ
通シ手前ヘ總ヲ取テ下テ左右凡ニ置也
一 鞆ノ納様玉珠ノツボヘ下ヨリ通鞆先ヲ

通ヲ下ヨリ上ヘ取テツボ上ヨリ下ヘ引
通シ置也

一 泥障刺事切付下ヘ雲形ノ処ヲサシ込
テ緒ヲ塩手ヘ上ヨリ通テ下ヘ抜兩ヘ
分テ前ノ方ヲ引込ニ緒ヲ締ニ一方結
テ又一方ヲ其ツボヘ入ケサリ引詰テ
置也又軍陣ニテハ前之ツボヘ一方引通
シツボヲ引ツメニ筋ノ端ヲ下テ置ニ
是ハ首付ノ緒ニスヘキ為也亦飾馬ノ
時ハ別ノ緒ヲモ付ル也神馬入部ノ鼻
馬御成御代替進上ノ御馬駕引手
ノ馬此ホハ四処ノ鹽手ニ紫紅ノ緒ヲ
付ル是ヲ飾馬ト云也

一 同泥障ノ緒ヲ上ヨリニ筋下ヘ通シテ
兩ヘ分テ端ヲニツヒ締ニ取テ一結ムスヒ
テ其端ヲニツヒ上ヘ揃ヘテ後ノ方ノ輪ヲ
前ノ締ノ上ヘ預ヲシテ前ノ締ヲ以テ
押ヘテ偕上ノ二筋ノ緒ヲ後ノ締ノ下ヘ抜
テノテ可置左右前後モ同前ナリ
一 馬ニ乗様ノ事右口ノ手細ヲ取テ左手
細ノ上ヘ重テ十文字ニ輪ヲ取テ鞍ノ向

ノ手形ニ其手ヲ掛テ左ノ手ヲ鑑ニ付テ
右ノ足ヲ踏掛テ左ノ手ヲ後輪ニ掛テ
乗テ右ニ持タル手網ノ輪ヲ其後左手へ
取テ手網ノ先ヲ小指ノ間へ抜テ借右手
テテ乗方ノ手網ヲ逆手ニ取テ大指三指
カラミテ左ノ方ノ手網ノ輪ヲ右へ繰テ
一東ニ握テ輪ヲ下テ構ヘテ可置也
一鞍上ノ事トハタリヲ鞍ニ當テ腰ヲ居テ乗
鑑ハ足ノ大指ニテ外ヤナヒハヲ抜テ叔白持
ハ馬ノ耳ノ間ヨリ三間遠ク見ルニ亦騎馬
ホノ時ハ遠山ノ月ヲ詠ル貞持ニテ手網ヲ
構テ可乗ニ

一打切ノ一是ハ左右へ切レ又ハ引馬ニ用テ也
馬ニヨリ左へ定テ切ルモ有右へ定テキル
モアリ其不切方へ銜ヲ抜テ切レ所ニテ
不切方ノ手網ヲユルシテキレル方ノ手網
取テ手網ノケ切ル時ニ手甲ヲ伏テ切ニ
左右同前也亦引テ出ル馬ヲハ轡ノ銜ヲ
左へ抜テハ右口ヲ切右へ抜テハ左口ヲ切テ
銜ニテ口ヲ摺テトノレハ止ルモノ也
一櫻狩ノ手網ト云遠路ヲ乗往車ナリ

馬ニ息ヲサセス馬ノ躰ヲ勞ラカサヌ乗方ニ
轡ノ銜ニ息ノ不切禁ヲ縮ニ包結付テ
処々ニテ馬勞シト思時水ヲ少宛吞在
也サテ乗方ハ地道十町程乗テ左へ
廻シ乗足ニ五町程乗右へ廻乗出シ地
道ニ十町ホト乗左へ廻テバラクトニ町
程掛散シテ右へ廻テ乗出シ地道ニ十
町乗右へ廻テホロク足ニ掛散スヘシ如
此平地ナラハ所々ニテ輪ヲ乗廻ク可乗
又上リ下リノ坂道アラハツバテ折ニ手
網ヲユルシテ乗ルヘキ也少モ足立悪キ
所ニテハシツカニ乗所々ニテ引口ニ退息
ヲワカセテ乗往ヘキ也長途ヲ乗ニハ助
策ト云テ有

春風得時馬蹄疾

一日見盡長安花

荒駒乃新息奴其先尔

関能清水尔影於移須索

右詩ト哥ノ心口傳秘事也

一長良カ兵書馬法門ニ云馬ニ三段ノ汗アリ
一ニ口胸ニ三間ニ足ノ龍ノ毛之汗也若

竜ノ毛ニ汗下ラハ大キナル勞レ也責付テ乘事ヲ止ヘシ

一 同書ノ傳ニ千里ヲ一日ニ乘往ノ息合ハ龍化シ仙人ト成テ長良ニ傳一方如左

黑蛇丹

小黑焼ト云是ナリ

一 烏蛇一ツ生ズルヲトラヘ酒ニ升ニ金二兩百枚酒ニ合テ黑蛇ヲ入一宿置土瓶ニ酒モ蛇モ入テ黑焼ニシテ抹ス

一 辰砂三兩水乾シテ抹ス

一 人參二兩人形ナルヲ蘆頭ヲ去抹ス

一 甘草一兩節ヲ去抹ス

一 龜腦梅花各一兩

一 阿仙藥一兩其供

一 熊胃二分水ニ摺立入ル

右粉葉ヲコ子合練テ壺ニ入持テ馬ニ飼時ハ錢程絹ニ五重程包丸ノ彎銜ニ付ル也同梅干ノ肉ニ兩加テ摺合ルモ吉常ノ息合ハ梅干一味モ能也秘事也人ニモ用テ吉

一 青海波ト云午網ト云ハ人ヲ引亦ハ切ル馬ヲ乘手網也人ヲ引皆手網ノ馬ノ

顔へ越遣テ取テ指誇ク苗へシ又左口切馬ヲハ左ノ手網ヲ馬ノ顔ヲ越テ右手網ヲ添テ引返スヘシ右口ハ切ハ右ノ手網ヲツラ先へ越左ノ手ヲ渚引返ス也何モ曲アル馬ヲハ兼テ定ル乘方ヲ分別シテ可乘其時ニ至リ出合モノ也

一 山ノ端ノ手網ノ事大ニ引立テ不苗馬ニ吉馬引立時手網ノ輪先ヲ延テ馬ノ頭ヲ越テ首ヲシテ可苗亦四寸ノ策ヲ用是ハ笄ノ先ヲ須弥ノ髮中ヲ刺ハ苗ル也

一 雲入ノ手網ノ事是ハ往スシテ込馬ニ可用馬込サル時口ヲハミ摺シテ成程引立テ跡へ退々シテ蹄ヲ乘道筋へ足ノ向時手網ヲサユルシテ乗出スヘシ同又込皆左ノ手網ヲ顔ヲ越テ右ニ取詰テ左ノ手ニ左ノ靴ノ総ヲ取テ蹴付ク輪ヲ乘廻シテ逐先へ足向トキ左ノ手網ヲ左へ直シテ乗出スヘキ也

一 山坂ヲ馬乗上乗下ス一馬ヲ乗上ル時ハ手網ヲユルシテ取ツ、ヲ折ニ上ヘシ下リモ同シ但山下ノ手網ヲ鞍ノ銜口

取添テ持山上ノ方ノ手細ヲハ高く取テ其身ノ鞍付ハ直ニ可居又下ル所モ身ノ居リ同前ニ是モ山ノ方ノ手細ヲ上テ山下ノ手細ヲ鞍ノ輪ロニ取添テ乗也

一 大河ヲ渡ス手細ノ事川上ノ鑿ヲ強ク踏及シテ聲ヲ掛川上ノ手細ヲサクリ上乗渡スヘシ但川上ノ泥障ヲ折上テ乗モノ也

一 沿路ヲ乗事手細ヲ許シテ右ニ取テ鞍ノ見入ニ取添左手ヲハ後輪ノ見入ニ掛テ取ロヲ引立ク声ヲ掛乗ナリ

一 海河ヲ馬ヲヨカスル一馬ノ三途ニ乗テ手細ヲ許シテ鞍上ノ腹帯ニ左右凡ニ取添テ足ノ大指ニテ下腹ノ腹帯ヲ校テ乗オヨカスヘシ但是ハ少シノ内ニ二町三町モ在之ハ竿ヲ腹帯ニカウミテ横ニサシ右ノ如ク乗テ兩足ニテ踏乗ヘシ

一 馬ニテ高キ物ヲモ越セル一シツクト二三間乗寄兩膝ニテ鞍ヲ校ミ立

テ左キニテ前輪ノ見入ヲ取右ニ手細ヲ取テ越物ノ処ニテ声ヲ懸テ越セシ同又越物ノ際ハ乗付左右ニ手細ヲ少延テ蓋手際ヘ取テケ声ヲ掛ナガラ手細ヲ一拍子ニ引立モセテ落暑処ニテ見入ヘ手ヲ掛ル心ニ越セルモ能ヘ又少ノ切戸溝川杯モ右ノ分能ヘ扱又高キモノハ三四尺切渡ハ三間迄ノ一何レモ案ニスキ名処ハ余ノ手立可有

一 馬ニテ巖石ヲモタル一岩石ノ際ハ乗付馬ニ下ス処ヲ見セ乗返リテ手細ヲ右取添手ノ内十文字也左ノ手ニテハ鞍ノ組違ヲシツカト取テ落ス処ニテハツト声ヲ掛テ手細ヲ向ヘ引立花内ニ其手ヲ鞍ノ見入ヘ引カケル心ヲ以テ落スヘシ其身ハ身ニ垂テ落スモノニ是モニ丈五尺扱一丈四五尺迄ノ処也落ス時落付足立ニモ可奇又落ス馬ハ横馬ニ立ヨウニ心掛ヘシ向ヘ直ニ落シ立ハアヤマキアルヘシ

一 ツ橋ヲ乗渡事兩鑿ヲ直ニ踏テ腰ヲ居同手細モ同如クニ取頭持馬ノ山間

ヨリ向九尺ノ脊ヲ守テ渡ルモノ也

一 細道ニテ馬ヨリ下リ立事手綱ト鞆ノ髪掛ヲ右手ニ取左手ニテ前輪ヲ押ヘテ馬ノ頭ヲ左へ押曲馬ノ向ヘ下ルモノ也

一 狭キ道ヲ向ヨリ馬ヲ乗来リ我モ乗向時ハ我馬ヲ横ニ安キ処へ頭ヲ向テ立来ル馬我馬ノ三回へ頭付時其方ノ鑿ヲ鞍上へ越テ向ノ馬ノ三番ノ方へ口ヲ引掛レハ後股自ソバ付テ向ノ馬通リ内安シ備向ノ馬モ馬向ノ方ノ鑿ヲクテ上ヲ越テ互ニ乗抜シ是ハ土佐ノ入江ノ舟盡ト云乗様ノ手綱ハ狭キ道ヲ往行ニ在之可心得

一 川カミニスル馬乗事河ノ際へ乗寄乗返シ其川五三間ノ処ヨリ口ヲ摺付々退リカシテ後足水へ入処ニテ蹴付テ川へ入テ上口へ切上ノ越スヘシ

一 物ニ驚キ人ヲ不為乗馬有其時ハ手綱ノ曲ヲ弘ケテ馬ノ目ヲ塞可乗
一 馬上ニテ長道具ヲ立テ持事右ノ鑿ノ内ニ立テ柄ヲ手綱へ取添テ可持

一 弓ヲ馬上ニテ持事弓弦ヲ腕ノ内ニ上ヘシテ末鞞馬ノ耳間へサシカサシテ

手綱ハ手ノ内ニ十字文字ニ握ニ取添テ可持又右ノ手綱ハエシヤク計ニ構止
一 馬ノ口ヲ取ニ右口ヲ取者上リ也左ハ下ナリ故ニ追繩ノ者ハ右口ヨリ下ル也又葬禮ノ馬ヲ牽人ハ左口其家ノ臣下也右口ハ別當ノ役也常トハ違也但葬馬ハ尾髪ヲ切テ牽ヘシ

一 馬ノ口附ハ軍陣狩場杯ニテハ一人當千ノ健カナル侍二人口附ニ用ユ又馬副ト云ハ大將ノ馬ニ續テ乗者也是乳人程ノ侍也以上三人正ク身ニ付武功備ル者也

一 馬ヨリ急ニ下立時ハ芝繫ニ馬ヲスヘシニ手綱ニテ前足ノ中節ヲ揃テ結フニ馬ノ首ヲ右へ折曲々手綱ヲ誦テ蓋テニ付ルニ急ナラハ乗方ノ鑿ヲ鞆ニ掛テ可置
一 馬上ニテ弓ヲ射ル事才鞞ヲ馬ノ右へ越テ左へ末鞞ヲナビケテ向ノ物ト右股ノ物ヲ射ル也其時手綱ハ左手ニ取弓ニ持副カツテ引ニ矢ヲ放スベシ又左ノ物ヲ射

時ハ本陣ヲ馬ノ左置横夕ハ右ニ手綱ヲ
 取テカワテ定ニ矢ヲ放スヘシ
 一 馬上鑓ノ下左ノ手綱ヲ腕ニ内ヨリ握ミ
 右ノ手綱ヲ外ヨリ腕ニ握ミテ鑓ノ柄ヲ
 右ハ手綱ノ下左ハ手綱ノ上ニ取副テ馬ノ
 左右ヲ射候テ彙突出ス者也同鞍固シ
 テ業ヲスル事モアリ其時ハ道具有也
 一 馬上ニテ太カホノ下片手綱ニテ太カノ
 柄ニ腕懸テシテ手ニ握ミ戰フニ又諸手
 ホノ時ハ手綱ヲヨリ左ノ腕ニ通シテ置
 兩手ニテホ時手ヲ添テ戰ニ長カヲ用
 ル時モ手綱ヲ左ノ腕ニヨリ掛テ働ガコシ
 一 馬上組討ノ事敵ノ馬ノ後ヨリ乗掛ル
 時ハ我カ右手ハ手綱ヲ一ヨリ捻テ額ニ
 カサシテ敵ニ合処ニテ敵ノ首中へホ
 掛テ我ハ馬ヨリ下リ立先留テ指心
 掛ヲ第一下スヘシ亦前ヨリ懸テ組
 時ハ敵ノ馬ノ右ノ平首ヲ摺ヨリニ我
 馬ヲ頭ヲ高ク引立テ彙懸テ手綱
 ノッホヲ延シテ敵ノ首ニホ掛テ馬ニ
 引落サスルニ敵ニ軍陳ノ手綱六中へ鑓

ヲ入ル也右ノ如敵ニ掛ル時敵ノホ太カモ手
 綱ニテヨケ又ハ擲テ取也
 一 馬上ニテ旗差事先手綱ヲ結左ノ股ヨリ
 右ノ肩へ掛テ袴ニ仕テ叔旗竿ヲ鑓ノ
 内ニ立テ持袴ノ結端ヲ竿ニニツ擲
 テ端ヲ竿ニ取添テ持左ノ手ニ十文
 字ニ片ノ手綱ヲ持可彙
 一 馬請取渡ノ事兩方引手際ニ左右
 片ニ輪ヲ取テ左手ニ持右手ニテ手
 綱ノ曲ニ大指ヲ掛テ握右膝ノ上ニ掛
 テ一禮ス請取人ハ渡ス人ニ立向ヒ一禮シテ
 先馬ノ正面ハ髪ヲ見左へ廻リ毛先
 ヲ見後へ廻リテ尾首ヲ見テ渡ス人
 ノ向へ寄先ノ右足ノ外へ我カ右足ヲ
 踏サニ右ノ手ノ大指ヲ手綱ノ間へ入
 テ甲ヲ越テ手ノ内へ取渡ス人ハ足ヲ開
 ク其時左ノ足ヲ馬ノ右ノ際へ踏サニ
 渡スヲ水付ノ輪ヲ左手ニ取渡ス人ハ
 足ヲ抜テ請取人ノ前へ往キ一禮ヲ互
 ニスル也請取人水付ノ輪ヲ左右取直シ
 我右足ヲ踏入ル時馬ヲ後へ一ツ退カシ

又左足ヲ踏入サ三退リ以上三足退
テ轡ヲソト切上クシテ少引出シ棄
方ヲ見セ申轡ヲ鳴シテ立次ニ馬ノ
後ヲ引立見セ轡ヲナラシ備前(三足
引出シテ立御前へ正面ヲ向轡ヲ鳴
シテ立次ニ手綱ノ端ヲ前ノ如ク右ニ
取テ馬ノ口ヲ突上左へ廻シテ可入也
一馬ヲ渡請取人ハ互ニ臣下ノ役ニ平役ノ
及所ニアラス烏帽子素袍袴ニテ袴ノ縮
ヲトル返シ股立ハトラス庭悪敷時各別
也主人ヨリ給ル馬ハ自身庭ニ下リ一礼
シテ直ニ請取手綱ノ水舟ノ処ヲ持上使
ニ向テ頂戴シテ家来ノ者ニ渡ス其ヨ
リ舍人受取テ馬屋へ入ル也
一軍陳ニテ馬請取主人へ見ヌル時ハ跡へ
馬ヲ退ヌモ、也前ハ三足進セ轡ヲ
鳴シテ立次ニ右へ引廻シ馬ノ左ヲ見
セ入ル也常ニ替也棄方ヲ見セ引込
ナリ
一駢ノ事長サ一方七尺五寸定也又信繩
腹掛繩ハ二丈八尺追繩モ二丈八尺也

- 一馬櫛長サ七寸ニ定齒數七ツ長一寸八
分櫛幅二寸七分也
- 一凡赤槌ノ事柄七寸頭長サ一寸八分指
渡一寸八分緒付処五分斂形ニ作穴
ヲ明ケ緒ヲ通シテ二ツ伏ニ結テ先ヲ
一ツ伏ニ切也於又枒木ヲ用ル也
- 一凡打刀ノ一長サ四寸三分柄ノ長サ七寸
ニ作ニ所卷也
- 一凡切板ノ事長サ一尺八寸厚サ二寸八分
廣サ一尺二寸ニ柳ニテ作ル也
- 一髮銀ノ一長サ九寸又ノ廣サ六歩
筥ノ先三分也
- 一鼻捻ノ事長サ一尺八寸持処四寸ニ腕掛ヲ
付長六寸ニ結フ太サハ九分廻ニ
- 一竹刀ノ一長サ二尺七寸兩又ニ削ル緒ハ本一
寸ニ掛緒ヲ付ニ竹廣サ一寸五分計ニ
- 一茶筒ノ事節ノ下持処四寸先ハ八寸口
ソギ一寸五分切口一寸二分ニ
- 一馬屋足聚ノ一齒高サ八寸鼻緒ツク
也三ツ伏ニ作ルヘシ
- 一馬柄ノ一柄ハ一尺八寸ニ作持処四寸五分

置テ下ヨリ彫テ柄抄ノ方へ削之同腕掛ハ
柄先四寸置六寸ニ結付ル同柄抄ノ口ノ徑ハ
三寸六分高サ四寸ニ同底ハ徑リ二寸八分ニ
口へ反目ニスルニ柄ハ柄抄ニ指テ向カハ
近ノ寸一尺八寸ニ

一 轡ノ一橋金ノ内堅ハ條三寸横條二寸八分
同上ノ鞆搦一寸五分鞆ノ坪横一寸六分廣
七分同鞆サシ二分明へシ又銜ノ坪横一
寸四分銜竿二寸八分也又引手ノ車金
一寸七分ノ徑リニ引手ハ二寸八分可成同
水付ノ坪五分ニ是ハ明珠小次郎ニ三浦
助カ傳テ摺スル金合ニ

一 鞍ノ矩合ノ一大方山高サ三寸二分也前後
同事又木ノ厚一寸一分也前輪ノ凡間
内矩一尺五分前山間一尺一寸六分ニ同前
後凡間四寸二分同凡先ヨリ上へ九寸
ナレハ同洲濱形二寸九分後輪モ同
後輪凡間一尺二寸二分ニ同凡ヨリ上九寸
二分ニ又山ノ圓ニ前後凡三分甲盛ニ
同木ノ厚ニ前輪ニ同シ居木間一寸
六分刀草刺ノ穴前ヨリ一寸六分也

同前後ノ山ノ高サ二寸九分ニ亦有鞍ニ打
木ハ撥木終ノ曲リヲ用テホ立ル柄
檀ノ木ヲ居木ニ用ユ是ハ馬ヲ強ク乗
時ハ鞍ノ切組ニ火出焼止ニ其柄檀ノ
木ヨリハ火不出ユニ必スセンタシ用ユ

一 鐙ノ非合ノ一凡太抵ヲ記ス鐙ハ重キカ
能ニ殊ニ川越一ッ橋入引馬杯ニハ重キ
ヲ用ユへシ鐙ノ曲ハ舌先并金ノ間手ニ
束ノ積リニ皆下ヨリ上ノ千リ近五
寸可成又鐙ノ長ニハ皆下長サ舌先ヨリ
鳩胸迄九寸同曲ノ処横一寸二分同舌先
ノ横三寸三分ヤヒハ高サ舌先ハ六分千
リ付七分也高頭長サ四寸同母衣附穴
ノ所廣サ七分同ク穴ハ猿登ヨリ八分ニ

明ル千リノ上并金ノ内ニテ二寸五分并
金ハ横二寸五分並一寸五分同水金坪
ヨリハ一寸八分也紋狭間廣サ一寸六分
同厚三分ニ厘計ニ定ニ

一 切付ノ一後ノ及方一尺二分下ノ横一寸
六分前ノ高サ九寸七分上ノ横一尺三寸
七分腹帶穴前ヨリ三寸上ヨリ二寸

六分下ニ廣サ一寸堅ノ長サ二寸ニ明ヘシ
同馬肌付穴居木ニクウベ上ヨリ六分
下ニ前三寸後四寸置テ前後ヲ定ヘシ
一肌付ノ一真中ノ以五尺一寸四分上ノ横一
尺五寸同下ノ廣サ九寸六分同腹帶收長
二寸五分前二寸下ヨリ二寸二分上ニ可有板
肌付ハ切付ヨリ少前後ヘハ出ル程ニスル
ナリ

一カ草ノ一長サ三尺廣サ一寸五分竜頭ノ
花形以三寸横ニ寸八分也又サスガ穴ハ表
ヲハ花形ノ中程ヨリサ上ニ明ル又内ノ下
リヲハ衆人ノ足長ニ可定ニ

一馬轡ノ事長サ九寸後ノ廣サ六寸前ノ
廣サ五寸同背息穴徑リ二寸ニ可明
腹帶ヲ結通也

一泥障ノ事豎一尺八寸同横モ一尺八寸ナリ
雲形六寸ニシテ花形ヲ指渡ニ寸八分ノ口
ニ付テ緒ハ三尺六寸ヲ二重ニトリサスニ
又泥障ノ下ノ角ハ十デガタ三口ク可切又
上ノ雲形ヲハ兩ノ端ヲ及シテ少シ九寸
切ヘシ

一押掛ノ一鞞ハ組違ヨリ先四尺尾狹ヨ
リ組違一尺二寸同總長サ六寸ニ割ハ
長サ七尺實珠穴ノ坪三寸二分也總長
サ鞞ニ同シ又靴ハ髮懸ノ向六寸同
轡榻長サ一尺六寸ニ定同小紋モ同尺
ナレヘシ又露ノ坪ニ伏ニシテスヘシ又
轡榻ノ總モ長サ同前

一鹽手装束ノ緒三尺六寸ヲ二重ニ取テ付
テ三伏置總角ニ結下ル也同總角ノ兩
締モ三伏宛出シ結也
一小中間ノ緒左右正ニ七尺五寸ニ折テ付ル
也付所ハ銜ノ坪ニ付ル也

乘馬秘傳書
觀夫御術六藝之髓一也治亂
兩世斤時每不用之文武二家一
人每不學焉矣就中強專武志
命也故諸侍一是習之然生平
遠干極得之者億兆而一也不得
則無利軍因以和漢之諸賢用
巧具為御助世名之云軍馬法
有法必有流干茲諸流疑多
不可勝才或多具或持具於乘

數作於下振臂仍之其象其下
更不易夫當家本出於

聖王自王之軍御未行干切士之畧術
是以雖小器如空之尤又至溫真則
每物兵然傳之者雖如女人小兒乘
馬自在也

乘馬武功覺

- 一 馬日之歩のり
- 一 馬より歩のり
- 一 細道より歩のり
- 一 二重服のり
- 一 力草寸尺のり
- 一 小服帯のり
- 一 三尺鏡のり
- 一 鞍ふ廻はのり
- 一 水口之り
- 一 手鏡きこき時
- 一 服帯はきこき時

一 力草切しる所ののり
 一 歎切しる事
 一 面懸きりしものり
 一 澄きし所ののり
 一 前痛痺きりし所ののり
 一 後痛痺きりし所ののり
 一 奥に痺きたりし所ののり
 一 奥に痺きたりし所ののり
 一 早く馬よりりし所ののり
 一 早く馬よりりし所ののり
 一 芝ばあいののり
 一 忍びてくる所ののり
 一 目まきののり
 一 横うらやまきりし所ののり
 一 細道なる所ののり
 一 細道なる所ののり
 一 大海虎ののり
 一 暗板舟道りののり

一 ときりし所ののり
 一 早く新よりののり
 一 山乃きりし所ののり
 一 笠入派流しる事
 一 河波しる事
 一 河波しる事
 一 河部しる事
 一 止りし所ののり
 一 舟を白ひののり
 一 久友母よりののり
 一 了素しる所ののり
 一 恵利しる所ののり
 一 人と素よりののり
 一 務戦はる事
 一 組討蹴しる事
 一 馬上太刀板ののり
 一 同太刀板ののり
 一 以流納ののり

- 一 目洗納れ射ら湯洗納れのり
- 一 歩立取らひのり
- 一 毛道馬飼養生のり
- 一 付とりむ時と同一
- 一 毛道馬中とりのり
- 一 鞭むちのり可待たのり
- 一 毛道尾しのり
- 一 毛道ま背せ取と取とのり
- 一 毛道ま我わ家か草くさ部ぶのり
- 一 毛道ま毛けににるらのり
- 一 付つ居い全ぜんのり是このり毛けをを
- 一 強つくく馬ば体てのり
- 一 汗あせ見みのり
- 一 息いき合あのり
- 一 息いき多た成な付つ体て無む毛け生せいのり
- 一 極ごく過くわ付つ心しん持ちのり
- 一 上かみ中なか下したのり汗あせ倍ばい能のう毛けのり
- 一 廻まわ馬ば出でのり

- 一 荒馬止あらいのり
 - 一 燒や深ふか中な中なのり
 - 一 了り成な場ば多たににううわわ駮ばのり
 - 一 一切いっけつのり痲まとと歩あのり
 - 一 首くび取とのり
 - 一 馬うま上かみりり毛け池いけのり
 - 一 貫くわん毛け通とのり
 - 一 舍せ人にん毛けのり
 - 一 横よこりり池いけのり
 - 一 毛け取とのり
- 己上古傳七子行

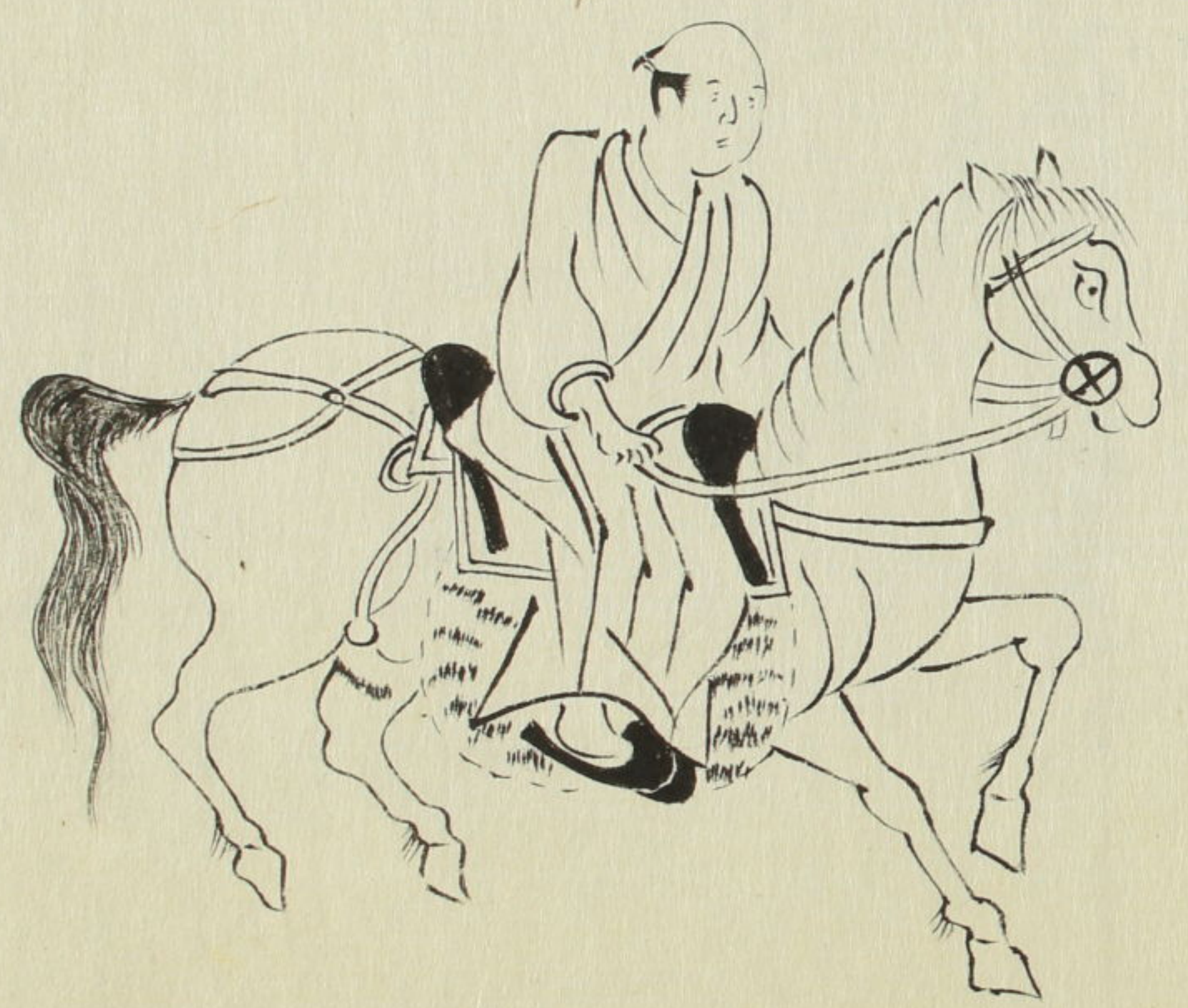
一 小笠原政長の同長基所傳と稱
 一 鹿ノ馬との立貴人にて中一
 一 治牙先向成とせし初は右と名
 一 之後押止し後とせし相
 一 いふふりし河之御意と侍道
 一 四言成とせし付は右とせし也
 一 先在成とせし事始とあり也
 一 曰見せし付は是能く立候とせ
 一 之はあつかりし中一付目
 一 かり也相取とせし付は河前の
 一 事と河の事とありし中一あり
 一 ありし事と事取とせし中一
 一 軍凍とせし後とせし中一
 一 是ともとせし向とせし相取と
 一 と河目と河所前と河立て入る也
 一 同宗時とありし事と事取と
 一 一人と見せし付は右と馬と
 一 事取と事取と事取と事取と

一 鹿ノ馬との立貴人にて中一
 一 治牙先向成とせし初は右と名
 一 之後押止し後とせし相
 一 いふふりし河之御意と侍道
 一 四言成とせし付は右とせし也
 一 先在成とせし事始とあり也
 一 曰見せし付は是能く立候とせ
 一 之はあつかりし中一付目
 一 かり也相取とせし付は河前の
 一 事と河の事とありし中一あり
 一 ありし事と事取とせし中一
 一 軍凍とせし後とせし中一
 一 是ともとせし向とせし相取と
 一 と河目と河所前と河立て入る也
 一 同宗時とありし事と事取と
 一 一人と見せし付は右と馬と
 一 事取と事取と事取と事取と

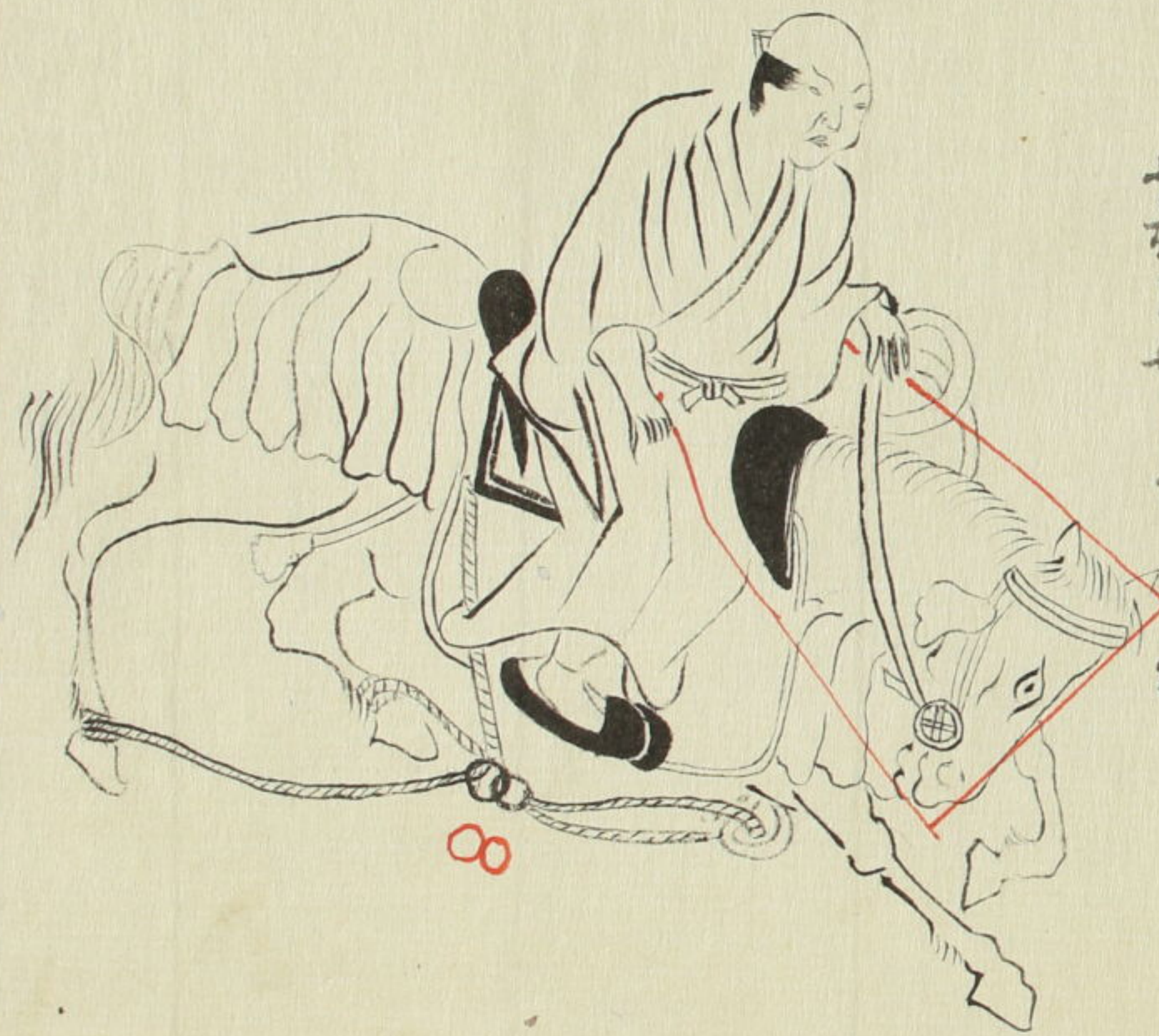
昔のふかき弟子が合はる調ひの
いつてもいふほどよく有る所
あり

一馬をなすのうら一腹をさ
すも思ふに自覚あるは
ゆて庭も悪く又いふを
るわらう一腹をさすか
あり

一馬のうら一腹の梅あり人
の馬とせむの先いふを痛と
いふ一馬一腹の梅あり
入るを腹をさす一水けさの
すく一腹をさす一馬との
月をさす梅あり人
ふかき一馬の口梅あり
小角といふを腹をさす
あふかき一馬をさす
は如前十日と廿日と又廿日と



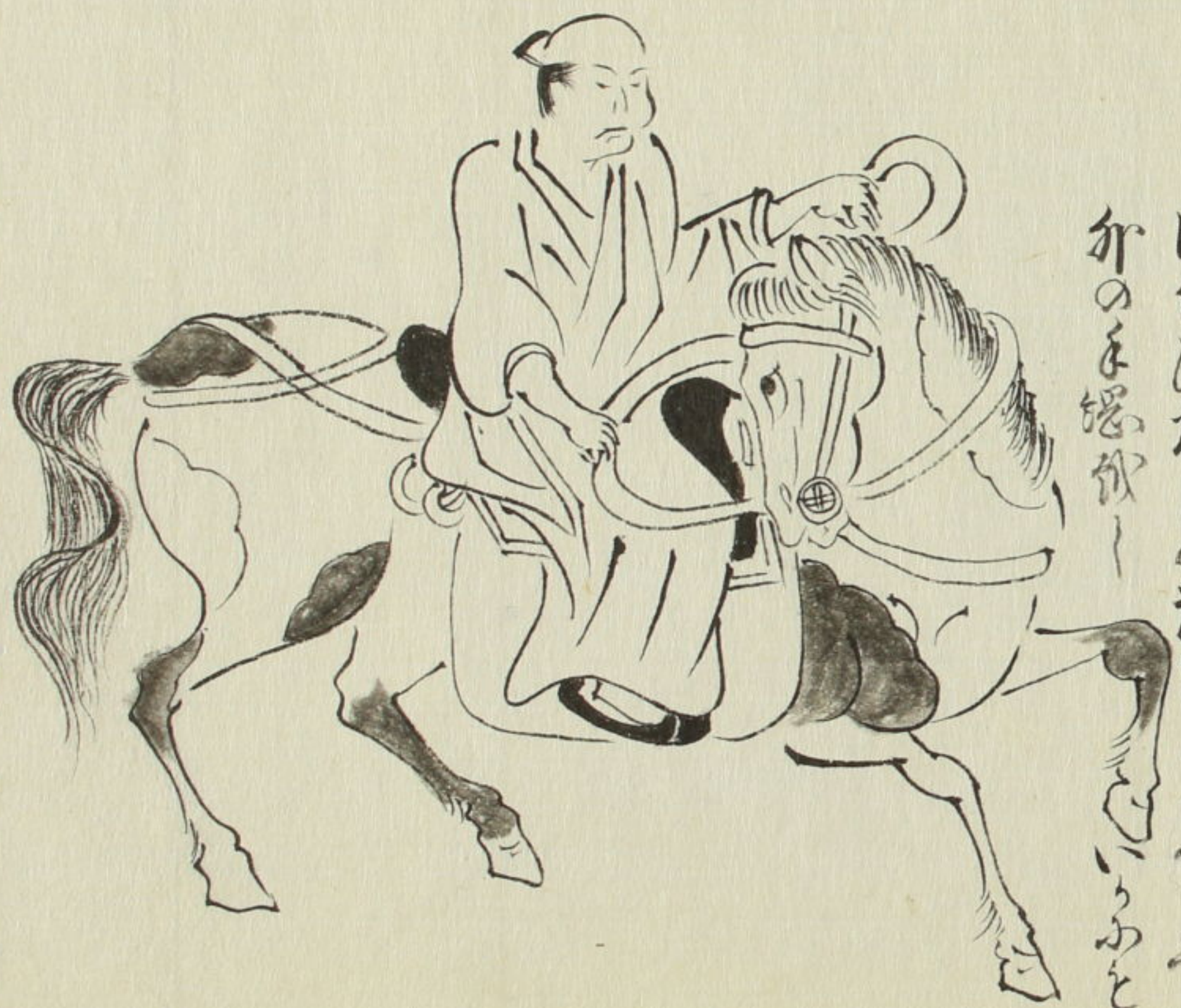
居りし物にせりしたる
いふとありしは梅あり肝
要也大方初心ならぬ
あり



一は福馬とはよくしてゐる也
 味うらむし曲のちうけと口
 強しを押しとる家の也これ宛
 とあつて角をけりて目を飾り
 首つゝ何と好目の飾り肝意
 少なりや〜糸〜口信



一何れ馬の首ははり筋の鏡とらすし
 上つて右は口流しに〜も〜午能〜か
 此〜も〜上るものしや〜海〜く
 あ〜も〜と後〜も〜流〜と〜も〜知〜る〜も〜
 何れ〜も〜も〜筋〜より〜筋〜と〜あ〜て
 三根の〜も〜お〜を〜思〜ひ〜こ
 と〜あ〜つ〜あ〜る〜筋〜と
 い〜も〜筋〜前〜筋〜し〜も〜筋〜
 あ〜も〜筋〜し〜も〜筋〜
 筋〜し〜も〜筋〜
 筋〜し〜も〜筋〜



一 大馬の真ん中を走らせしむるは
 是と云ふべしそのうちを
 大角のらと云ふはれいふはあつた
 るも皇子の批かてもあつた也これ
 目付は右目の指差乃此と見
 介の手鑑也

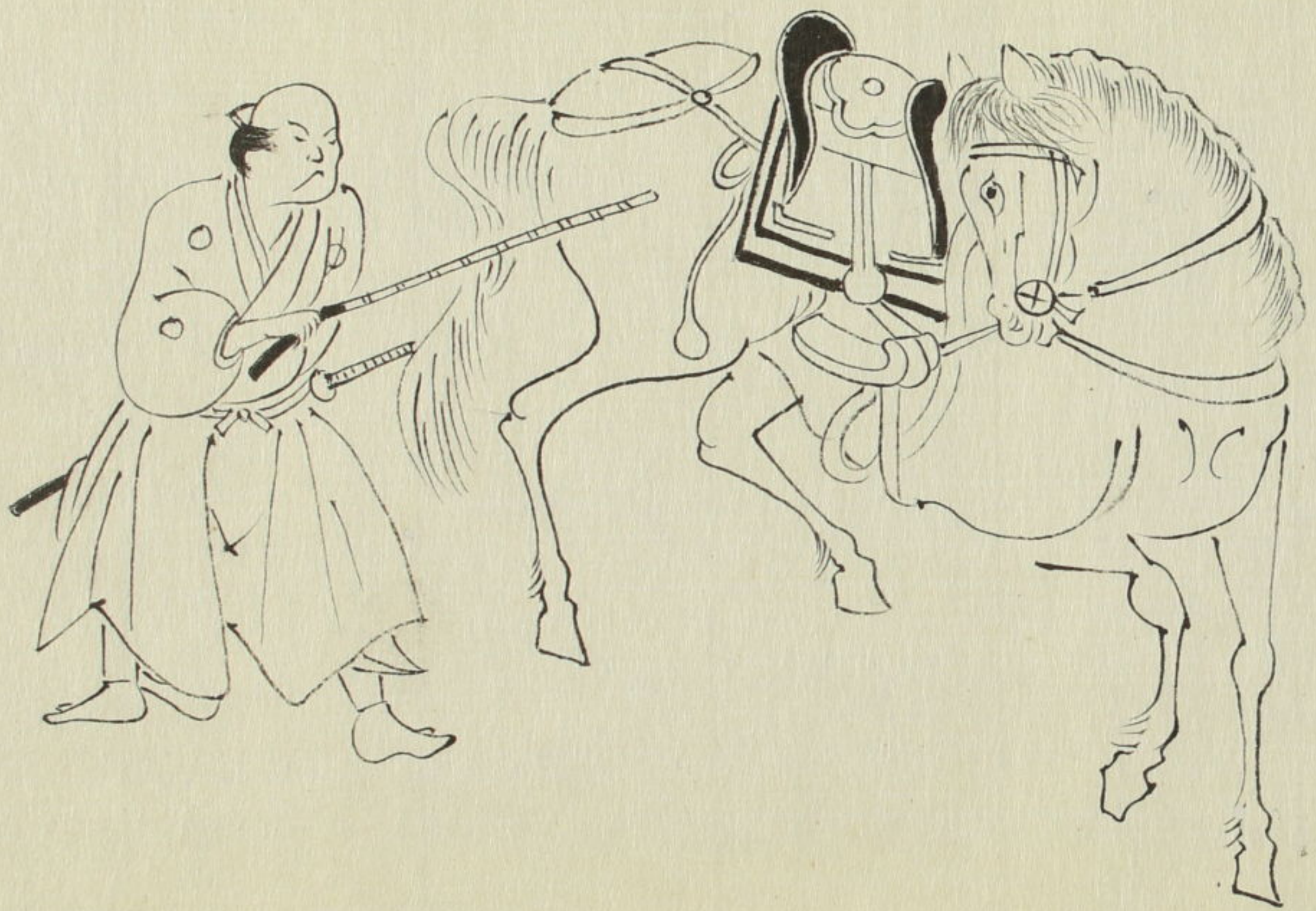


後男

一 小角の夏山等のとく痛どりて
 右目をもと移しけしは後男
 前痛にかり小女みとけしおの
 手鑑を執り板中といふも強
 押し梅壱一内
 指手のたつ梅目付
 是の仇
 了ん

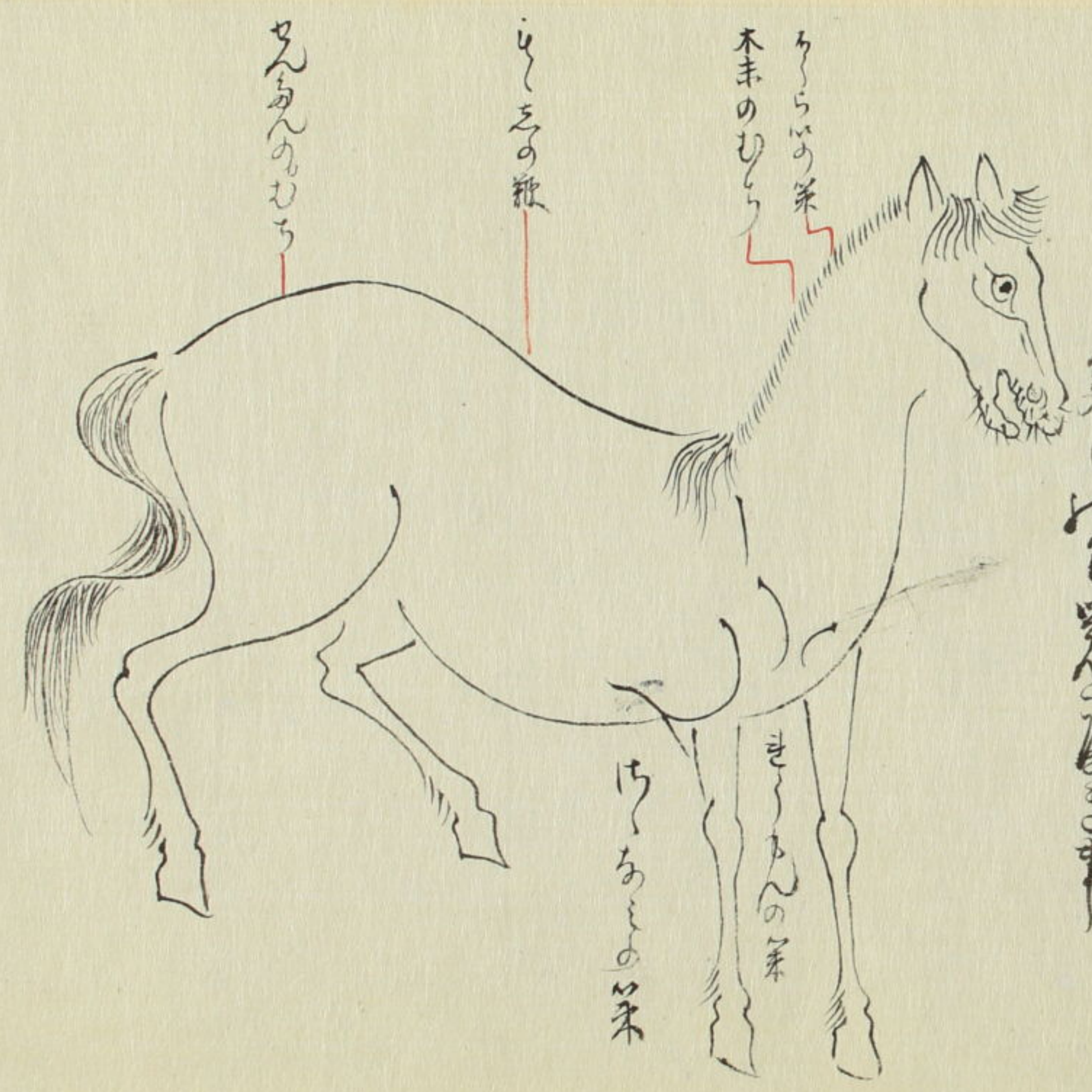
はしり押と内乃手徳と見は後
の培子のわざは梅とあつて何と
目付肝要也

一 手徳好といふ梅への好行といふを
強きと教くおせ免て其後手徳と
被と腹帯よりみゆり作と籠と
尚と進とをいへばは後
しと伏其後強き方(好行といふ
て代手の内乃勅と志早と仰と
一)又踏もとも免はもるれんか
さ哉と付手徳と免とをいへば
かハ腹帯(帯)ててて手徳ありと
あつて付じりと梅とあつて
ゆり手徳よと免とをいへば
好行といへばは後
さ方代手 梅といふと



一これと行はばよき事なり繩を
 こゝに後ふ人ふひうへとえかひか
 引くも是も五日と十日と五日の
 分かくせむとハ強き方揃か足
 めこの強さを引くを強
 筋中おあつてこれと強
 其後手つてさやうと強
 一これかよ七五といふはこれ
 強き方ハ七五にねを強き方ハ三度
 ねつては強き方ハねつての強
 三方への心りあはれは強き方ハ
 ねつて強き方ハ内も強き方ハ
 ねつて又よれりてはねつて
 のとつては馬の力とねつて
 先を強き方ハさう強き方ハ
 こも馬強き方ハ人強き方ハ
 強き方ハ強き方ハ強き方ハ
 月日と強き方ハ強き方ハ

本手ふあつては強き方ハ
 多しは強き方ハ強き方ハ



一かくとの強き方ハ強き方ハ
 相目と強き方ハ強き方ハ

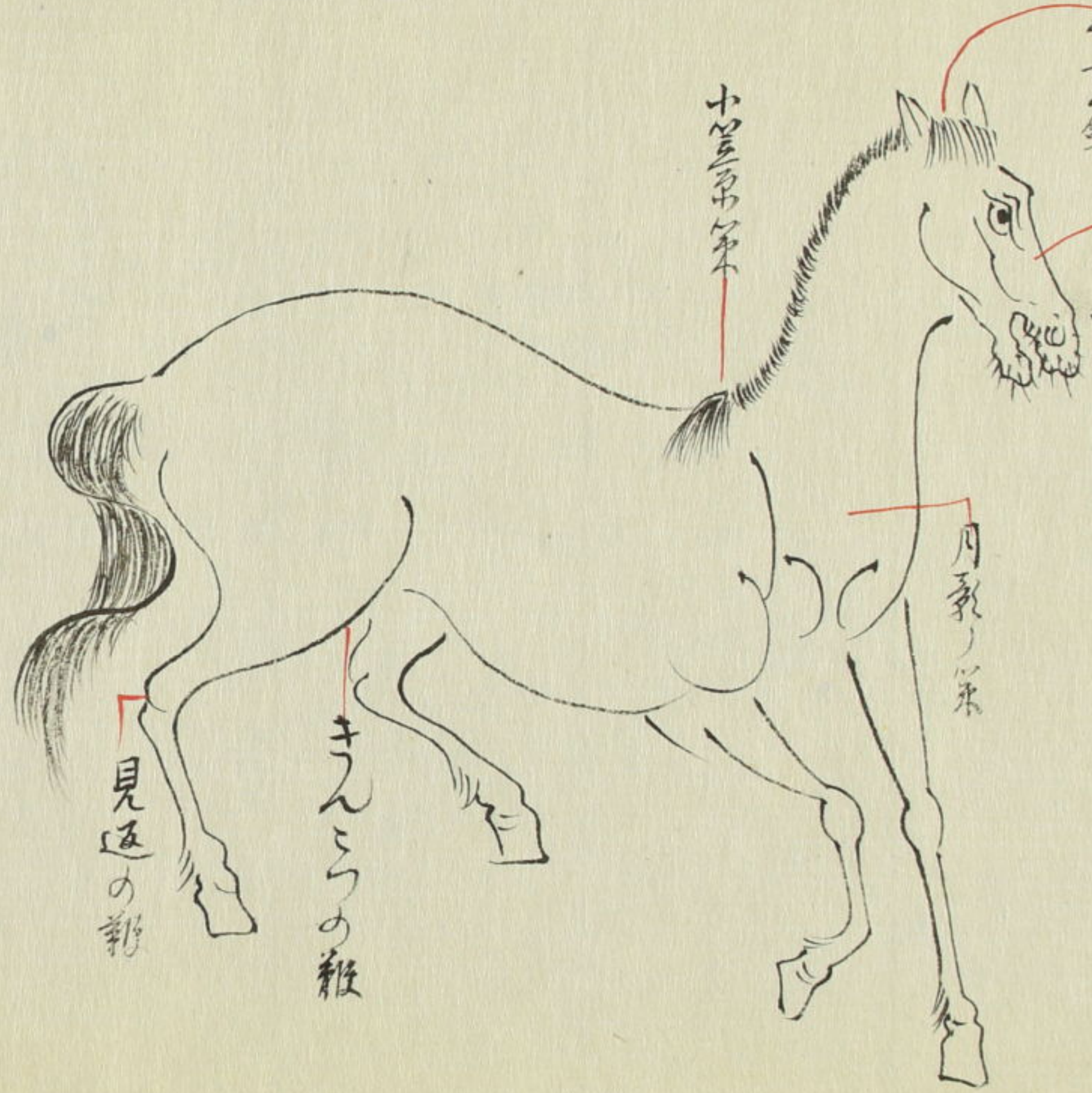
わきし〜ふんふん〜くもの

竹葉の集

かみ殺山嵐の集

月影の集

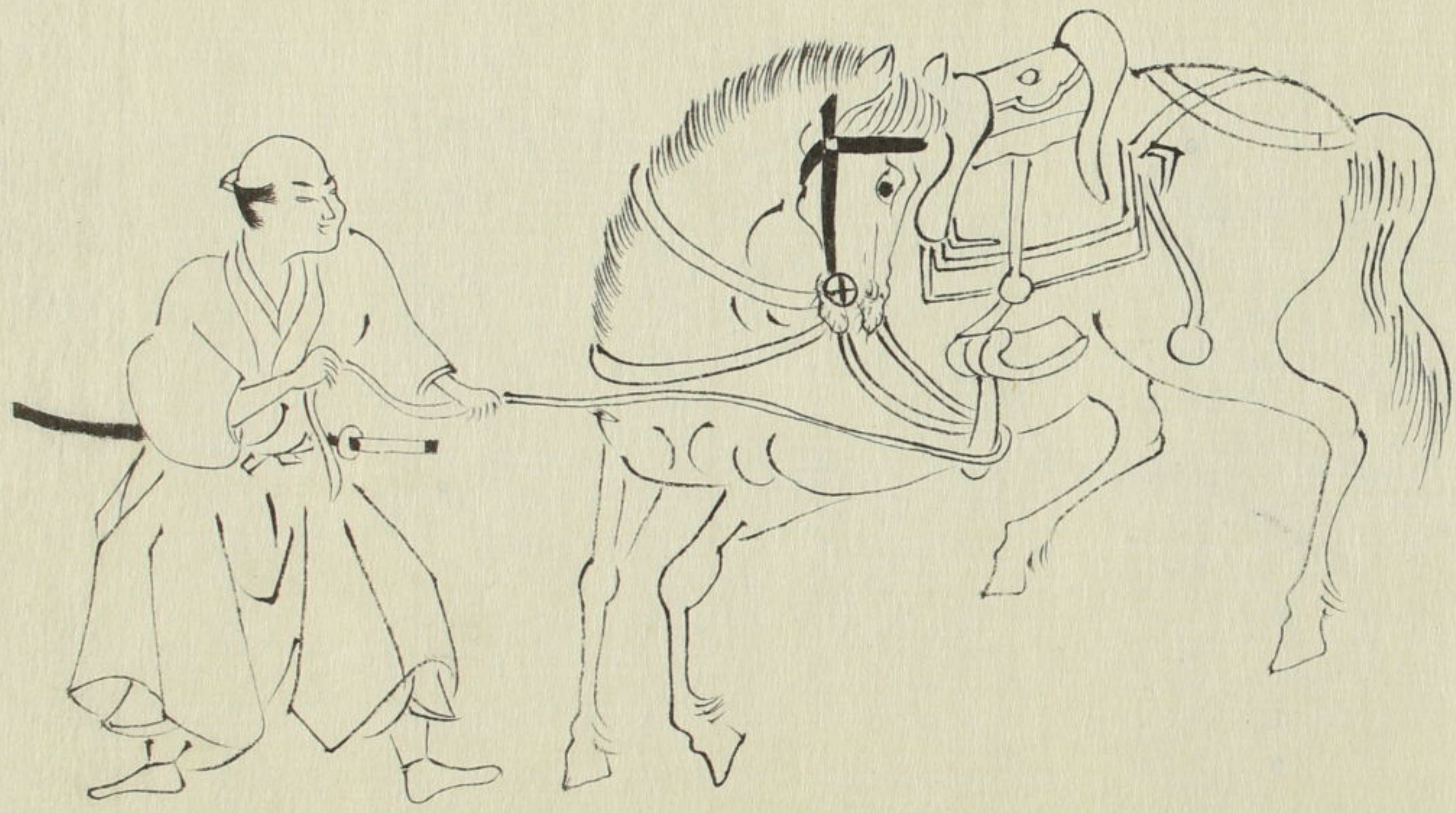
小笠原の集



一度き海たりきわが城まもるわ
る成能く獲るまか〜勢とく

宗太の手鑑と管中ふりま〜取
たのふと難母と悪〜りまを
踏ふりり〜取ま〜
一 宗太(西)ふか付〜るを能くは〜みぬ
沈踏〜あまぬは〜むりて向母り
手鑑と管中に押〜一たは〜ぬ
つりてと〜あまぬ又手鑑よ〜あまぬ
れ〜と〜あまぬま〜あまぬ
馬踏(西)あまぬの〜何もの行見
一 人せれ落り時とる能く〜獲後編
よ〜あまぬ手鑑と〜りまを能く〜り
あてと〜よ〜た〜あまぬ〜落り
は〜あまぬ〜難と〜りま〜一たは〜ぬ
あまぬ





一 此馬を引くは馬の首に
腹を引ぬ一 腹を引ぬは馬の首に
向ふ人よ引ぬは馬の首に
この馬は一 馬の首に引ぬは馬の首に
は馬の首に引ぬは馬の首に
向ふ人よ引ぬは馬の首に
向ふ人よ引ぬは馬の首に
向ふ人よ引ぬは馬の首に
向ふ人よ引ぬは馬の首に
向ふ人よ引ぬは馬の首に



一 これを治るに由は秘すべし此
し〜と書と執出〜手廻の力も小
ちりし〜と書成り也と極よかの手廻
と成りてし〜と書〜又直に
と書〜何れはけり〜と書〜
中洞と執出時也と極よ〜と書
と書〜人の〜極よ〜と書

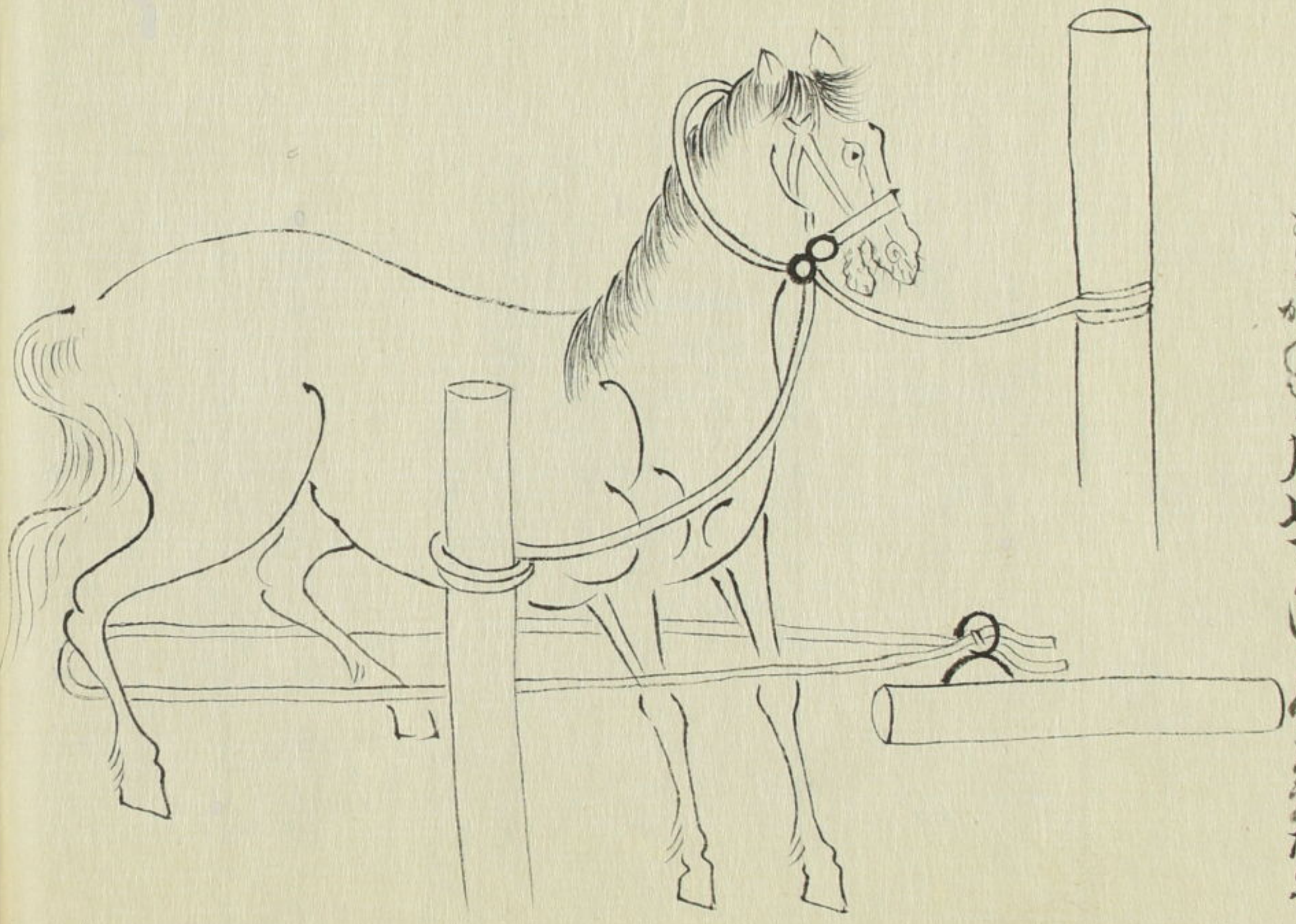
肝要し



一 いらぬと人さのふれたらぬさふき
はふ極と二布立ぬ極〜と書〜
の附人〜してゐる〜是と四面
又方の口ふ〜り〜書〜一極あや
〜成り初ぬはた人〜と書合と
〜極むふたもぬ〜と書〜
是極極〜し〜の書也何とひ〜
もの極の〜と書〜極と極と〜
〜と書〜二〜と書〜
〜と書〜二〜用也〜と書〜
〜と書也

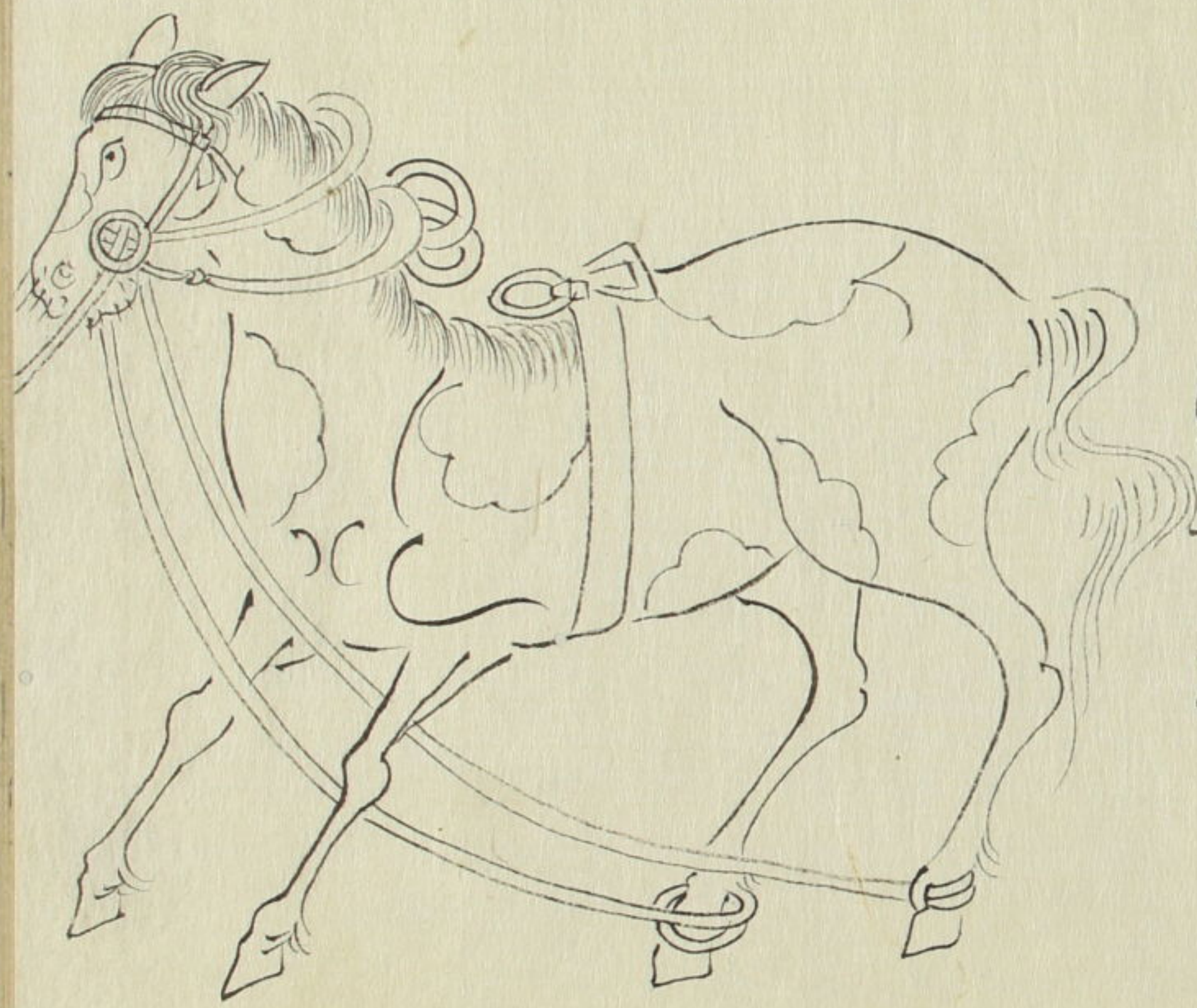
一 け馬の極は書〜極い〜と書〜
〜と書〜首〜と書〜極の〜
〜と書〜と書〜と書〜又〜
〜と書〜
〜と書〜
〜と書〜

先とて一々の所々用也
 さらば子と用也るけり
 なる後たの



自然にけぬらん
 徳あるのこは
 一と前足の中
 石の方と右
 ぬの端とさ
 引一筋

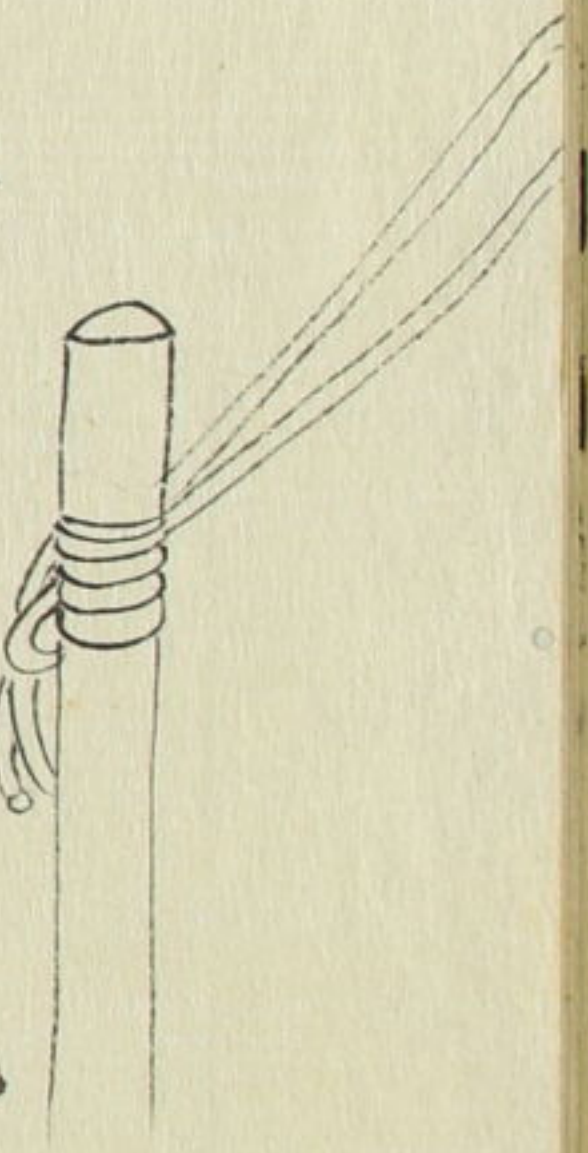
一
 一
 せは
 何
 花
 前
 又
 け
 い
 只



此等は腰帶のとり合ふ一馬
 ありては馬一匹の徳あるものなり
 ともいふなり而といふれども
 むしひは也同書に九志繩と云
 ひまひり一馬爲とも云ふ也

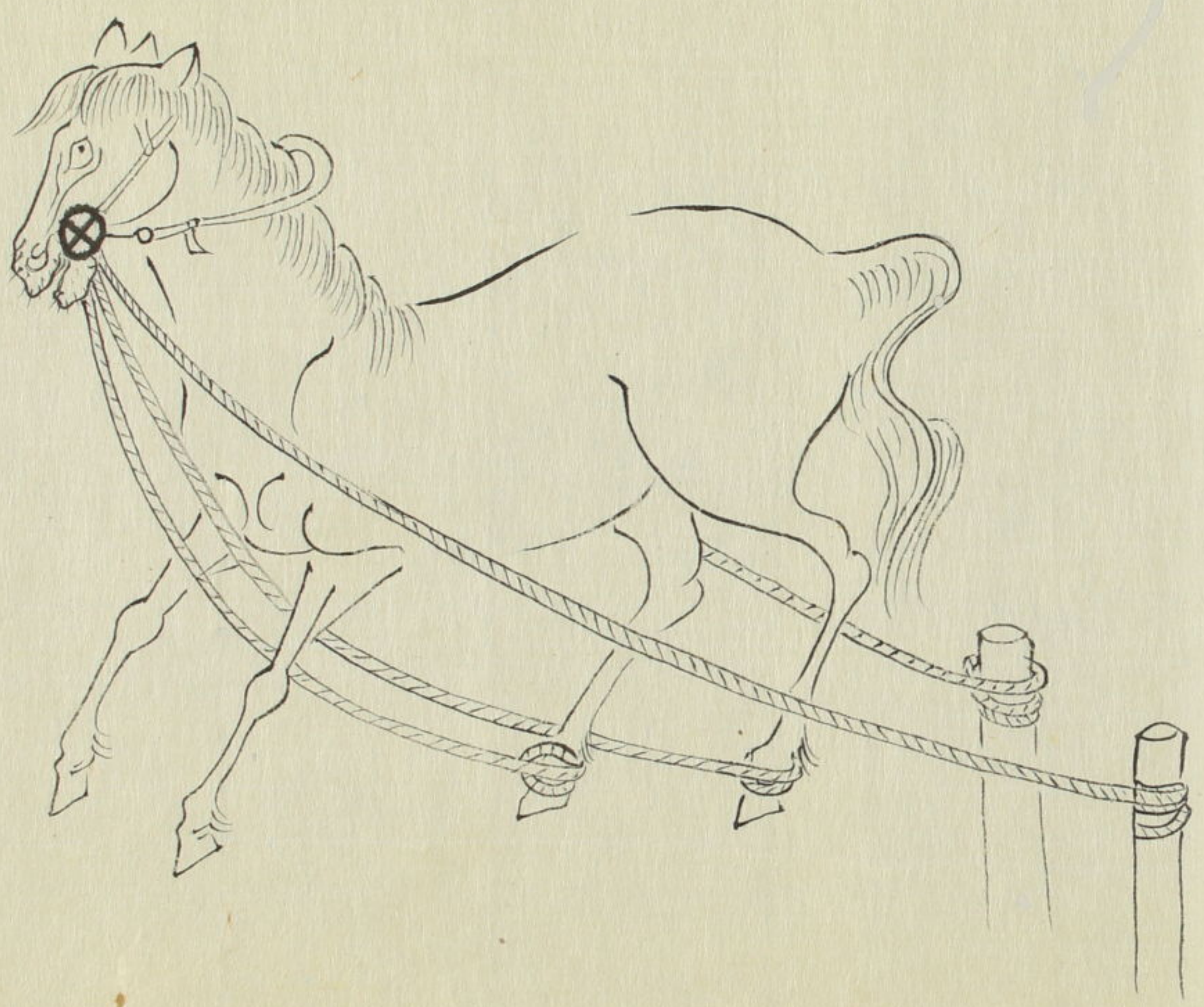


一は繩よりなるものなり
 痛し胸腹帯より合をとり
 繩といはれども首よりかけ
 ともいふなり一馬爲とも云ふ也



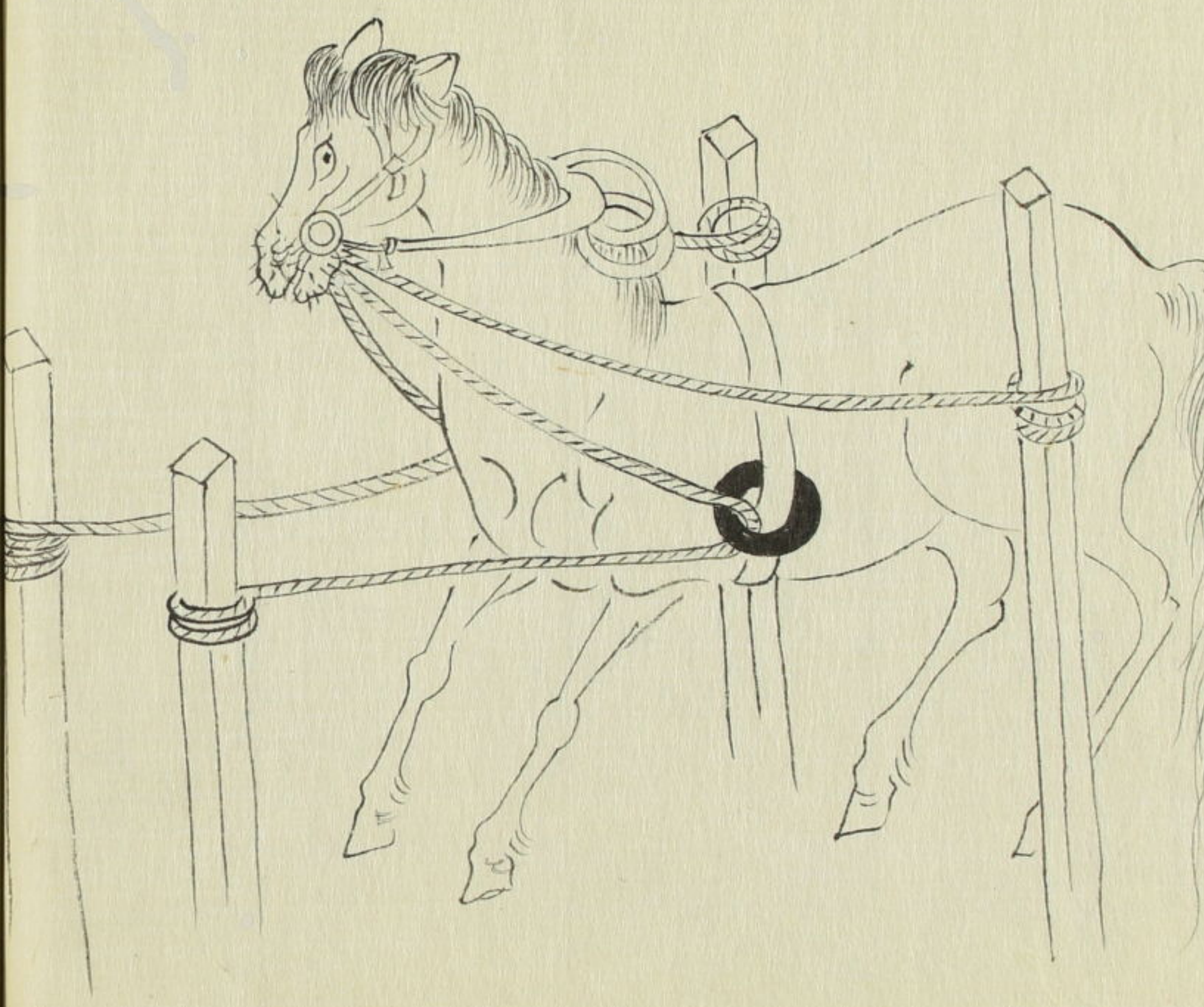
一是人の馬を引る用の繩の二
 筋用言とて一筋用を止す處
 向道出し一筋を止す處と
 無て後を引て後ほど前を引
 と打つ是の馬を引るより
 引半打し一筋を止す處
 引半打し一筋を止す處と
 引半打し一筋を止す處と
 引半打し一筋を止す處と
 引半打し一筋を止す處と
 引半打し一筋を止す處と
 引半打し一筋を止す處と
 引半打し一筋を止す處と

此等もはつと



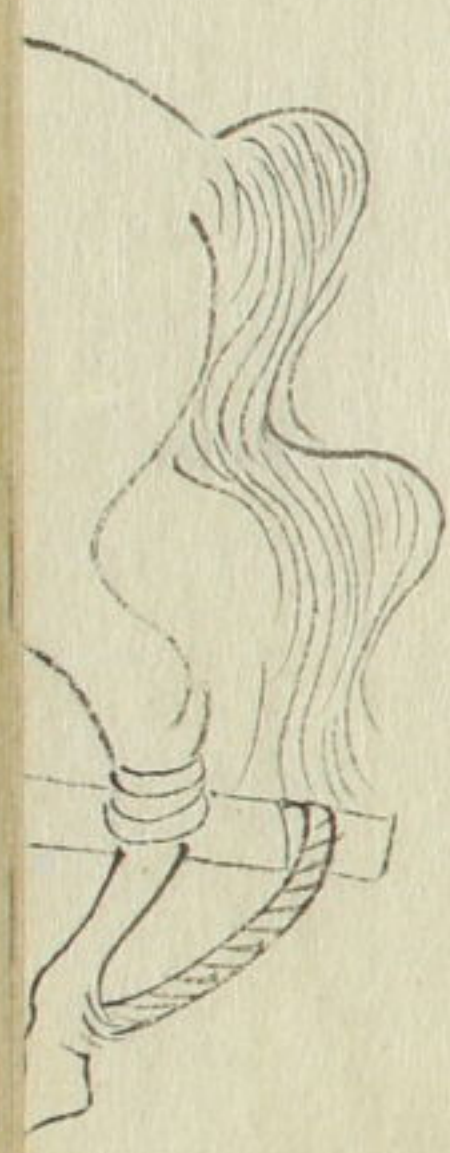
一車小馬を引る用の器具
 此等もはつと

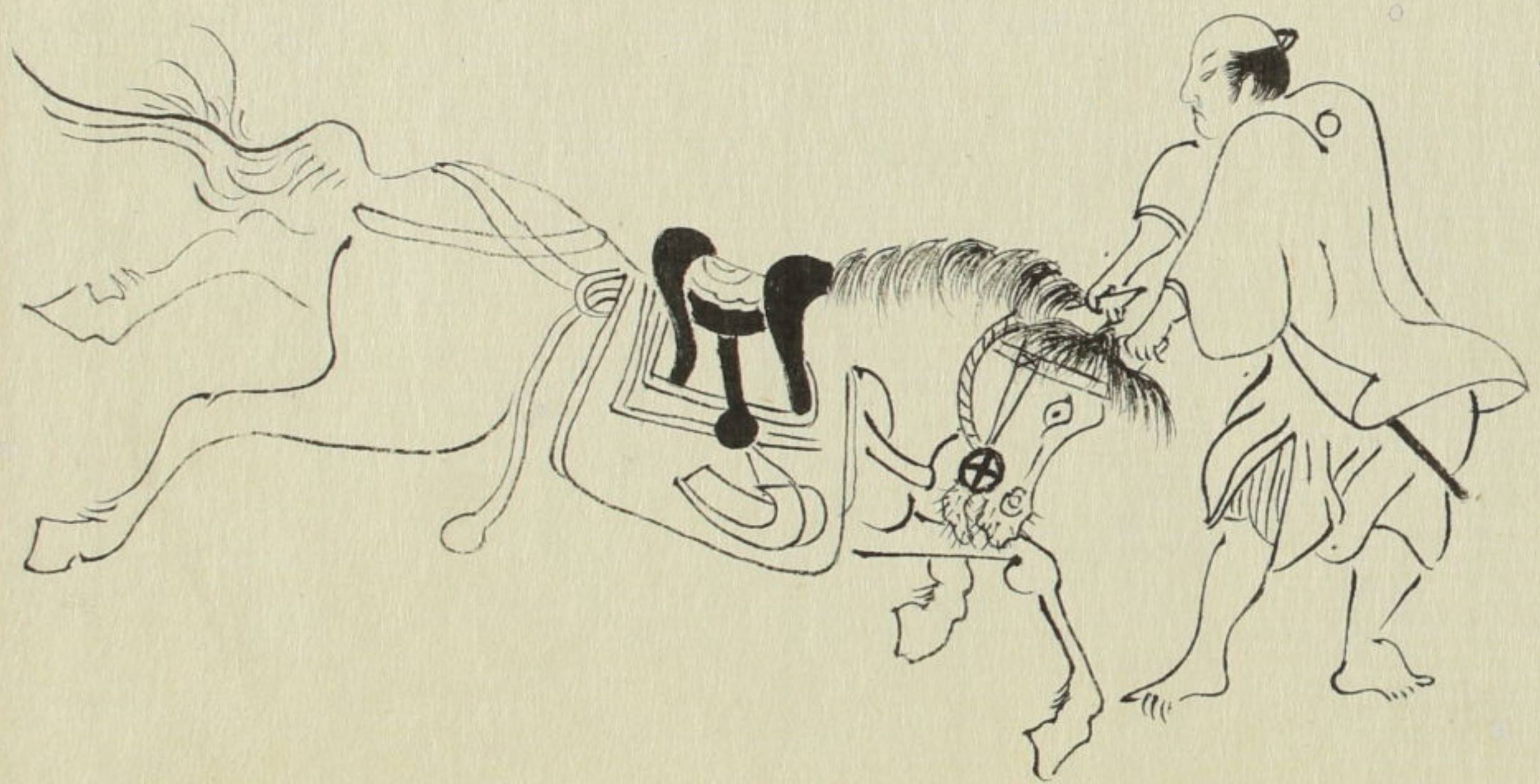
こらう流と教多用をて一秘
 也遊下柱と四布之儀果の
 了の腹よさらう流と二の付柱の
 ちねん流をけしけしと電の



九つ五つて取腹帯のこらう
 一 向乃柱下留は一繩を
 二 師は是とがら此手繩を流
 てる一 ち流梅て万の物え
 馬とけ向したとせ一 電の
 くら一

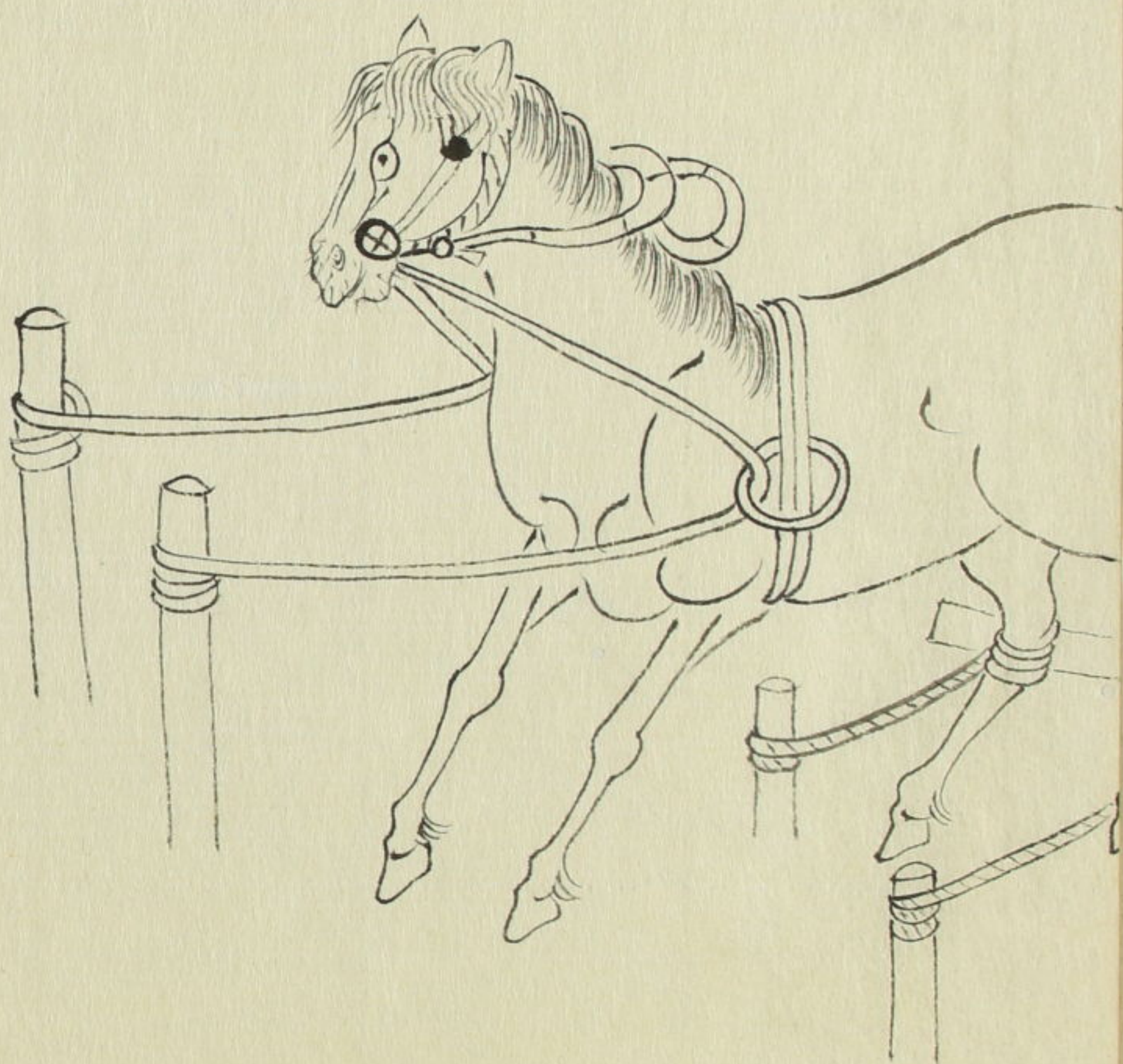
一 せれういといふ子流也あよ
 難さうあいて踏く流川は後
 一 せき老たよ一 一 流下
 中てたら一 也是も腹帯ふ
 くらう流二つ付流一 解て
 一 筋なるを流のこらう首へ
 息くみえく通一 ち流あわ
 是も子流あてむとらあ利



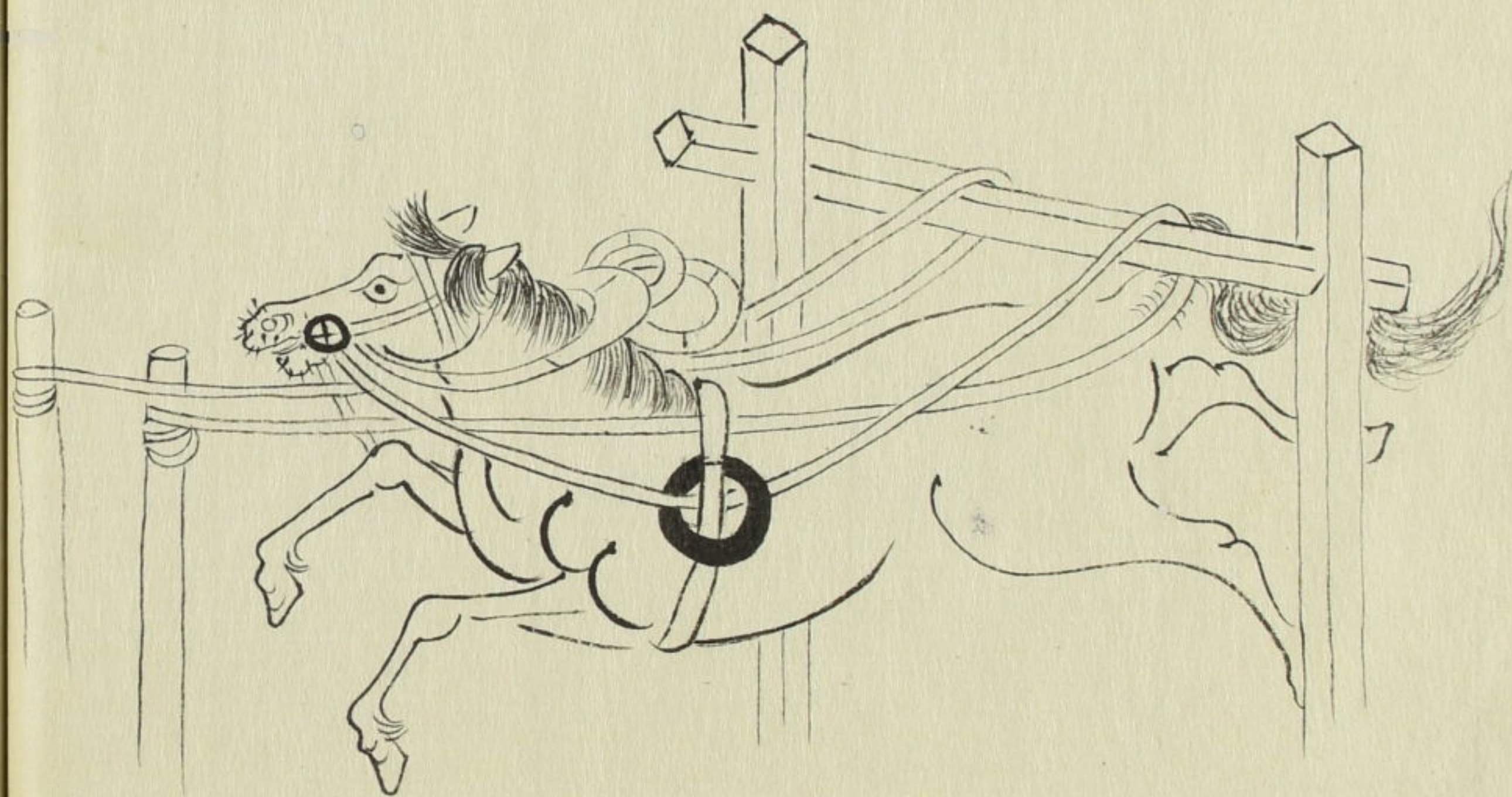


馬車とていふ所のせり馬

一 馬を引つゝて馬とていふ所の
 せり馬とていふ所のせり馬
 はなはちうまを引つゝて又細
 馬を引つゝていふ所のせり馬



一 是に上馬のふり籠まはと立



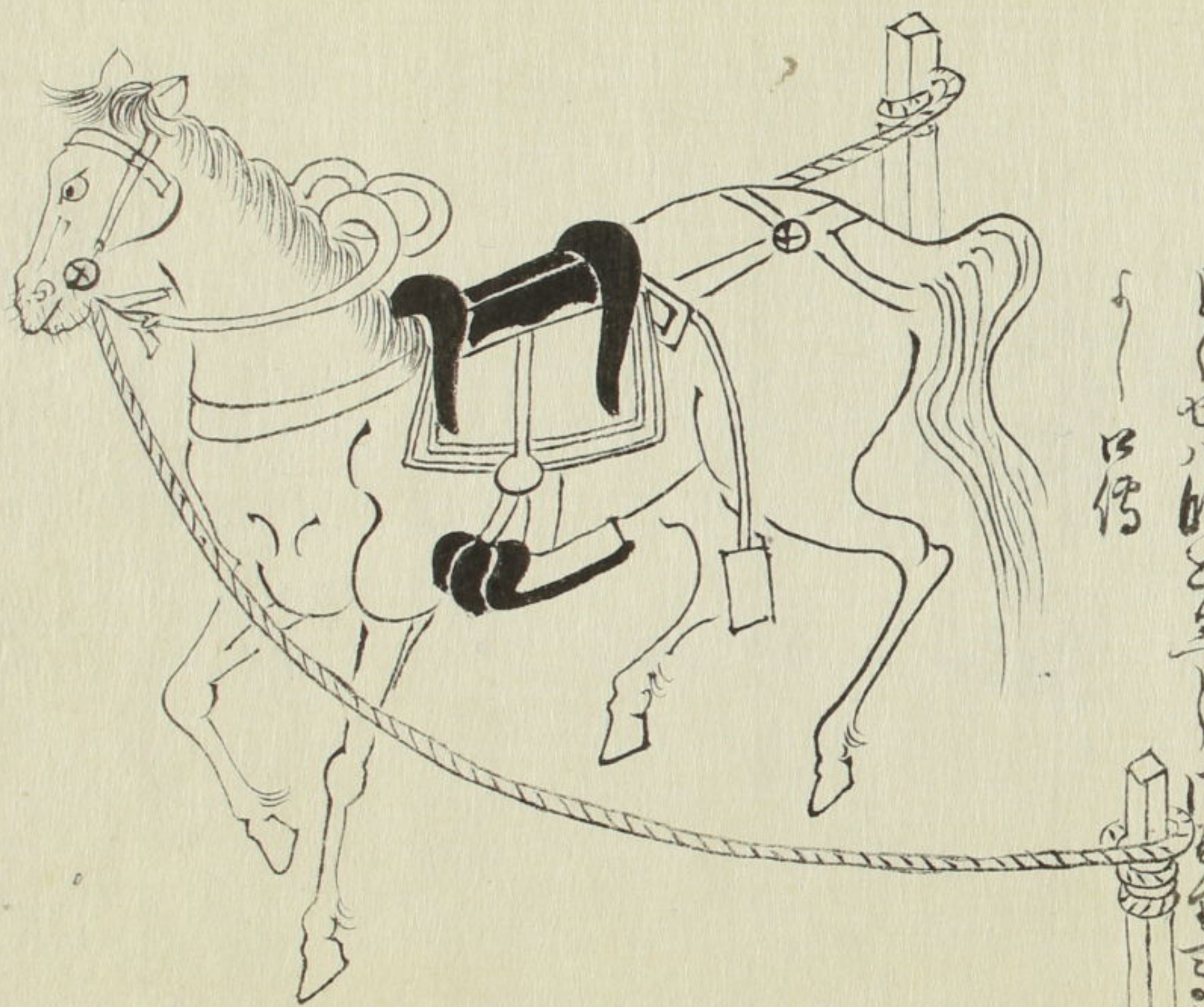
つゆよとれいふゆふに柱より
追出し〜は〜是も腹よ
まのけはと二つ付し籠に二海
二人し〜むひよむり入る〜

一 ちり〜の曲馬乃中おもきめ
ちりちりほ〜してせし首め
はちあ馬とわゆれれをよ
めてあ方〜もあ〜は先是
と〜して 自徳と首のろく押
又しげし〜書二のはち一口の
よ〜し〜は〜の風を
時〜は〜



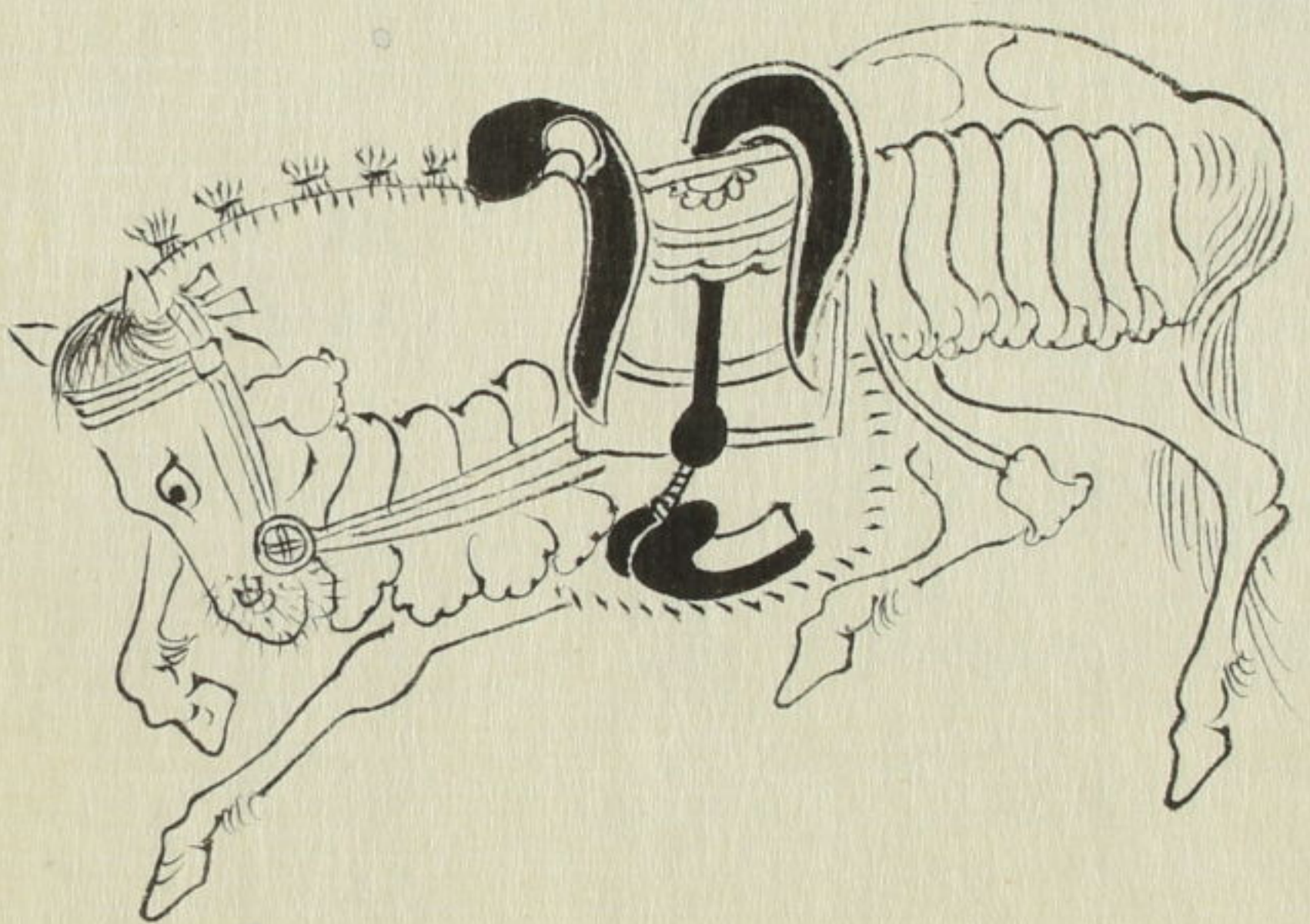


一
 け指鹿置我手調也流の
 手懐あゆ一ころあち口ころま
 又いふをさふと能くせりて位と
 ありけ全意別何由あるとたゆせり
 てそたれ但馬より流ていふは
 手流とさすて指儀と一由あり



とる乃自由小方一を在まはやく
 一一一〇ハハ手流と一首とぼけり
 せしてぬるまあまのし何も餘ある
 一七ハれとま一一日たもとま
 一は傳

一 まつゝふらふらと打撃たへ手鑑と
 とるに腹背一途一後の後手鑑と
 いふと門清をまらぬす一ひ
 むとあしやうもあつゝ板馬たふ
 手鑑とゆゑしまるあつゝ板清と



一 ねもろしといふ手鑑之首のつぎ
 了ふよ一あつゝ手鑑といふれ
 清と結一前足の内ととと鑑と
 けを門清とりのをほりすよ本
 切鑑と一みと持て引ぬ一
 あれハ手の内を引るをたれ
 ありけ清とと家附ハ足鑑乃
 而と二三寸斗布を巻きて其ハ
 鑑と結一こ色ハ其のつぎ
 記たりけを





一 手綱乃事 教多をり下も拾亦み
此を以てあはれもあはれなれしもの
にぬい馬形より中なる

一 佐原金 一 権將

一 二口曹 一 二人衆

一 半指輪 一 打切手徳大掣

一 怪の轂志んここれ馬よけ一り
手在中田が志まきぬるふを
手徳とう志心は持け轂と志
をらむるゆりかふまうせゆり
りまうけ

一 ひやりの轂布首あ(中)玩

一 下打を採るふとせぬを

一 下打あし乃轂志さあ(上)衆
けけ

一 うんりの轂垢志と轂志ま
け

一 志もせんの轂人馬ふけ

一 漆苗千の轂尻足きりゆり
け

一 尻の兼乃騰喰ふけ泥と踏也

一 志乃轂は志ぬるりけ

一 木末の兼川がふけ

一 志乃兼人け志んこ志ふけ
け目とぬう志志り

一 極一の轂首こく志り
け

一 稲妻の轂木けりて雪首治よ
けぬを

一 鞍の寸人一人八寸分 二人七寸
五分 二人一寸分 二人一寸五分

一 茶筒寸法前より五寸五分下
一寸五分

一 馬刀三入一寸二分 口部一寸五分

馬法之部

一 馬ヲ乗初ル夏周武王於千德山御狩ノ時
山岩壁之間ヨリ猿青毛ノ馬ニ乗テ出帝
ノ前へ来リ下馬シテ申ハ我ハ此山ノ猿ノ
長也此度ノ御狩ヲ止免シ玉へ此歎ハ馬ト云
テ天下ノ重宝ノ乗物ト云テ獻ヌ因茲狩
ヲ止ル其馬ニ弓弦ヲ外シテ手細トシ
矢ヲ策トシテ武王召シ王宮へ皈セ玉ヲ
夫ヨリ因々ノ山野ヨリ馬ヲ見出シ都へ捧
テ諸人馬ヲ乗夏習テ戰場第一ノ重
宝タリ

一 將軍家若君御誕生ノ時ニ進上ノ御
馬ニ青御馬上ルモ右ノ台吉也手細七尺
五寸モ弓弦也矢ヲ策ノ寸トスルモ右ノ根
元也

一 馬ノ手細ヲヨリ掛ルニ六弓弦ノ如ク左へヨリ
仕掛ル也同乗氏モ右ノ手細ヲ左ノ方ノ手
細ニ打掛テ端ヲ輪ニ取テ乗テ左ノ手ハ其
輪ヲ取手細ヲ小指ノ間へ抜テトリ又右ノ
手細ハ上ヨリ一束ニ取大指ニ一擲カラシ

是モ手綱ノ端ノ余ル処ヲ端ニシテ持テ可乗

一 馬ニ乗身形ノ古又腰ヲ居テ蟻ノ戸渡ヲ居ホニ當テ兩股ニテ鞍ヲ按立鑿ノヤナ井ハヲ是ノ大指ニテ按ハ文字ニ踏テ手綱ノ心ハ指先ノ上レヤク所要也伸引更ハ肘ノセ井力服ニ付ルニアリ同目付ノ更ハ馬ノ兩耳ヲ間ヨリ向三間ヲ見テ可乗糸々口傳

一 射方ノ手細更手ノ内ニ十文字ニ人指ト中指ニテ取弓ト持添ル也追搦テ射ルハ弓ヲ横タ伏テ矢ヲ用テ射ル又左右ノ時ハ手綱ノ取様口傳有左ハ右手細右ハ弓ノ本若ヲ右へ返シテ左手ヲ仰テ弓ヲ取テ引ナリ惣テ手綱ヲ取テ射更ハ軍陣犬笠掛流鎗馬狩ノ取也取亦馬ヲ立射ル取ハ手綱ヲ納射ルナリ

一 兩木鋒ノ更是ハ急ニ前後へ誥タル敵ヲ防ク爲也故ニ鞍ノ手先ニ入テ嗜也夫尺二尺ニシテ跡先ニ沓表ヲシテ其中ヲ四寸古糸ヲ以テ美跡先ニ根ヲ指テ後ヨリ誥ル者ヲハ是ヲ拔テ打前ヨリ誥モ同シ根計モ也振ト拔ルヤウニ指也一番ニ打取ハ一方ノ根ニ手ヲ半分掛テ篋中ヲ握也打根ハ馬上ニテ一入用ル也

一 馬ヲ見立ノ更口ノ廣ク鼻ノ穴大キ成ハ名馬也亦トモ骨高クテ前足校キハ早足ノ馬也亦早足ノ取前肢ヲ耳ノ上ヨリ越ヤリニ折ハ早馬也

一 馬ヲ乗大更馬ヲ我カ身ニシテ馬ヲ乗午ト可思少モ馬ニサカラフ古又不可有自馬ノ生レ付タル曲アラハ是ハ考テ可直惣テ直ナル心ノ馬ヲ乗口ヲ切ツテ踏ニツ鞍ヲ接カク拍子曹切ナトヲスルハ必ス曲出ル也又長乗ヲスレハイヤ心出切レ込テ色々曲出ル者也

一 馬ニ乗テ手綱ヲ取更右ノ塩手際ニテ右ノ方ノ手綱ヲ左ノ手綱ノ上へ折取テ取テ乗左へ其取処ヲ取移シ右ノ手ヲ手綱ノ上ヨリ伏テ取大指ニ搦端ヲ右ニ

取テ手綱ノ先ノ方ハ小指ト薬指ノ間ニ
抜テ扣ルナリ

一 馬ヲ遣ス莫肌脊馬可成嚮韉手綱ハ
急度改テ可出備平地門ノ内ニ引テ出ルニ手
綱ノ水附ノ左右ニ漣ヲ取テ兼方ノ引キニ
取添左ノ手ニ持馬ノ頭ヲ指拳テ持右ノ
手ニ手綱ノ端ノ漣ヲ大指ニカケテ手ノ
甲ニ廻シテ手ノ内ニ握我右ノ帶腰ニ加テ
出ルナリ 其片請取人馬ノ左ニ畏テ居
渡ス方ヨリ

一 礼アリ請取人モ一礼ス備請取人馬ノ左
ヲ廻リテ渡ス人ノ前ニ往跪目顔四股毛ノ
上ヲ見テ扱立テ右ノ手ヲ手綱ノ先ノ方
漣ノ間ニ大指ヲ入テ取申ニ廻シテ握次ニ
左手ヲ以水附ヲ取漣ヲ取直シ三足跡ニ
嚮ヲ切テ退テ馬ヲ引立右ノ引キヲ
鳴スナリ 扱渡ス人ハ右ノ手ノ手綱先
ヲ渡片右ノ足ヲ披キ次ニ水附ヲ渡片左ノ
足ヲ引退テ畏ル備引立タル馬ヲ左ノ手
ニテ兩ノ水付ヲ取同端ヲ右ニ取引廻シ

兼方ヲ見セ申嚮ヲ鳴シ次ニ如前手綱
ヲ取引廻シ跡ヲ見セ申備元ノ如引立テ
御前ニ向嚮ヲ鳴シ其後左ニ突廻シ引テ
平地門ノ内ニテ馬取ニ渡ス也同請取渡ス
人ハ烏帽子青袴タルヘシ兩方片袴ニ
取也兩降片ハ返シ股立可取

一 御代替ニ進上ノ馬ハ河原毛ヲ上ニ莫
頼朝卿河原毛ノ馬ニ召レテ天下ヲ草
割アル御吉例也依然御成ノ片ニ河原毛
ノ馬ヲ上レ何モ牽添有副馬 何毛ニテモ
不苦御馬ニ足片ニ鞍置ニテ上レ如此片
牽出ル上牛ノ口ヲ一家ノ頭牽也

一 將軍義公細川殿ニ御成ノ片小笠原親部太浦
御馬ヲ牽立牛綱ノ先ノ曲ノ処ヲ右手ニテ
指上腰ヲ屈テ右馬頭御馬進上ト申上テ
後ニ三豆退カシ嚮ヲ切々シテ次兼方ヲ御目ニ
掛次ニ尾ノ方ヲ見セ申テ如前引立テ尤ヘ
突廻シ御舎ニ渡サル也 此次ニ御引副ノ
黒御馬大館兵庫頭御前ニ出テ手綱ヲ
差上テ御牽添右馬頭御進上ト申上

後(三足退テ象方ヲ御目ニ掛正^ス向
テ引立左ヘツキ廻シ御舍人ニ渡ス也
御馬裝束ハ梨金ノ鞍鎧ニ白切付紅ノ
厚総掛手綱ハ取添ヲヨク掛タリ取添
ト梅ト浅黄也亦御引添ハ銀覆輪ニ
桐ノ散紋ノ蒔繪也金唐草ノ切付白
総掛紅ノ手經掛上ルニ

一 同御馬屋道具是ハ細川殿ノ舍人大庭へ
持出 公方様ノ舍人ニ渡一番^ニ洗嚮^ニ番^ニ
馬柄杓三番^ニ馬衣四番^ニ追繩五番^ニ鼻皮
六^ニ止綱七^ニ腹掛繩八^ニ鼻捻九^ニ馬柳
渡ス何モ左手ヲ下ミテ右手ヲ上テ取
左ノ足ヲ先^ニ踏右^ニ披テ道具ヲ持渡ス
右足ヲ向^ニ踏テ渡也詰取方ニ向シ是ハ
舍人ノ業ナレハ荒増ニ覺詔シテヨシ

一 小笠原修理大夫長棟ヨリ仁科月毛ト
云名馬ヲ 公方様へ上ル片馬屋道具ヲ
舍人ノ久七郎ヨリ御舍人ニ渡ス片^ニ御
舍人二人出向御道具ノ下タラ片^ニテ
取片^ニ御舍人二人出向道具ハ勿躰^ニテ

トテテ午ヲ放サヌヨリ御舍人上キテ
取レ久七テ放ストイヘリ其政大庭ニ
在合面々感シタルト云リ惣シテ上へ
奉ルハ敬支万物用シ

一 軍陳テ馬ヲ遣支詰取タル片馬ヲ跡
不退者也前(三度引掛嚮ヲナラシ象
方ト左ノ方ヲ見セテ左ヘツキ廻也此ハ
尾ノ方ヲ不見之後ヲ見スレハ逆馬トテ
忌也敵方ヨリ来ル馬ヲ主人ニ見セシ
逆馬ニ見セ申也

一 馬ノ口附ノ支象方ノ口取ハ上キテ賞
翫也追繩ノ役ハ下キトテ下リ也

一 葬礼ノ片馬牽役ハ家老ノ役ニ是モ左
添口下手也馬ハ尾髪ヲ切テ色ヲ着セ
白布ノ手經ヲ付止逆瀾ニ置シ山鳥
葦毛アレハ是ヲ引者ニ

一 馬ノ鼻竿ノ支馬ノ鼻先ヨリ尾先ニ
競テ切也竹ノ本ノ方ニ切掛ヲシテ麻
繩ヲ付夫ヲ銜ノ鑠ニ付テ手經ニ持
副テ引ニ又水付ノ方ハ鼻捻腕掛

ヲ上サハフニ掛捻テ其先ヲ口ハ詰テ扱
ニ是ハ惡ノア井シラヒ也惣テ曲アル馬ヲハ
人前ニ不出ニ曲アラハ内々ニテ遣ニ向リ所
望ナクハ不可遣

一 馬ノ病ニ寒熱ヲ知ヌ寒ヲ病馬ハ身毛
立息冷鼻ノ内モ冷目ノ内モ可澄亦熱病
馬ハ毛モツキ息モ熱リ鼻ノ中モ熱耳モ多ク
目ノ中濁テ見ル也

一 馬ノ息合茶雉子ノ足シモ苦參ホレイノ
灰右ホ分ニ合テ舌ノ上ニ置水ヲ飼ヘシ同
茶ニ耳草人參白朮ホ分合テ可飼秘ニ
一 馬ノ病ニ寒熱ヲ不云耳草黃芩人參
茯苓右當分ニ合テ可飼秘ニ

一 馬ノ病ニ呪ノ哥
明カニ今ハ心ヲナラヌカシ星ノ上ニテ乗ヲ上
ラシ

一 馬ノ甲乙飼ノ夏
甲乙ニ病馬ニ塩トスキ物飼ニ耳キ物モ可飼
肝ノ病也

丙丁ニ病馬ニスキ物苦キ物ヲ可飼心ノ病也
戊己ニ煩馬ニ苦キ物耳キ物ニ脾ヲ病也
庚辛ニ病馬ニ辛物塩ヲ餌也肺ヲ病也
壬癸ニ病馬ニ辛物塩ヲ餌何レノ素モ此
ヲ以テ合ヘシ腎ノ臟ヲ病也

右者當家為嫡傳秘文後世妄切
并授之也賢
長阪 貞慶 貞成

馬法門

一 力草ニ云手絶し事

片口活キてみとぬとぬ馬ニ亦何方
とし口活キ方此おもくしの序を正徳
丸をてゆのの正徳のてあつらて
宗匠

一 ぬもんふし云手絶乃事

口活キて福とほのふあふふ紙と
蜜梅のよ丸のてあ方の耳の中へ入し

赤尾一人と引りかゝり

一 足馬の鞍を伸し須弥堂の上の鞍と
交し一前の鞍をさそふ

一 赤尾一人の鞍を申す

一 脇を流し鞍乃中へ尻をとり泥を馬を
引よせたり尻を引り尻のふらふら

一 秘事の息念 男根 人糞 糞 念
二反り石に在れりてぬり

一 馬を引りかく馬場を引り息念のま
ま引り一牛 木の内へおろしりまのま

白くん一五

右のま引りよとてあそびつらふ

一 青く後湯洗ひ一は茶と目の中
毛の房へいももよりすこし一三三反も
かすにせられあせりぬ

一 中り合の泥とよみこころを引り
流し踏りて中一人のよみこころを
取心よりむくるとおと拍りあ合せ
い川となく泥乃む川々と泥流ぬ
つらふ働く申す

一 中り合の泥とよみこころを引り
流し踏りて中一人のよみこころを
取心よりむくるとおと拍りあ合せ
い川となく泥乃む川々と泥流ぬ
つらふ働く申す

一 中り合の泥とよみこころを引り
流し踏りて中一人のよみこころを
取心よりむくるとおと拍りあ合せ
い川となく泥乃む川々と泥流ぬ
つらふ働く申す

一 中り合の泥とよみこころを引り
流し踏りて中一人のよみこころを
取心よりむくるとおと拍りあ合せ
い川となく泥乃む川々と泥流ぬ
つらふ働く申す

一 中り合の泥とよみこころを引り
流し踏りて中一人のよみこころを
取心よりむくるとおと拍りあ合せ
い川となく泥乃む川々と泥流ぬ
つらふ働く申す

一 中り合の泥とよみこころを引り
流し踏りて中一人のよみこころを
取心よりむくるとおと拍りあ合せ
い川となく泥乃む川々と泥流ぬ
つらふ働く申す

一 中り合の泥とよみこころを引り
流し踏りて中一人のよみこころを
取心よりむくるとおと拍りあ合せ
い川となく泥乃む川々と泥流ぬ
つらふ働く申す

一 中り合の泥とよみこころを引り
流し踏りて中一人のよみこころを
取心よりむくるとおと拍りあ合せ
い川となく泥乃む川々と泥流ぬ
つらふ働く申す

一 中り合の泥とよみこころを引り
流し踏りて中一人のよみこころを
取心よりむくるとおと拍りあ合せ
い川となく泥乃む川々と泥流ぬ
つらふ働く申す

一 中り合の泥とよみこころを引り
流し踏りて中一人のよみこころを
取心よりむくるとおと拍りあ合せ
い川となく泥乃む川々と泥流ぬ
つらふ働く申す

一 中り合の泥とよみこころを引り
流し踏りて中一人のよみこころを
取心よりむくるとおと拍りあ合せ
い川となく泥乃む川々と泥流ぬ
つらふ働く申す

一 中り合の泥とよみこころを引り
流し踏りて中一人のよみこころを
取心よりむくるとおと拍りあ合せ
い川となく泥乃む川々と泥流ぬ
つらふ働く申す

一 中り合の泥とよみこころを引り
流し踏りて中一人のよみこころを
取心よりむくるとおと拍りあ合せ
い川となく泥乃む川々と泥流ぬ
つらふ働く申す

一 中り合の泥とよみこころを引り
流し踏りて中一人のよみこころを
取心よりむくるとおと拍りあ合せ
い川となく泥乃む川々と泥流ぬ
つらふ働く申す

夏よわくして人と引るにのこし又く
つ牛の第も打屋一ツ牛の首のほ
福し梅つうの第も打屋一梅つうの
鼻のよし又と身乃るも打屋一先
と山岡の第も云

一 海河と海と時を力草と腹帯と結び
けり事一軒要ん先しを鞍うと云こ
河へ打入り所橋は川をへ流してふ入陸
也よ入しハ洋は落る事有鞍を境と用
つし手籠を川上と云こころり川下と平
首よ河添てふ流し一流を川と云こ
川下と流く踏む也一流を人と云こ
以前よるの耳の中の水と云こ入りり
り一川竹は四寸の節と云こ前後と
梅し

一 細指細きわけかろへふけ先へはこ
けしを流しふ流しけしあさりやこ
けささりが一巾の布木さ此の切付も
あさり端もにや一川こ
一 馬と云こに中一乃口所を力草乃すと

の知れたの時を笠掛と云す大進也も
具は之も中一乃口所但つり人かこ
あさりすのぬひさるし一又これの時を
はさりり一ささり戎布衣の目乃事し
一 長腹帯は巾直也目具是也あさり時の
よりし腹帯と云るの背よこりてはこ
とり遠く鞍と云てはさのしとあむち
こさると云と二寸一腹帯と云る和泉

一 志さるぬ馬ふくこの四尺鞭用紙有浪海の
而と向より一あへさるし一こい馬六
後の切付のしりき腹帯は遠の方より
後端の方へさるし

一 五尺馬は八寸半此第と前端のりへ
あさりしと福馬は八寸半のりよあ
つし是と福下の第九寸半れりり
第も云

一 是のゆめれは徳事口こさき馬も
志さるぬ馬は目とははのゆめれ
ささり端のしり

一 けし徳と云時と云のゆめれは徳

一 龍は八法しつを馬しつより龍の龍なり
八尾ありと云事なり

一 東好としつ馬よりのつを堂の時つに
沈まはく踏むたのつ尾をあらとつて
その肉とけく物こせとつてつ尾のつ
一東乃其新とむりこつとつたり

一 付そのれとつ馬よりのつ尾を龍ふとつし
折かくしつやふしつ尾をあらとつし
うはしつつあらとつとつあらとつつ
一 尾のつとつあらとつつ尾乃龍の
毛のつを龍しつせつし

一 折つとつとつ尾の馬とつ尾とつつ
そつつとつとつとつとつとつ
一 つつとつとつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつとつ

一 龍のつとつとつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつとつ

小笠原義隆入道長高書
當流手綱秘傳

一 馬とつとつとつとつとつとつとつとつとつ
たつとつとつとつとつとつとつとつとつ
一 長衣衣服をさつとつ又肥し人杯も
一寸の透るつとつとつとつとつとつとつ
とつ木のつとつとつとつとつ

一 手龍取進系取金系和と大指ふ龍手
のつとつとつとつとつとつとつとつとつ
一 二つとつとつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつとつ

一 龍のつとつとつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつとつ
一 四西の龍のつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつとつ

一 後節ノ筋の皮肝をとり馬の骨を
と又肝内蔵馬の能くはし一馬の指の
の通筋をあらう

一 馬脈節の事後骨と二筋をけりて
度よく背ふもて其の上筋とをて後骨と
筋の筋を引通て其の筋の筋を又を
たへたを在後下をとりて
もノ筋は但先は筋をあらう
筋中をも筋も用ふ

一 おさうはは筋の事口筋を方との
筋をとりて筋は筋をあらう又筋の筋を
し筋とはつる筋はは筋の筋を
一 喜の事しみの長さを一栗の筋を
たむみと用ふ

一 筋の筋の事あがり筋をとりて筋の
筋をあらうけりて筋をあらう馬
の筋の筋を筋を筋を筋を筋を
筋の筋の筋の中を筋を

一 息の筋を筋を筋を筋を筋を筋を
筋を筋を筋を筋を筋を筋を

一 筋も知ぬ馬の筋を筋を筋を筋を筋を
筋を筋を筋を筋を筋を筋を筋を
筋を筋を筋を筋を筋を筋を筋を
筋を筋を筋を筋を筋を筋を筋を

一 馬の相柄と見ては筋を筋を筋を筋を
下唇を脱根を筋を筋を筋を筋を
色赤く成て人と目し筋を筋を筋を
油筋を筋を筋を

一 筋も馬の筋を筋を筋を筋を筋を筋を
筋を筋を筋を筋を筋を筋を筋を
筋を筋を筋を筋を筋を筋を筋を
筋を筋を筋を筋を筋を筋を筋を

一 小山の筋を筋を筋を筋を筋を筋を
筋を筋を筋を筋を筋を筋を筋を
筋を筋を筋を筋を筋を筋を筋を
筋を筋を筋を筋を筋を筋を筋を

一 筋の筋の筋を筋を筋を筋を筋を筋を
筋を筋を筋を筋を筋を筋を筋を
筋を筋を筋を筋を筋を筋を筋を
筋を筋を筋を筋を筋を筋を筋を

一 版帯より合と付たのうし手紙と
並て其手紙と合(引通)して引通し
る法は引通にかきと並り引通の馬はと
左(指)もてつげぬ

一 水車の事は馬と口とといふあり
手紙何との曲りも並りあり

一 押つけと並りあり引通し手紙と
とりて扱ふ事へ並り居

一 上の口と並り事へ馬中(口)と並り
事肝要し

一 鞆下と並り事へ(鞆下)と並り
と並り事へ(鞆下)と並り事へ(鞆下)
と並り事へ(鞆下)と並り事へ(鞆下)

一 柚木移の事は(柚木)の曲馬の引通
あり引通(柚木)の曲馬の引通

一 中(口)の早き馬より手紙あり事の
に引通(口)の早き馬より手紙あり事の

一 能歩し引通柚木移といふ引通せぬ
能歩し引通柚木移といふ引通せぬ

一 大つと引通(口)の事は(口)の事は
大つと引通(口)の事は(口)の事は

一 ありと引通(口)の事は(口)の事は
ありと引通(口)の事は(口)の事は

一 大つと引通(口)の事は(口)の事は
大つと引通(口)の事は(口)の事は

一 何種(口)の事は(口)の事は
何種(口)の事は(口)の事は

一 此(口)の事は(口)の事は
此(口)の事は(口)の事は

一 心(口)の事は(口)の事は
心(口)の事は(口)の事は

一 夫(口)の事は(口)の事は
夫(口)の事は(口)の事は

一 みて(口)の事は(口)の事は
みて(口)の事は(口)の事は

一 此(口)の事は(口)の事は
此(口)の事は(口)の事は

一 夫(口)の事は(口)の事は
夫(口)の事は(口)の事は

一 此(口)の事は(口)の事は
此(口)の事は(口)の事は

一 夫(口)の事は(口)の事は
夫(口)の事は(口)の事は

一 心おかしして志し流馬も志せらるる由也
半と雖もかりきふ二巻の心持ありは
合と以合を遠隔かくせられしよて行馬
又口と和らふ由てとらふ一ふあてあむ
もと取又肝合を和らむふかればもふ
まとあつていふからし馬もあつて
馬と以合と法にあらたみかき
ふ一能歩行とあり能く縦筋肝要
一 馬は口合を和らむと上の子といふ人の
ふあてあむと和らむと和らふ馬と和ら
事い成ぬとあり馬の想しとも大方に
初らふといふ口とさつてとらんふ行は
流き馬必一示の口こりきとありと
ふ流されぬとありとさつて又腹心の
を馬は腹に引出せぬ腹目おはて耳
とさつてさつてとありとね又腹心の馬は
飯深やも腹に引出せぬ肝筋を人と
流の馬はあつてはあまふといふは
ま一肝筋馬は前橋ふ和らふと
直馬はあつて可なり

一 父母の子徳の事古志の子徳とよむ
まふ事とよむ子徳といは合極うと
徳のふけらる一不徳といは徳を徳
一切徳の事をは油ひかき切らふとい
これもし子馬は能く
一 さこのぬ事い、ちの馬は悪一は痛更
小は出一は曲かれ荒く流れてふ
才と捨てあり海馬もしなりおは
とのこえさふとさつてとらふ馬の心
さつて和らふ能く
一 鶴下のゆい、ちの後の鶴とせしと
心おかしとあり
一 馬場と禁を流事い、ち馬は或は馬場
或は細な振してはり成りたりとあり
とのこかしよか、ん馬場とてふ事
肝要に保才和らむと成りぬ
とのせ又海馬もしなりと和らふと
曲のあつていづち物もさし
一 振の髪とせし事徳とありぬのさつ
髪とせし事徳とありぬ馬と和ら

かぶりてきく小直高(志)川(志)國(志)人
 小(志)肝(志)要(志)響(志)鼻(志)草(志)の上(志)
 是(志)知(志)る(志)を(志)志(志)つ(志)り(志)て(志)培(志)ち(志)す(志)能(志)く(志)
 り(志)向(志)事(志)

一 鼻草の屑の事 鼻草の根のつく
 とこも毛も存く急るゆへははしつゝ
 響とんかふるよふとちたも能き
 一 みの入江と云事 響の衝(味)響(味)
 て細くしわたつてととれ馬あつて
 味噌と馬好あつて

一 糸を洗事 細く口を洗つてい
 念も助る古又福もこの言と能口と
 引切つり時洗ぬ能ありこれ口と
 あせしせらふよふ

一 引き寝敷と云事 先は年色成馬と
 自給(豆)と早(豆)敷(豆)あり右(豆)左(豆)行
 向く流とたい速可踏るの足早く
 成

一 出し(豆)の事 豆(豆)石(豆)の(豆)根(豆)あり
 ちうほの(豆)味(豆)は(豆)注(豆)と交(豆)り(豆)取(豆)る(豆)よ(豆)

為(豆)小(豆)糸(豆)と交(豆)り(豆)り(豆)取(豆)る(豆)よ(豆)後(豆)と
 交(豆)り(豆)る(豆)よ(豆)ふ(豆)か(豆)い(豆)け(豆)の(豆)方(豆)の(豆)程(豆)と(豆)流
 踏(豆)出(豆)の方(豆)と(豆)踏(豆)踏(豆)山(豆)と(豆)糸(豆)上(豆)海(豆)は(豆)高(豆)高(豆)茂(豆)
 折(豆)あ(豆)け(豆)り(豆)ゆ(豆)ま(豆)と(豆)り(豆)ぬ(豆)ぬ(豆)一(豆)丈(豆)字(豆)下
 海(豆)一(豆)條(豆)地(豆)際(豆)と(豆)一(豆)丈(豆)字(豆)下(豆)せ(豆)て(豆)必(豆)る(豆)の
 鼻(豆)つ(豆)て(豆)の(豆)落(豆)付(豆)際(豆)と(豆)少(豆)掬(豆)ち(豆)成(豆)候(豆)は
 糸(豆)下(豆)一(豆)條(豆)銀(豆)流(豆)也(豆)一

一 川と海と云事 川上の子(豆)根(豆)とい(豆)て(豆)河(豆)を
 川(豆)上(豆)の(豆)子(豆)根(豆)と(豆)平(豆)首(豆)と(豆)地(豆)る(豆)取
 り(豆)て(豆)流(豆)を(豆)濁(豆)す(豆)候(豆)

一 心の香と云事 石のあま(豆)み(豆)と(豆)ん(豆)
 し(豆)け(豆)て(豆)糸(豆)る(豆)或(豆)は(豆)茶(豆)の(豆)上(豆)杯(豆)の(豆)次(豆)の(豆)ん
 ぢ(豆)

一 山と糸と云事 清水と銅と云事 山と
 土(豆)味(豆)は(豆)林(豆)麻(豆)と(豆)水(豆)を(豆)能(豆)く(豆)銅(豆)を(豆)あ(豆)け(豆)て
 是(豆)中(豆)一(豆)の(豆)ん(豆)ぢ(豆)

一 響し(豆)み(豆)振(豆)る(豆)事(豆)と(豆)ん(豆)の(豆)れ(豆)た(豆)ら
 い(豆)鼻(豆)の(豆)よ(豆)ふ(豆)ら(豆)の(豆)よ(豆)ふ(豆)か(豆)と(豆)あ(豆)る(豆)事(豆)と
 ち(豆)け(豆)て(豆)糸(豆)る(豆)一(豆)ち(豆)振(豆)き(豆)其(豆)候(豆)唯(豆)の
 ち(豆)小(豆)豆(豆)糸(豆)一

一 加いあや車馬を能かす事被振て走む
時頭内りてぬの向ふ方へい車一歩
車と云ふ

一 四と半車内成るといふを候く歩一
心といふるといふと一歩一の歩をいふ
小曲の馬といふと歩一といふをいふ
まると云ふ

一 片口の馬の車亦度弱き行くと
振付やあしと云ふとつらふと細く
おとらふ候と云ふ

一 う波の手鑑の車はこゝろと云ふ
深なる事と用也たう遠ふをみ
振う振かへも車肝要

一 うゆの馬と云ふとある事いふれ
て行付 手鑑と云ふと程の性質
手鑑はふかしく候て平首いふこと
必止候

一 馬場といふ馬の車はふかしく候
こゝろ一は合と云ふと手鑑強弱と
双方に振かへも歩一といふ手鑑

走らふ事いふ事あり

一 馬系といふの事早くと早くと云ふ
はあといふと歩かんと云ひて歩かぬ馬
もて能歩む事あり

一 手鑑の手鑑の車は片只一つと
事いふ候き馬は上者

一 ころけといふと云ふは中つての近一内
く候く事と云痛也といふと長く候
く候と云ふ候く候れは首あり候あり
まのともちも候くも指候くと云れ
は和と云ふ

一 月如候の馬は四方いふ手鑑と云ふ
四方口といふ場と四角いふと其うと云
才道かといふと云ふのまはまるも
少くともおとすす女のまは相好
片口あり候と云ふ候いては可
一 智州といふ候ゆして是と云ふと
無おかけ候と云ふ候てはと云ふ
是も能き候

一 比つ折の車はなるといふと折ての

くわいよひおれふ事と云ふは氣管活き
るふ用也

一 三拍子と云ふは拍子合の事 前足の上に乗
と云ふは二拍子 後足の地へ付眼を二拍子
不むらぬにたとへ人馬成とも前足の
上流西を引をる 後一は前足の拍子
と云ふは二拍子と云ふは二拍子
と云ふは二拍子と云ふは二拍子
と云ふは二拍子と云ふは二拍子

一 一人とい馬の拍子長くはくと云ふは
一 一人とい馬の拍子長くはくと云ふは

一 一回の手繰りて車危く品多き手繰り
引と向の手繰りて蹴口活くと云ふ
る退る馬物と云ふ馬一人小歩と云
る引ホト用つき蹴口活くと云ふ
立所と云ふ馬のくみむを云ふは
く引物と云ふは馬のくみむを云ふは
く引物と云ふは馬のくみむを云ふは

手つゝと云

一 志より馬より退ゆあるは馬蹄とのこと
てはふありと云ふは馬蹄とのこと
歩み物ありけしは馬蹄とのこと
と云ふは馬蹄とのこと
あはせ馬蹄とのこと
又云馬と云ふは馬蹄とのこと
引物と云ふは馬蹄とのこと
又一人といと云ふは馬蹄とのこと
と云ふは馬蹄とのこと
歩み物ありと云ふは馬蹄とのこと
馬と云ふは馬蹄とのこと
ありけしは馬蹄とのこと
の二拍子の手繰りて云ふは馬蹄とのこと
一 一人とい馬の拍子長くはくと云ふは

一 馬の蹄より云ふは馬蹄とのこと
る馬蹄とのこと
ありけしは馬蹄とのこと
一 一人とい馬の拍子長くはくと云ふは

の所より射角とすれば、向後世々も
治し但射角も止し、時分大事に射す
し、れハ射角とわらふ又曲やせん人
らして、早一を曲もいされ、射角也
一 ちころいで、隨へん勝てかき、ゆるを
申し、ちふあさ、うら、能なり、り、又馬不
有りて、曲とちり、ふもきり、わ、あ、かつて
不、巨も、め、れ、い、あ、こ、し、ふ、も、可、な、か、ゆ、徳
申、も、可、り、備、て、い、筋、と、一、は、筋、因、事、に
一 門、て、わ、け、け、ん、々、口、合、の、長、也、一
一 大角、小角、と、申、け、け、信、ハ、志、さ、う、ぬ
馬、ふ、い、一、又、色、物、の、口、入、手、信、ハ、其、れ
ハ、在、(成、も、不、成、た、ま、ま、の、は、り、な、ま、ま、
言、の、首、と、お、出、て、口、と、口、落、し、け、筋、の
下、と、首、と、右、(お、出、せ、い、な、あ、れ、れ、し、と
て、外、の、手、信、を、馬、と、抱、て、内、の、手、信、
あ、て、ゆる、門、を、退、つ、か、し、し、退、つ、し、汗
を、い、一、首、と、筋、と、お、い、り、と、大、角、と、云、
少、お、い、り、と、小、角、と、云、ふ、ら、う、に、可、け、
但、色、物、の、口、入、手、信、を、能、き、も、退、り
一 年、の、口、を、あ、お、い、馬、一

一 隅、の、口、の、半、是、ハ、馬、の、口、何、と、い、ても、指
お、つ、下、悪、友、而、と、角、の、口、と、云、一
一 曹、と、申、か、信、信、の、事、これ、い、う、彼
の、手、信、父、母、の、手、信、を、そ、の、所、入、
又、け、信、し、り、と、取、か、い、馬、と、申、し、所、か、
曹、と、取、取、し、只、と、と、と、と、と、と、と、と、と、
引、一、一、手、信、と、い、う、は、能、い、の、所、入、
信、き、し、け、信、は、引、進、て、あ、や、は、ち、信、と
を、い、き、馬、あ、い、か、け、え、と、い、う、は、其、れ、
あ、か、か、わ、か、い、手、信、を、い、り、の、所、入、
あ、れ、い、る、馬、あ、い、か、け、い、あ、い、と、い、り
一 信、寄、る、の、事、は、い、ら、わ、い、あ、い、一、右、信、
と、い、う、は、い、ら、わ、い、あ、い、の、あ、い、あ、い、と、
を、信、と、い、い、び、小、早、一、右、信、は、あ、い、又、右、
信、は、あ、い、ん、と、せ、い、中、と、早、く、も、右、信、は
あ、い、右、信、馬、は、い、ら、わ、い、あ、い、信、寄、つ、ら、
と、も、ま、い、後、の、馬、退、角、一、と、申、し、あ、い、
信、は、あ、い、と、申、し、あ、い、と、申、し、あ、い、と、申、
手、あ、い、と、い、い、と、申、し、あ、い、は、信、也、

性耐袖をも手拭えも馬の目とかく
を申す大成ゆをかせい大まうと云
小海くちのりま初一

一 切一 道々手徳の事走馬と云う
くし事と云ふ馬くし事くし事くし事
退くくし事くし事くし事くし事
止るくし事くし事くし事くし事
亦出ても亦退くくし事くし事
而もわり又思ふ可き馬馬馬
まり馬事くし事くし事くし事
但走くし事くし事くし事くし事
退くくし事くし事くし事くし事
まをくし事くし事くし事くし事
て馬文よまきくし事くし事

六角之半

一 一 波又折の元くし波け手徳は口活く
馬をくし波を折て馬割と云う
板折くし事くし事くし事くし事
一 鹿の志くし事くし事くし事
退くくし事くし事くし事くし事
後くし事くし事くし事くし事
君あくし事くし事

一 君あくし事くし事くし事くし事
君あくし事くし事くし事くし事
たどくし事くし事くし事くし事
りたくし事くし事くし事くし事
鹿くし事くし事くし事くし事
徳と十文字くし事くし事くし事
片くし事くし事くし事くし事
鹿のくし事

一 枝のくし事くし事くし事くし事
半くし事くし事くし事くし事
亦一書と書くくし事くし事くし事
波の書と書くくし事くし事くし事
を成くし事くし事くし事くし事
只尚もくし事くし事くし事くし事
痛くし事くし事くし事くし事
小くし事くし事くし事くし事
くし事くし事くし事くし事
のくし事くし事くし事くし事

一 七尺の馬も尚て引張ゆらば是れを
 喜まかすも馬力を損く能くは弱き也
 一 八尺の馬の痛ゆふあると尚て是れ心能おも
 ひて痛而不痛又強きは亦も是れ
 社法に引ぬらん其つゝ又口の肉おつ
 わりしも強きあへんみと尚て是れ
 一 口の肉も尚て又免を事ゆゑ是れ
 一 免を引くは強き而も是れ尚て引張を
 免すは是れ絶人として免を引けし時
 強き而も是れ一むす一の免を引
 一 口の肉を引くは強き而も是れ尚て引張を
 事し

一 おとの引又ちあふらん馬の口の肉を引
 其れは是れ上申下へ引くことあり
 一 口の肉を引くは強き而も是れ尚て引張を
 事し

六方の口は是と六方の口といふは口合と

六方の口は是と六方の口といふは口合と

- 一 四寸の鞭は強き而も是れを指さす
口の馬あり
- 一 三日月の策退り馬は角中下ありといふ
實あけぬしりとも
- 一 馬場切の馬又は一馬強と試首とから
ては西教の策とおつ一おもつけといふ
骨へしんといふとこれとひやしの策
は云
- 一 足并退きとる梅垣の策とおつせん
しんとは右の三途とおつといふ
- 一 龍は強き馬は右の策とおつ一厚ち
策といふ右の三途といふ
- 一 右を落し物と強き時に見わすの策と
おつ一見送りといふ右の馬はといふあり
- 一 魚踏の馬は右の策とおつ一とを
とつといふ馬はといふ
- 一 龍加洗強きの馬は右の策とおつ一
おつ一とつといふ右の策と

力草付とてりて控の鼻とて六蹴る
るとあつむりし

一 前疑の馬より馬の将士の策とてし
うのや昔又策先と下腮と教く突
そ後書のところかきとりの弾かると又
と前(押)のめとていふ行し

一 人と川又川別と馬よの菊陣の策
おし一 身根とまきつやと云

一 退る馬又退のさう馬よの麻治の
し之鞭を打つかゆわたりと前
是のふくとおし退る馬よのさの
策も右前退の孔隆と云つ又此の
策も右鼻の吹めしし

一 退る馬よの梅將の策とてし一 右の首を
ちるく川りおし又此の鼻を右腮と
と之鞭を打馬とあてぬ行し

一 橋海舟渡りまも馬よの洞の策と
おし一 志くこの策は孫若二すやと
云し

一 混濁し又しと馬とを馳るふ
みり策とてし一 孔と策とてたの
平首とてし云し

一 人の馬よのゆとさの策とてし一 依
ちるく鼻さくくはておし軍の馬
やも云

一 赤吟の馬河騰の旗谷馬又去吟と
吟馬よの波松の策とてし一 下の唇
つけくおし云

一 物の鼻が強まてけき馬よの丸の鞭と
おし一 鼻のよとてし一 波の上の
策も云

一 加馬よの鏡の策とてし一 けみの策とて
ちるくの口脈とてし又合の物と云策
胸界の上と胸(ひ)とこれもし馬よの
一 勢はふき馬物とりて退る馬よの本
末の策とてし一 ちるの耳のえお佛
ふも云

一 思ひ出しと馬よの山の策とてし
ちるの身のりし

一 脱根とてし一 教とてし馬又退る馬

かたしりへの策とす一在るの目の
向しをさ達某の策たる

一口振ふありつゝの策とす一をい下腮
のトシ

一勇馬の平首とす一

一足とすふいゝつゝの策とす一股の
平とす

小笠原美濃守

長高

同 備前守

應永七年八月日 氏長

右當流之秘傳也妄不可有他見者也

岩村意休重久

軍馬秘用録

条々

一 開貫杯ヲ系通り又木ノ下ヲ通ルモ指相ヲ
カレシげ辰我ヲ前(ト)右澄(後)指
流シ右午綱ヲ押下シ我ヲ其方傾キ
後ヨ子錫ニ折流(通)物ヲヤリ折ヌトキハ
馬ノ平首(抱)キキ左流ヲワヨク踏通ハ
指物モ不當通(常)枕首古アル(キ)度ニ
一 十里ノ路ヲタトハ一取ニ思ヒ余トキハ
十町七八町ノ間ニテ論ヲ乘往シ人ノ息合
一 一ノ間ニ馬ノ息三ツ迄不苦(口)ホニ及フ時
馬ノ舌ヲ引出シ舌先ヨリ二分程間ヲ空カ
先ニテ少突血ヲ出シ血ニ息合(糸)塗(シ)
茶方ハ嘴太島ノ口ヨリ尾先迄牽牛子ヲ込
黒焼ニシテ密ニテ練梅干ノ肉ヲ加(竹)葉耳
檜ノ処ニテ考計用ヒ又人參ヲ紅花ヲ馬ノ
頭ニ入黒焼ニシテ密ニテ練馬ノ舌ニ塗亮
モロシ

一 陣中ニテハ馬ノ舌ニ毎夜治ヲ塗テ洗カヨキニ
一 敵方ニ馬ノ嘶ク聲日ニ減テハ多クハ内

兵糧之シク勞レタルニ

一 馬弱リテ尿ノ詰リタルニ木通ノ煎ヲ吞ス

一 馬柄杓ヲ銅ニテスル利方多シ茶鍋モナシ

一 馬上ニテ弓ヲ持トキハ手ニテ鼻ヲカクハ俗ニ
千石手鼻ト云此更ナリ

一 馬上ニテ弓張ル人ノ肩ヲ押留テ強ク

先一の法ヤリ共卯モあり

一 馬上ニテ弓持礼モ有然レ未得ト右ニテ弓
人ニ向ル者ニ是ヲ弓直シト云フ礼ナリ

一 馬上ニテ敵ヲ決絶ニテオトキハ敵ノ
下後ヲオモクニ馬上ニテ弓ニテ敵ヲ射ル
ニモ敵馬ヲ射ルニ

一 馬上ニテ敵ハ淺付既ニ突落シタリハ早速
下リテ馬ヲ棄廻シテニ淺ニヤリモ突テ後
ニテテ首ヲ根ト突テ後ニ首ヲ切レ

一 馬上ノ紐ヲハ我カ敵ヲ能カク身とも敵
トノ刃組ト否兩況ヲ合セ生捕キ

一 馬上ノ淺合ハ崩際落口杯ニアル更ナリ敵
馬ノ面ヲ突ヘキ

一 馬上ノ敵ヲ歩立ノ人ヨリ切腹ハ先馬ノ面カ
首ヲ切テ後ニ腹ニサヲ拂ヒ落ルルヲ切テ首ヲ
トルハ

一 歩立ノ敵ヲ馬上ニテ切腹ハ一息ニ棄倒スヘシ
テ亦遠ヲ敵ハ馬ヲ切テ手遅ヲ切レ臂月ヲ地腰ヲ
切レト云々名目アリ

一 棄得テリ肝ノ強キ馬ヲ戰場ハホハカラス
馬ノ草ワラシキ腹ハ思直ノ裏ヲ切ホクニ用ニ
菴城多キキ

一 馬ヲ焼跡ヲ棄テ水ヲ氷ニテヒタシキハ
馬上ニテ太カヲ抜ニハ手遅ヲ取カシノ処ハ左
ニテ切テ太カヲ抜ニサヤウニセサハハ
足ヲ切モノ

一 腹帶力草鞞杯ノ切タル用ニアフミハカナ
汽ニ利アリ

一 鞞ニ糸シ腰ニラフミニ糸ハニ糸ト云
名目アリ馬ハ乗人ノ如ク性ク者

一 馬ニテ回二回モ足溜ヲトハスルトキハ前溜
ノ股迄馬ニ糸掛何皮モ馬ニ見セテ其後
バクバクト糸掛聲ト汽ヲ一度ニ合テ裁
スモノ

一 川ヲ渡ス時ハ宗入ル場ヨリ向テ上リ場ヲ
能見至小ハ佩楯モ五馬ノ後節ニ掛テ背
取アツリヲハワシ洗ノ母衣付穴ニ緒ヲ付後
節ニアフミヲ括付鞆ヲ立スカシヨ洗ヲ扱テ
声ヲ掛ワタスナリ

一 川卧スル馬ハ宗入又前ニ馬ノ身中ハ水ヲ
入テ後ニ宗入ヘシ

一 荒ク宗名馬ヲ其俣川ハ宗入ハ必ス息ヲスル
ニ先ヨリ洗ヒ頭ヲ冷シ輪ニ宗テ後川ハ入ヘシ
一 在洛ヲ宗名馬ヲ一日モ休ム必ス血トリ
テ用ニ不モナリ

一 朝キリ深キ岐川ヲ渡セト思フニ馬ワタリ兼ル
トキハ先人ヲ渡シテ見セワタスニ

一 馬上ノ人ヲ歩武者ヨリ引落サシトスル時ヨリ
出シ取付セ片ヨリ前輪ニ掛我身ヲ前ワニ
ヒクテトケ兩アフミヲ合何ク返モ馬ニ引テ
後ヲ取ヘシ

一 細道ヲ乘ルニハ前輪ヲ掛アフミヲ送テ
フミニ踏テシリカヒノ洗ヲ足ノ指ニサムニ
一 馬下ハ永禄ノ公ニ其沙汰ナレニ龜筆中

ヨリ世ニ漸ク廣ニナリ

一 馬上ノ勝負ハ先ヨリタル方負ル者ナリ同近ニ
ト思フニ遠キモノニ心付ヘシ

一 馬ニ息ヲツカセル時ハ地ノ早キ方ハ馬ヲ宗
向馬ノ前足ヲ踏サセツカセセルニ

一 馬上ニテ自身ニ後節ヲメル時ハ前足ヲ
ニキルハ掛サセテメレハ能ヒルニ

一 敵ノ備ハ馬ヲ入ルニハ大勢ノ中ハ宗入テハ
益ナシ敵ノ右手先ヲ心掛宗入タルカヨシ

一 馬足ノ裏ニ塗茶松脂青砥粉ニ也ヲ
猪ノ油ニテ練馬ノ足ウラヲ能スキテ右ノ

茶ヲ塗茶ヨリ少ニ走路ヲ往ニ凡不痛ナリ
一 鞆摺テ馬ノ背ハケタル時ハ右ヲ赤ク燂水
入レハ湯ノ如ク成ナリ其湯ニテ洗ヒ足ハ血

一 落タルモ是ニテ洗フニ
一 陣屋ニ馬ヲツナクニ出ル左ノ方ニツナク者ニ
早ク宗入ニ利アリ

一 敵方ヨリハナレ馬来ルヲ至人ハ見セルニハ
北馬ニ見セル放ス時ハ尾髪ヲ少切テ右ハ

一 廻シテ放ス者ナリ

一 軍陣ノ手廻ニ三段ヨリ先ニ深入ルナリ又
後ノ皮ヲ繩ニナイテ入ルモヨシ

一 陣鞍ノ作りヨシ馬ノ背ヲ不取テハ高キガ
込合ノ軍ニ利アリ

一 軍陣ノ馬ニハヒタイニ日ト云文字ヲ各ニ
矢玉ヲヨケルニ

一 轡ハ中ハミヲ用エトカケ名ニ塗テ細ニ
ハ馬ノ口切トシ

一 悉馬ハクツワノ鳴輪ヲ紙ニ包ナリ

一 馬上ノ主人エモ皆召セ甲斐ハ左ヨリ召セ馬
後ヲ不廻前ハマワリテ右背ヲメサセ申スニ
常ハ馬ノ前渡ヲキウハ出陣戦場ハ退カ
ズ進カ法ニ然ルニ前渡リ不場ナリ

一 軍陣馬ハ髪髪ナリ 韃ノ方ハスキツテルニ川
髪ヲ不用

一 馬上ノ反閉ハ甲ノ日左ハ出シ九字文ヲト
ナフ唱ハ終シハ常ノ如ク亦佳ニ

一 呼子鳥ト云馬茶ナリ馬ヲ招ケハ馬来ルナリ
十二月季ノ卯日ニ鬼ノ糞ヲ山ヨリ取寄セ粉ニ
テ甘草黄連ノ粉ニ色ヲホ分ニシテ馬ニカハ

我ニ馬自由ニシタカフニ流馬肝ツヨキ馬ニ飼
フハカラス此茶ヲ吞セタル馬神馬ニ上又モニ

一 軍馬ニ後ノ塩手ニ取附ノ緒トテ左右ハ付ルモ
鳥首結ト云ナリ二尺守ヲ二重ニ取テ結ナリ

色ハ六ヶ紫中位紋下ハ勝色ノ糸ナリ

一 棄スニイシ立馬ハ棄又前ニ眉間ハ策ヲ
其後身掛ヨリ血ヲ取テ棄ニ

一 切レ馬ハ強キ方ノ口服ヨリ血ヲトレハキレ馬
直ルナリ

一 舟ニ赤兼ル馬ニ賦ノ字ヲ馬ニ各テ作リ
武ノ字ヲ点ヲ舟ハカケハ馬赤ト橋ヲ恐ル
ニモ此字ナリ

一 馬上ト馬上ニテ戦フ取太刀チトラハ敵馬ノ
左ハ棄ヨセ款マリ持ハ我馬ヲ款馬ノ右ハ

赤ヨセタルカヨキナリ

一 千里沓出陣十日モ前ヨリ塗ナリ口傳

一 出陣ノ取馬ニ棄ントナル取嘶ハ惡シ棄
取落馬モ凶ニ馬躍狂モ立馬モ惡シ白泡ヲ

ハキ首ヲウナタシ涙ヲ流ス一其身ニ塗
ノアル前表ナリカヤウノ取ハ惡直消散ノ

法アリ上帶ヲノ直ニ住先へ向テ護身法九
字ヲ切テ次ニ外柳子ノ印ヲ結ヒ天声是心
光明宿人并教化皆未惠城ト三返唱(印ヲホ
トキ合掌シテ摩利八幡ノ真言三返宛唱
(檀)葉一枚ヲ両手ノ大指ト食指チツミ
残ル指ヲ卧テアヒラウシケント三返唱(葉ヲ
引ナキテ左右へ捨テテホ出ナリ思事ヲ
消ス秘訣ニ

一 戰場ヲ肝ノ内ナル馬ノ鬣ハ勝軍ノ兆
肝ノヨキ馬ガ肝内ナルハ敗北兆ナリ

一 鞞ノ上ヲ草ニテ包塗テ軍鞞ニ用之是ヲ
張鞞ト云

一 螺廻クラトハ青貝入タル之モ軍鞞ニ用
白鞞トハ木地鞞ニ繪ヤウスルニ

一 金覆鞞ノクラ前後ノ山形丸頂濱ノ
内ニテフクリン取ヲ云之根ノ覆鞞モ是ニ同シ

一 決掛地トハ金粉ヲ以テ一向濃名鞞ナリ
梨金ノ鞞ハ金ノ屑ヲ漆ノ上ニ蒔ヲ云ナリ

一 漆鞞トハ黒塗ノ紋アル鞞ナリ
無紋朱鞞昏礼ニ用ユ口傳又函礼ノトキニ

モ用ユ

一 楚鞞ト云ハ何鞞ニ付ル鞞ニ

一 昔武藏口ニ鑿作ノ名人アリ是ヲサシ
アフミト云ナリ五斛掛ノ鑿ト云兩アフミ
高頭ヲ括リテ下置兩アフミノ舌先ホ
渡シテ米五斛カケテ舌先ノ延ヌヲ
五斛カケト云木鑿ナリ木ヲ曲録ニ鉄ヲ
治ヒテ不延ヤウニシタルアフミナリ

一 木鑿ノ徳用ハ川ヲ渡ヌニ輕キ故馬ノタナ
ニヨシ寒中ニ足不冷シテ氣心ヨク角モヨ
ク當ルニ然レモ火災ニ燒ユヘニ平士ハカナ
鑿ヲ用ユベシ燒テモ再用ニヨシト古人
甲シ置ルナリ

一 金鑿ハ惣シテ長ク細ク鳩胸ハ高ク丑ミ
服低ク踏込浅キカ川越ナトニ利用多シ

一 異朝ニテハ黃帝ノ敗馬師皇ト云人馬
兼立ヲ云夫シテアフミ曹ヲ初テ作ル

一 昔雲州ニ曹ヲ作ル名人アリ是ヲ世ニ出
雲曹ト云信濃ニモ曹ヲ治フ名人アリ
是ヲ世ニ信濃曹ト云當家ハ信濃曹ヲ

白磨石又ハトカケ色ニ塗用ユ
凡六十九ヶ条畢

當家馬法禮

- 一 小笠原美濃入道申サレシハ馬ハ南方
離中斷ノ卦ニ當リテ火ノ氣ヲ受テ其火木ノ
生スル夏ナシ故ニ肝アリテ膽ナシ膽ハ木ノ精
氣ナリ木臟不足ニ其肝ヲ喰フモノハ
死スル也コヲ割テ棄ルモ離中段ノ意也モハ
艮上連ノ卦ヲ司ルニニ鼻ヲ通ヌモ自然ノ
利也馬之一字ニ其髮腰足尾ノ口信アリ
一 嚙ヲ一口ト云ハ口ニハルニニハナリ鞍ヲ一口
切付ヲモ一口ト云夏馬ハ口ノ長スル理ヲナリ
一 長取ノ傳各ニ凡ソ馬ヲ求ルニ眼ト鼻ハ
大キニ筋骨太ク荒ク行立ヨキヲ本トスルハ
高ク面瘦テ肉少ク耳ハ少キカ肝モ少クテ

棄キテ心ヲ能知ルナリ鼻大キナレハ馬ノ
心大キニシテ物ニ驚カス目ノ下ニ肉少キハ
人ヲ喰フ腸ノ厚キハ腸下モ廣ク平ナリ
喉ノ少キハ胛モ小ニシテ飼易シ右者馬
ヲ求ル取ノ目利也

- 一 同傳各ニ馬文字ノ夏駒ト云ハ馬ノ子ニ一
歳ノ馬ヲ駒ト云ニ歳ヲ駒ト云ニ歳ヲ駒ト云也
亦小笠原美濃入道長高傳ニ一歳ノ
馬ヲ駒ト云俗野馬出ノ新馬ノ二歳ヲ駒
三歳ヲ駒ト云四歳ヲ駒ト云フ

一 神前ハ献スル馬ハ龍馬凡竜蹄凡目錄登
天子ノ左馬寮右ノノ御馬ヲモ龍馬申
スハ龍馬トハ周礼ニ八尺以上ノ馬ナリ今ノ矩
ニテ五尺一寸二分程ナリ周ニ六尺以上ノ馬
トシ五尺以上ヲ駒ト云フ古各ニ見ヘテ日本ハ
四尺ヲ馬ノ定尺トシテ其ヨリ上四尺一寸ニ
寸三寸七寸八寸ニ至八寸ヨリ上ヲ尺ニ余
ト云也龍馬ハ駿馬ニテ逸足ノ馬ナリ

一 日本ノ俗馬ヲ療治スル者ヲ伯樂トイヘリ
馬ノ精ハ天ニ在テハ伯樂星ナリ是ニ

抑リテ名トス異朝ニテハ絲陽ト云人馬ヲ
萬病ヲサトリテ針灸ノ夏初ルトイヘリ
一 馬屋ニ北猿牡猿ヲ置夏猿ハ馬ノ醫ナリ
馬ハ陽勝リ陰少シ故ニ痛ム四季凡ニ申ス以
テ屈伸ノ神トシ凶夏ヲ去ル通音ナリ木
草ニモ申ハ馬ヲ養フ者也既ノ中ニ是ヲ畜
能病ヲ辟ルトイヘリ

一 小笠原信濃前司貞宗ノ傳ニ馬ハ地ノ
精ニ然ルニ十二月ニシテ生ル陰數ニシテ
紀ニ應スル人ハ十月ニシテ生ル人陽ト
馬ノ陰ト合セテ人ハ馬ニ兼テ遠キヲ馳
天下ノ用夏ヲナス陰陽合スル故ニ

一 從 後醍醐天皇或曰小笠原信濃守貞
宗ハ馬ニ上肝中、下、アル呂ヲ勅回リ
貞宗慎而勅答申サレケレハ馬ニ上間アリハ
此馬ノ進氣ト申進氣ハ陽ニテ己カ性デ
順ノ馬トス中間ノ馬ヲ中氣ト申ス足并ニ
遅クテ勇氣ナシ下間ノ馬ヲ退氣ト申ス
陰ニシテシカモ曲有テ病馬ナリ是逆ノ
馬ト申也退氣アレハ臆スルカスニ狂動シ

物ヲ見テ嘶ヘヲトリ縣出シ驚キ付テテ
養用アル

一 同貞宗嫡傳之各ニ馬ノ五性ヲ世ニ云木性
常毛青毛火性ハ栗毛雲雀毛土性ハ麻毛
佐目金性ハ月毛川原毛水性ハ黒毛駁ノ
二毛トイヘリ軍馬ニ我性ニ相生ノ毛也ヲ
用ニキ夏ニ又傳ニ栗毛雲雀毛ヲ木性
毛トス麻毛稻毛ヲ火性トス河原毛月毛ヲ
土性トス白ト糲ヲ金性トシサ芦毛黒毛ヲ
水性トス此外青斑青縁ガシ栗毛紅梅
月毛猿色鴨河原毛虎鶴色錯色背黒
鼠色錯月毛ナトナレハ其毛色ヲ交テニコレテ
班馬有是ヲ駁凡ニ色凡ニト申置レシナリ

一 軍馬ノ夏黒色芦毛川原毛源家ニ能
馬也頼朝卿天下草創有取呂初川原毛
ニ月毛栗毛ハ常ノ赤馬ニ青ハ馬ノ始ニハ
若君御誕生ノ時必進上申スニ川原毛ハ御
吉例ニ依リテ御代替ノ取止ニ又糲ハ夜道ニ
能トイヘリ雪道ヲ棄朝日ニ向テ
眼ニハス惡シ駿ノ中ニ首切駁胴切駁位髀

白ヲ常ニ戰馬ニ毛凶ニ泪ヲ旋ニ目下ニ矢負ノ
旋ハ尾ノ上ニテ軍中ニテ利ヲ失フ切腹ノ旋ハ
前ハ足ノ後ニテリ弓ヲ箭ノ旋ト云戰場ニ常モ
不用狂動シテ乘人ヲ舍ス猿登リ旋股ニ
アリ費門旋ニテ此馬ヲ畜フトキハ其家ノ
嫡子ニテト嫌フ

一 軍馬ニ老馬ヲ用テ利多シ若馬ハ業ニシテ
故ニ物ニ驚キ退ク氣アル者ニ歌味方旗ヲ
見金鼓目ノ音ニ驚クニ元曆ノ比義經鶴
越ニ赴カレシ政路ヲ失フ政別府小太郎カ
諫ヨリテ老馬ヲ先ニ放ケレハ果シテ本道ヲ
得ルトイヘリ然レ共佐々木高綱宇治川ヲ渡セ
ル馬也才ニ熊谷直実一谷先陳ニ乘シテ
四歳ニ然レハ老馬計モ不可限ル馬ト人ト
相親ニ利アリ馬屋ヲ見物ニトキ一馬屋
ニテ馬屋ト云フアリ馬屋ハ入テ右ノ方見ル
馬ヲ一ノ馬屋ト云馬ノ乗方ヲ見ル故ニ左ノ
方ハ見レハ馬ノ左ニ見ルコレヲ二ノ馬屋ト云也
此方ヨリ不見也馬譽詞一何モ見直ノ
御馬ト譽言モノニ何疋目見直ト計譽言レハ

残ル馬ニ對シテ無礼ニ又尾髪杯多キ馬ハ何
毛ノ馬ハ覆ハ髪白晁ヲ過テ扱ヲ拂ヒ尾モ一尻
アリテ見直又ニ候ト譽言レ

一 往古大内之旧例ニ正月七日白馬ノ節會アリ
馬數七足ニ是ハ仁明帝兼和元ニ初ル
主上豐樂院ニ御座テ昔馬ヲ見テ元六年
正月ニモ豐樂院ニテ御覽セラルト云リ
正月七日ハ人日ニ白馬ヲ見レハ人災ナシト
云本文アリ七近ハ小陽ノ數ニ正月ハ數ノ
月ニ白馬ハ馬ノ本性ニ天ニ白竜アリ地ニ
白馬アリ天ノ用ハ龍ニ地ノ用ハ馬ニ人ノ用ハ
龜ニ此日ノ節會ニ馬數三七廿一疋アリ云
天人地ノ三才ニ比ス七ノ數ハ七月ニ表ス今日
毛付ノ養モ皆茸毛ト許也是白馬ヲ本ト
スル故ナル本式ノ白馬ト云ハ惣身白ク
辰ノ黒キヲ白馬トイヘ七疋ナカラテ揃カ
タキ故ニ背黒キ茸毛ヲモ入テ養ト云リ
一 足利義滿公將軍室町ノ御所ニ御在ス辰
年始ノ御祭初ハ正月二日也御馬ノ口
執ハ御殿頭次郎四郎也御策ヲ七疋

當一族也御嘗役ハ一色氏ノ人之西向
松御庭ニ馬場殿アリ

- 一 羊始ニ御馬ノ湯洗ノ作法モ當家ヨリ差圖
ヲナス年從神ノ方エ向テ洗之口執一人洗手二人
左右ニ立テ柄杓取二人已上人教五人テ勤ム此
盥水桶馬ノ左湯桶右ニ鼻先ノ兩方ニ置也
口傳洗手二人ノ者ハ左右ノ耳ヲ取湯ノ以テ掛テ
顔ヲ洗之次ニ首肩下ニ洗之洗シテ其後背通
洗之馬ノ跡二人正ニ向テ三途ヨリ股洗次ニ尾ヲ
洗之頂餘ノ髮ヲ尾ヲ湯洗シテ次ニ水ヲ
平首ヲ冷シ口ヲ洗之四足ヲ洗之竹カヲ露ヲナ
テ束藁ニテ毛ヲミヲ撫テ引入取ニ御故萌
黃ノ馬縮ヲ著ルニ萌黃ハ青湯ノ色ニ終テ
御廐ハ青銅千足兵庫指一荷御者派
テ下サルニ是御所ノ御馬湯洗ノ作法ニ
- 一 城内ニテ馬ヲ乘止改責ルト云ハカラス城中ニ
テハ禁勺ニ

一 押懸ハ關東ヨリ出ルヲ上ロトシ世用ニ刺作
兒玉織トテ二色有緋淺黃紫ニ深軍用ハ
勝色トテ真緋ヨシ茶澤ノ押懸ハ入道シテ用ユ

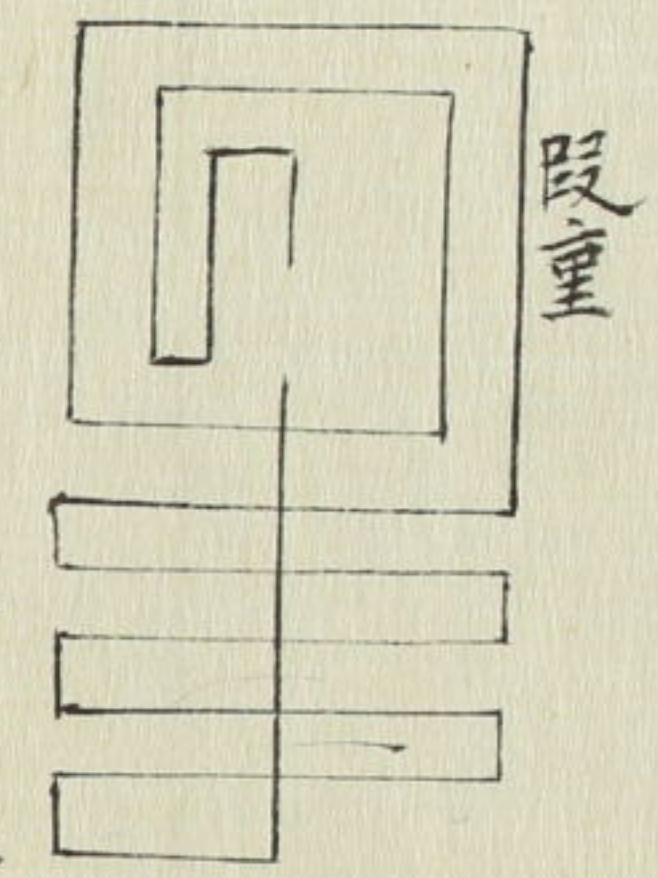
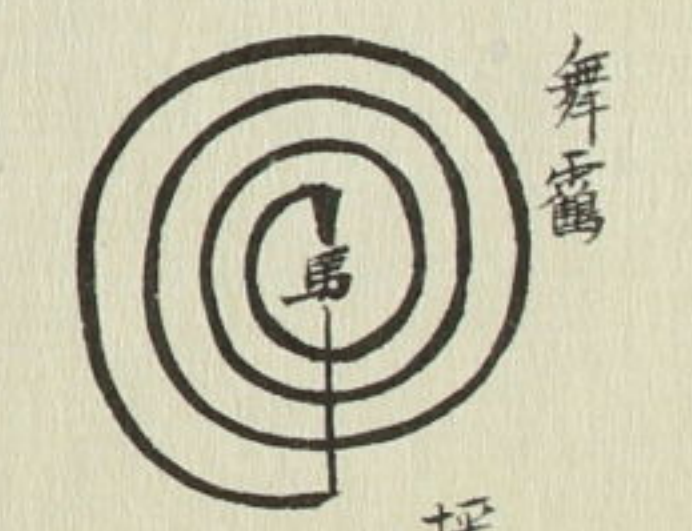
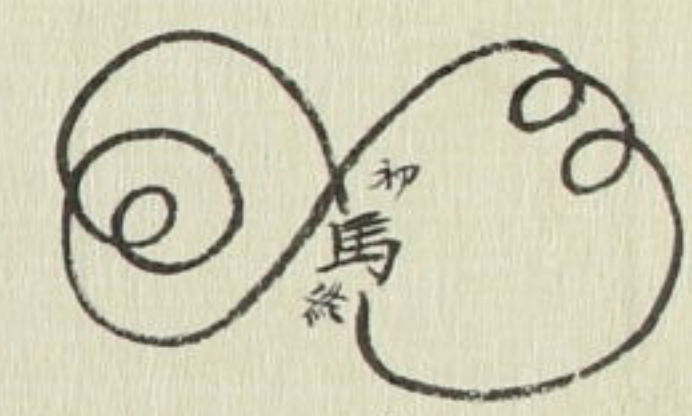
- 一 厚縵ノ押掛ノ夏俗ニ大縵ノ鞞ト云唐系真紅
ニ手組也縵ノ長ヲ面掛ノ前縵ハ馬ノ鼻上ニ迫
掛ル後ノ方ノ長サモ同シ胸掛ノ縵ハ馬ノ膝節ハ
掛ル程ニ鞞ノ縵馬ノ鬣通ヲ尾筒ノ方ハ左右押
廻レ付ル縵ノ本ハ四ツ方ニテ鞞ノ縁ハ通ニ段
ノ亀甲ニシテ其ノ余ヲ縵ニスルニ

一 例ニ替リテ主人ノ馬勇ハ吉相アリ馬ノ白泡ヲ
嚙不勇ハ惡相之古語ニ林楚ノ項羽馬運猛テ
不進我朝ニモ大將ノ馬弁皆レ討死ノ例アリ

- 一 室町殿ノ御代ニ毛檀ノ鞍覆御用アリ免許
大名ハ被掛吉ノ白傘袋ニ毛檀ノ鞍覆文裏
各御免アル莫規模ニ其後御所様ニ唐ノ物
御賞散アリテ虎ノ皮御用也石橋吉良六
角此ノ衆雪ノ先ハ馬ヲ牽セ莫ク免許ニ
一 當家ヨリ吉例ニテ 若君様御誕生アリテ
七夜ノ御祝儀ニ加々美鞍一口進上由ス甲
及加々美ノ御ヨリ出ル鞍ナリ

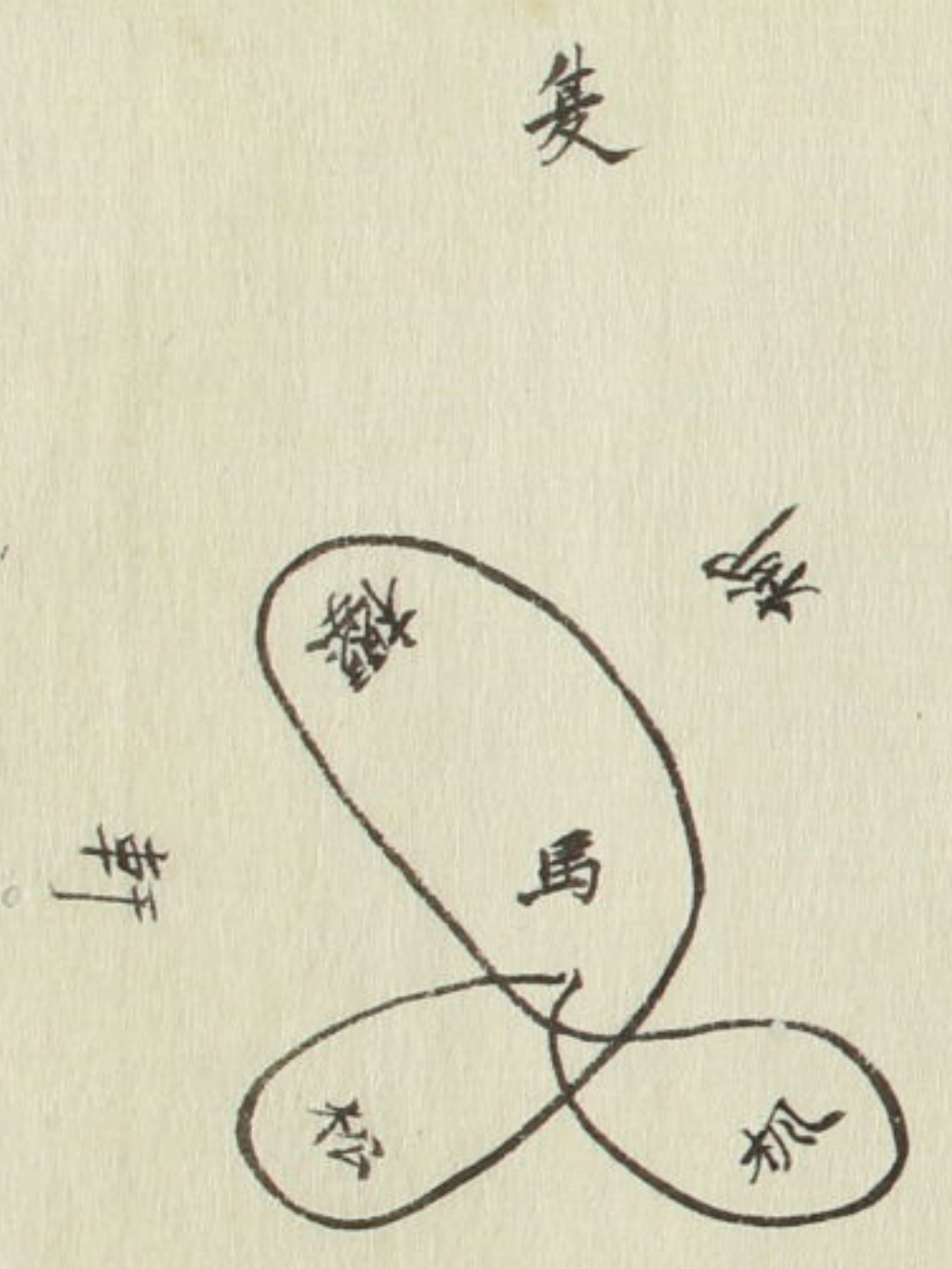
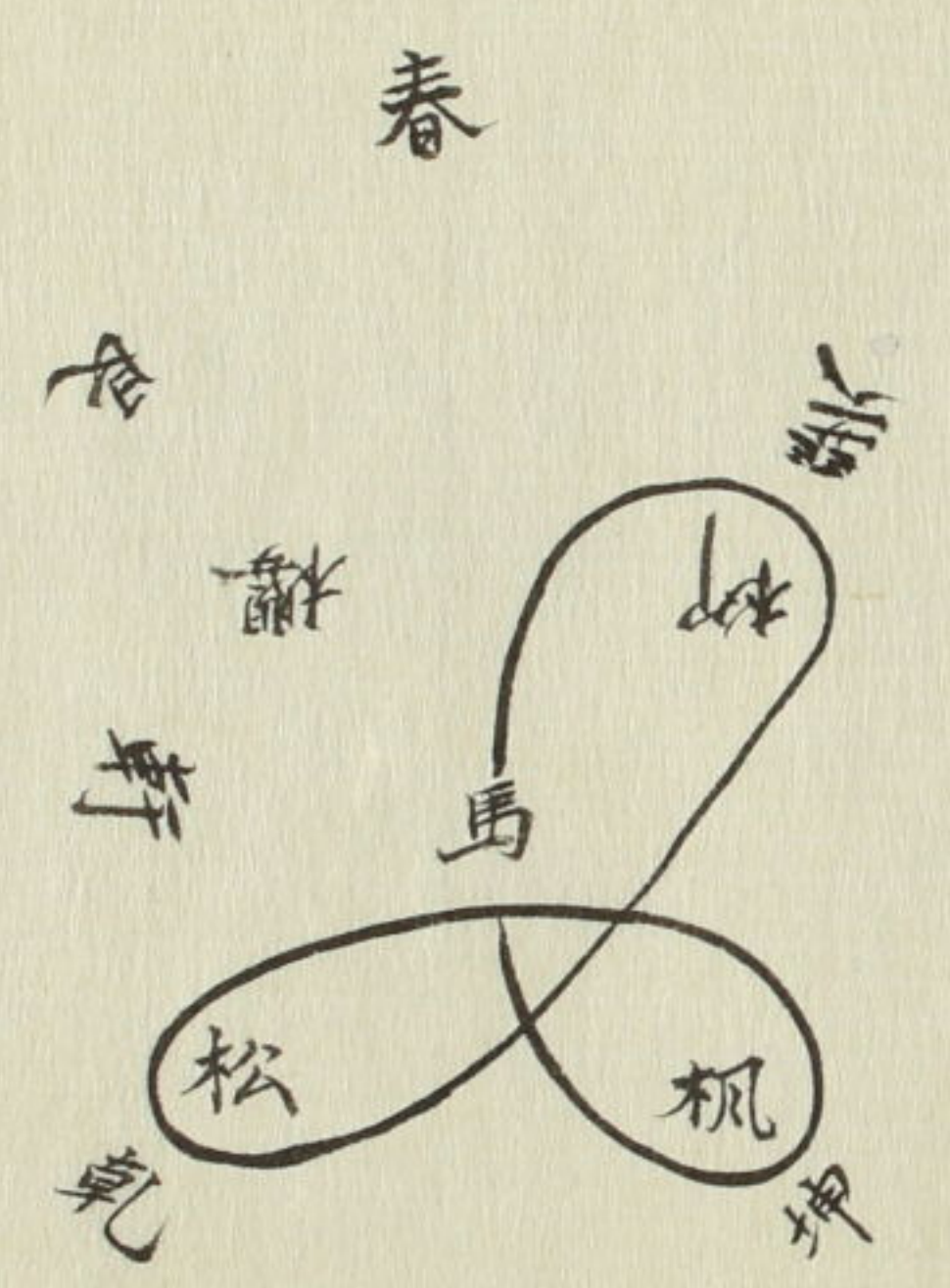
一 若君様御着初取祝衆トテ坪馬場ニテモ
四本掛ノ中ニモ庭乗スルハ其法用馬屋ニ
檀ヲ飾リ神酒洗米餅ヲ備ハ五色ノ紙ヲ

幣ニ切テ檀ニ立テ乘ル也。此ニ幣ヲ腰ニ指乘ル
 之大名、家ニミ是ヲ用ユ祝乗ニ鶴ノ羽重舞
 鶴段重ナリ乗様如左
 舞 西鶴羽重

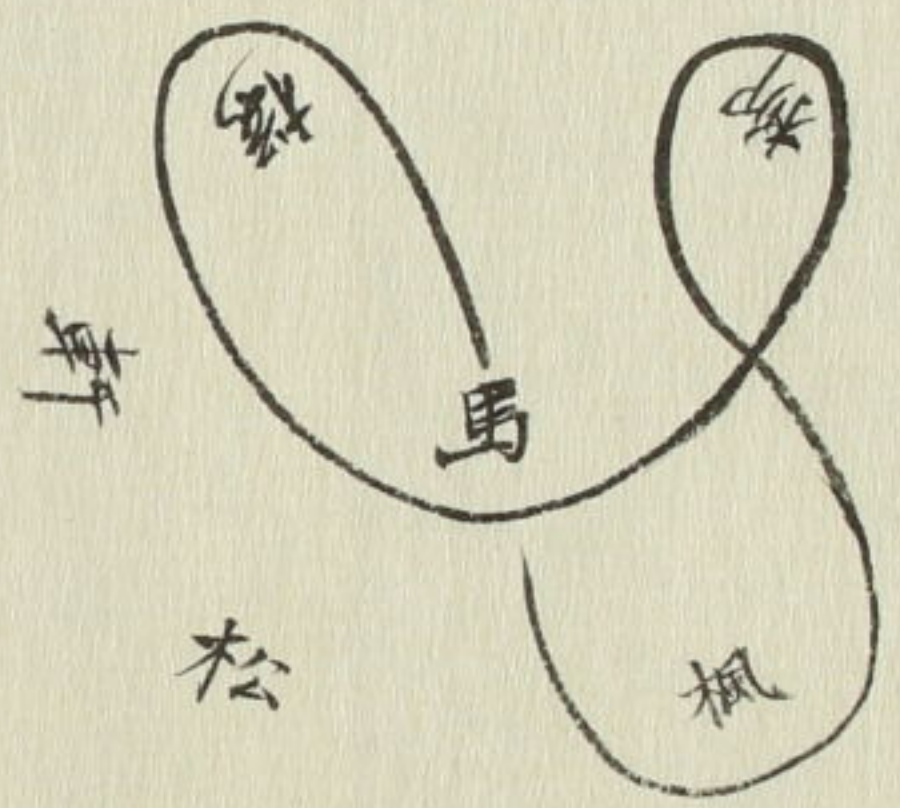
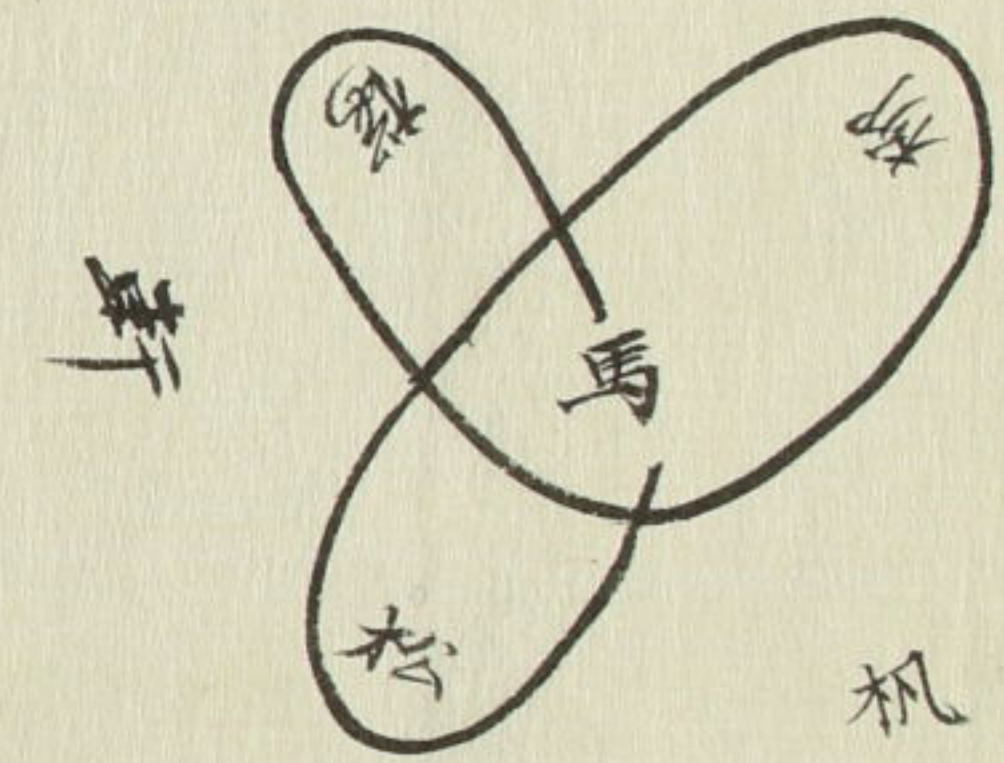


右三品ノ乗方 公方様 諸家江御成
 ノ此ニ馬ヲ上覧ニ備フ也此乗取ヲ用テ之
 一坪馬場ニテモ外馬場ニテモ馬ノ廻シ様公家
 衆ノ前ハ頓ニ武家ノ前ハ逆ニ廻スニ是左文
 右武ノ理ニ

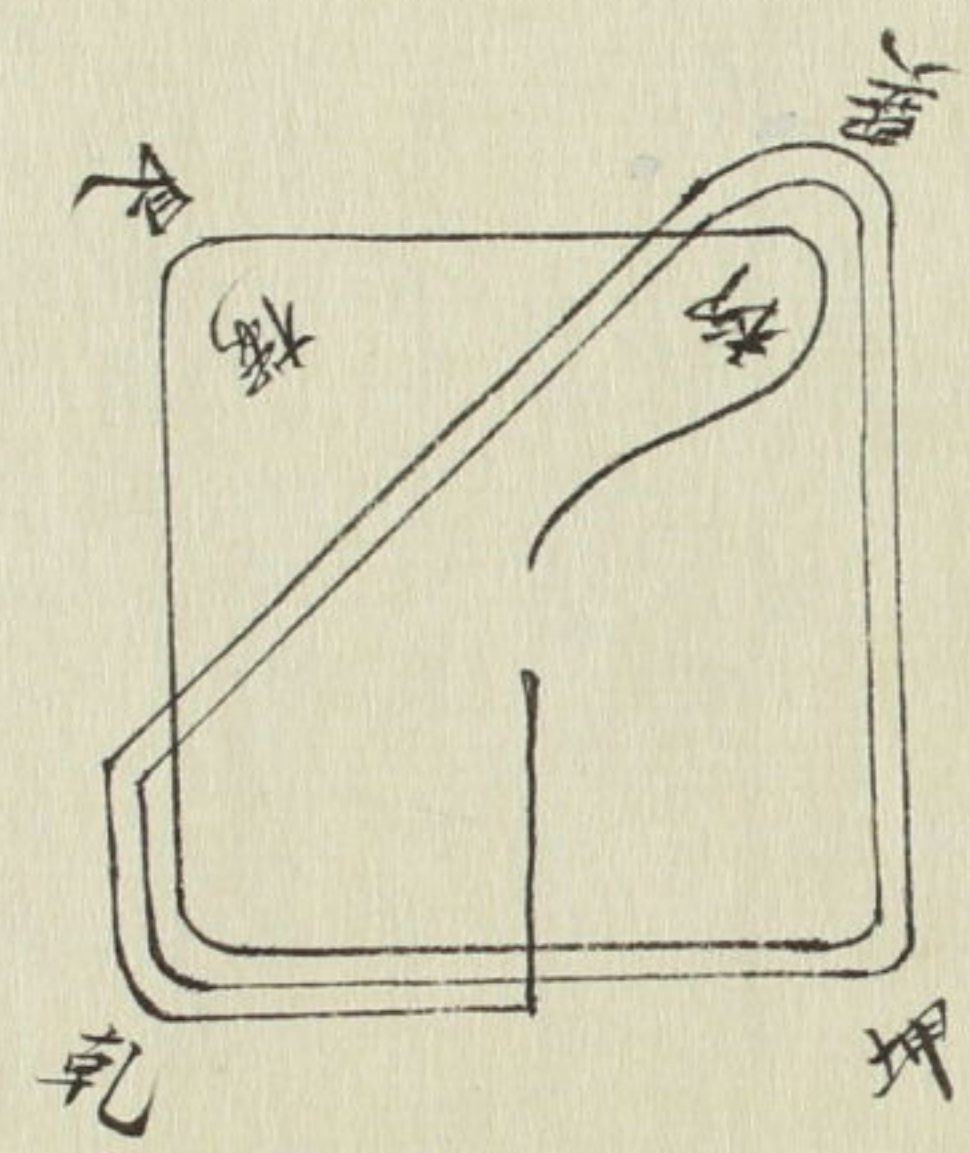
一四本掛乗様春ハ櫻夏ハ柳秋ハ楓冬ハ松
 除テ残ル三本ヲ乗ニ四本惣ヲ植ル飛鳥井
 難波春柳夏桜之良ヲ春トシ 堅ヲ夏トシ
 坤ヲ秋トシ 乾ヲ冬トス



秋



本式蹴鞠の場は北ヲ軒ト定南面ニスル
 之又四本懸ノ祝ヒ兼トテ四本ヲ不残
 兼更如丸ニ



一 常ハ主人馬ヲ牽テ参リト云厄陣中ニテハ
 御馬ヲ進セテ参リト歩セテ参リト云ニ常ハ
 馬嘶クトイヘ厄陣中ニテハ馬イサト云ニ
 常ニ馬一足トイヘ厄陣中ニテハ味方ノ馬ヲ
 一騎ト云是ノ軍詞ニ

一 首途ニ馬ニ乗ルトキ嘶ハ悪更ナリ其トキハ
 大将常ヲメ直シ討咆ニテ口祝ヒ肝要ノ
 士ハモ手自討咆ヲ玉ヒ首途アルヘシ若
 更トナルナリ 古語ニ人心先聞ニ頓ク
 更多シ

當家軍用馬法禮

凡書々當家當流ト唇是是山笠原之御家
流ヲ指テ云フ詞ナリ往昔新羅三郎義光弓
馬ノ道ニ達シ玉フ其政実ヲ元祖甲斐黑源太
清光傳ヘラレ逸見武田加賀美安田一条極垣
阿佐里ノ家ニモ傳来シテ其奥秘ヲ究公ナリ
後世弓馬ヲ習フ士皆義光之家法ヲ以テス就
中當家ノ常ニ 禁中ニ參内シテ 天皇謹
宮々達ノ弓馬ノ御師祀トナル眉目不可勝
計猶委女々ノ家譜ニ見ヘタリ

一文治建久以来在後念ノ諸士ノ行跡ヲミルニ山
野ノ惡所ヲモ馬達者ニ馳迴海川ヲモ棄ルキ
為ニ常ニ狩ヲ專ラトセシナリ是ニ依テ元弘
建久ノ比ニモ在京ノ人々弓馬ノ道ニ心ヲ掛
テ山野ノ鳥獸ヲ射屋敷々ニテ犬追物笠掛ヲ
真行セレモ皆戰射ヲ習ヒ馬術ヲ練ノ意ナリ

一 田疇ハ三國共ニ用未スル業ニ全ク遊真ハ非ス
農民ノ苦ヲ救フヘキ為一ツ治世取山野
谷峯馬達者ニシルヘキ為ニ弓馬上ノ術
ヲ様ニテ敵ヲ防クヘキ為ニツナリ治ニ居テ
乱ヲ不忘ヲ武法トス

一 弓馬ノ道ニ四心相應ト云夏アリ是ヨシ
段練スヘシ思トハ弓心矢ノ人心馬ノ心ナリ
此四ツノ物相應セサレハナラヌ

一 勢揃ノ取馬上ノ人ヨハ馬鼻先ヲ揃ナリ歩卒ハ
弓ノ末端ヲ揃フヘシ持旗ヲハ竿先ヲ揃テ建
人夫ヨハ足并ヲ揃ユルニ此段行軍ニ當常行
列ニモ入ル意ナリ

一 軍馬見立ノ夏口廣ク鼻ノ尻大キナルハ名
亦跋骨高ク前足ノ狭キハ早足ノ意ニ前肢ノ耳
ニヨリ越メヤウニスルモ早馬ノ相ナリ

一 馬ヲ乗ル心持ニ大夏アリ馬ハ我ハ我ト思フハ
初心ノ業ニ馬モ我身ニシテ乗ト思フヘシ少モ
馬ニサカロフ夏アルヘカラス自然ト馬ノ生レ
タル曲モマラハ考ヘテ直スヘシ惣ニテ直ナル
心ヲ有テホテ口ヲ切ツフニツ鞍ヲ接鞍具

當雪切トスル岐ハ必ス曲出ルナリ又長乗ラスレハ
イヤ心出キレ亦ハ込テ色々曲出ルモノ

一 軍馬ハ中肝ヲ斧一トス長一寸ヨリ三寸迄ヲ良ト
ス乗下モ自由ニ午モ不合上肝ノ馬ヲ物前望テ
引留ルハ見苦ト古人モ申サレシニ下肝馬ヲ
アツリ立テ進ム品ハ内シ中モ見能トイヘリ鶴
毛芦毛敷馬ハニ毛トテ 詞御音悪ク夜軍ハ
矢馬目當トナリテ損多シ平生モ自由働ラホ込
ヘシ其臣ニ至リテ心モ知ユルニテ自由ヲセント思ハ
叶ハカラス

一 軍鞍ニハ作爲ヲ用ユヘシ馬ノ背ニ凡カタラスシ
テヨシ螺細ニ入タル如賀見鞍ヲ用ユヘシ前輪ヲ
高クシタル鞍ナリ不肖ノ古煉鞍モ良シ金銀ノ
金具多キハ盜賊ノ害アリ其上矢馬目當トシ
一 鐙ハ銀ヲモ木ニテモ用ユ重ハ凶ニヨルヘシ乍去
遠路ヲ往ハ輕キヲ良トス木鐙ハ川越ニ水ニ浮
テ踏外ヌヘ五六ノ鐙并一用ユ口傳不肖ノ古
木鐙ヲ不用陣中ニテ火災アリテモ再用爲
テ金鐙ヨキナリ

一 雪ハ家牧ヲ透スヨリ十文字アルヲ古ヨリ用

徳用多シ太街細街ハ馬ニヨルヘシ治ノヨキ音ノ
サハタル御音 錫色ニ塗タルガヨシ亦白磨ヲモ
用ユ伊勢方ニハ明珍カ作ヲ茅一ニ用ユ當家
ニ信濃雪ヲ用ユ成名方ハ出雲雪ヲ用ルナリ
一 切付ハ常ノ糊ニテ合テハ虫モ喰水ニ入其俵分
ルニヨリテ 緋屋糊一坪生腦一合明ハ一合ヲ
摺合テ合セタルカヨシ

一 肌付ニ澤海ノ莖ノ大キナルヲ六月ノ土用取テ
アツキ湯ニテ土氣ヲ洗ヒテテ小黃連ヲ煎シ
何返モ塗テテシ其ヲ子コダニ編スルニ其俵ニ
テハ編糸キレルニハ裏ニ太布ヲ添添ニテ付ル
一 力草ノ莖長短ハ初ニヨルヘシ中入ノ草ニ犬皮ヨ
シ上ノ草ヲ能晒シテ漆ニテ合セタルガヨシ
糊合ハ虫喰水ニ入テ離アシキニ

一 馬檀ハ板馬檀ヲ用ユ袋馬檀ハ鞍キカヌニ然
レモ長途ヲ往トキレコ口付タル馬檀ハ不肖
古糖ヲ入ル莖モアリ

一 塩手ノ莖通法ハ皆金ヲ用ユ利方ニハイタメ
草ヲ練物ニスルヲ良トス

一 野沓ニ鉄ハサビ出テ惡シ銅ニテモシニチウ

ニテモ切付ノ取ニシタルカヨシ

一 障泥ハ毛ニテスルガ本ニ較具ヲ馬ノ腹ニ當面敷為ナリ其上寒暑思出ヲ防ク利ナリ毛障泥ハ川越ノ取ニ巻上ナレバ水含テ思シ滑草ノ障泥ハ肝ノヨキ馬ニ不用今ノ板障泥ト云昔ノ鎧摺ノ草ノ太ニテ取ニ糸ノ口傳アリ

一 手綱ニ縮思シ布ヲ用ユ水陰際ヨリ三段ノ処ハ修羅手綱ニ鑠ヲ入ルニ又ハ藤ヲ用ユ入ルモアリ軍用ハ二丈ニ尺ヲ用ユ又六尺四寸ノ手綱ヲ用ル人モアリ松ノ葉ヲ煎シ其汁テ漆ヲ置キ手綱ニ替ラヌニ

一 押掛ハ大徳ヨシ出陣前ニ任ノ油ヲ引テ赤ハ川越ニ水ヲハジクニ

一 茶ノ夏軍用ニ熊柳又ハ山茶葉ヲ塗テ用ユ熊柳ハ梅ニ秘夏

一 馬柄杓軍用ニ唐金ニテ作り蔓ヲ付常ハ蔓ノ入マフニテ茶鍋ニ用ユ柄ヲ指処カ鍋ノ口ナリ頗當シテ水ヲ吞ミ馬茶ヲ銅トキモ口ヲ用ユ不肖ノ士ノ利用ニ

一 下水目ト云物アリ是ハ滑草ヲ馬ノ背取ニ切テ燒

跡ヲ下乗取テ下ニ敷テ氣ニ又夜迄夜懸ル取テ前タル処ヲ赤ニ氣遣アルニ用ユ下水目ノ用ニキ取ハ當座ニカ草ノ蛸頭ヲ切テ左右ノ前脊下ニ敷ケハ燒跡モ氣ルハナリ
ムニ用ユ管ノ内ハル
フミチキセヲ為ナリ

一 軍沓作様五ヶ条

一 馬ノ髪ニテ作ル夏

一 鯨ノ鬚ニテ作ル夏

一 棕桐ノ毛ニテ作ル夏

一 椶ノ皮ニテ作ル夏

一 茗荷ノ皮ニテ作ル夏

右沓ノ緒ハ半寸繩ヲ藍ニテ染テカキ付ルニ是ヲ世ニ千里沓トス歩卒ノ履草鞋ニ用ユ条々ノ馬軍馬ニ金沓ト云秘夏アリ出陣前三十日モ前ヨリ馬足ノ裏ニ毎日濁ヲ塗ナリ夕ト(沓)ナクテ数十里ヲ往トモ馬足ノ裏不痛ニ

一 軍用ノ水目ハ管ニテ毛曲物ニテ毛下地(布)ヲ使ヒ糊ヲ張上テ性能低ニテ張テ桐油ヲ引(シ)笠糊トハ餅糊ヲ洗テ解テ石灰ヲ入タルモ、ハ銅舟ニ用ユ

一 銅桶ニ底ヲ板ヲ圓クシテ中通ニ曲物ニ輪

入テ布ニテ外ヲ包ミテ能ク縫合桐油ヲ引テ疊上ニ
縮ヲ付ル水筒管ニ入ルニ

一 岸ノ支木綿ミテ代ナシテ桐油ヲ引西ノ角ニ緒
ヲ付テ飼葉ヲ入テ馬ノ襟(掛ル)ニ手控ミテ良
桐油ヲ引ニヨリ水モウヌニ不肖ノ士ハ第一用ニシ
馬数ヲ飼ニハ猶以テ用ユ

一 山ノ岨又ハ細道ナトニテ常ノ如ク棄レサルトキハ前
後ヨリ棄ル習アリ世ニ土佐入江舟遠ト云此
夏ニ

一 鑿着テ馬ニ棄ヤフ口傳

鞅固条々

一 枳箭ノ鞅固ハ馬術功者ノスル夏ニ午綱ノ前ノ
洲濱秋ハ引通シ能程ニ引ノテ前論ニ結置ニ
亦不結シテ尻下ハモ敷ニ犬連物笠掛ル此
鞅固ヲ用ニ

一 天地手綱ト云鞅固ハ太刀チ馬上ノ弓亦錢ナト
遣フニ用ユ午綱一筋ニテスルトキハ手綱ノ曲ヲ
前論(掛水附)外ヲ遊金(通シ)其ヲ左右塩
手(留ル)是ヲ二重午綱氏云上下リ各アルニ依テ
天地手綱氏云ニ午綱三筋ニテスル故モ一筋ヲ前ノ如ク
シテ一筋ハ常ノ如クニカテヨキニ

一 駈鞅ト云鞅固ハ押前斥侯ナト又ハ駈弱キ人
用ニ後ノ障泥、緒ヲ解一結シテ其ヲ後洲濱ハ
通シテ股ノ上ヨリカ草(曲テ)後ヨリ通シ采ニ
又カ草ハ不田障泥、緒ニテモ鞅下リニテモ
後洲濱ハ通シ前ノ洲濱(引通シ)午綱持添
テ棄ルモアリ

一 四方固ト云後ハ尻界ノ総ニモ障泥、緒ニテモ
後洲濱ヨリ通シ股ノ上ヲ越テカ草ニ狭ハ
前ハ左右ノ塩手、緒ヲ解テ洲濱(通シ)手綱
持添棄ル夏ニ

一 恐鞅ト云ハ火夏場其外急ニ棄ルトキニ初心
ノ人用ユ其仕越ハ布ヲ一尋ニ重ニ取テ禪ノ
後、結目ニ付置テ馬ニ棄タル也兩股ヲ上ヨリ
廻シテカ草(後ヨリ)前(狭)下リ立也、鞅上ヲ
立透セハ外ル、人ノ不見鞅固ユ(ニ恐鞅ト云
當座ニナルトキハ三尺手拭ヲ袴ノ後腰リ掛股ヲ
廻シ留ルニ)

一 治論ノ鞅固ト云ハ馬上ノ弓太刀亦鑿ヲ入ニ用
ユ下リ立ニモ其俟解ルニ是當流ノ秘夏ト云口傳
一 白雪ノ手綱ト云ハ手綱ノ曲ヲ取テ右腰ヨリ後ハ

廻レ右服ヲ留ルニ口傳此鞍固極秘トス口傳
凡テ軍馬ノ鞍固ハ外ニ道具ヲ不用シテ馬
具ニテ用ルヲ第一トス

右セケ余之傳授条々口傳此内ニ當流橋
傳トモル切手綱モアリ可秘

一 馬急ニ掛出ルニ午綱ノ曲ヲ馬ノ顔ニ掛テ
ニ是ヲ一束止ト云然レ正向凡ノ強キ時午綱ノ
曲ヲ掛ラレ又物ナリ其時ハ割ヲ摺上テ止ルニ

又引止トキニ午綱切ルカ板ヲラハ鯨下止
總ヲ取テ止レ羽織ナト午綱ニテ留ルヲ大幕
小幕ト他流ニテ申スナリ

一 馬ニ乗テ馬上ヨリ馬下ノ物ヲ取止取ハニ重辰
節ニテ鞞ノ下リヲ左ノ方テ後論洲濱形
通レ左股ノ上ノコシ前ノ左塩手(留テヨシ下ノ
物ヲ取レ取ハ右足ヲ外レ右膝ヲ鎧ニツキテ
左午ニ午綱ヲ持テ洲濱ニ持添テ取レ俗長ヲ
下リ後ト云

一 門ノクマリ其外木六林ノ中又ハ上ノ早キ処ニテ
馬上ニテ通ルニ左午ニ午綱ヲ持テ洲濱ニ持副右
午ニ馬ノ平首(抱付右鎧ヲ踏左鎧ヲハワシ

通止平生百練スレ

一 沼ヲ渡ス莫心持多キ莫ニ馬足中節ヨリ下迄
深サノ沼ハ馬ノ口上乗テ渡スレ(押口ル馬ハ踏込池
中節ヨリ上(渡ス深サナラハ乗テ越スレハ不叶ト心持
カシ追繩尋テヒキタテ渡スレ(籠ノ者ハワラシ
間(竹ニテモ木ニテモ一尺程切ニ本枝ニ結付テ履セテ
行テ牽セル)

一 川越心得ニケ余鞍固之莫腹背ヲ能ク障泥ノ左
右前論ノ絆ヲ解取上ヨリ鞞組透下(左右足
板テ後ノ塩手ニ留テカ草ヲ腹背(結付テアハハ
卷上タルカヨシ川中ヨリ馬跡(返ントスル者其取ハ
鞞ヲ午綱ニ卷込テ下願ヲ突レ亦鞞下リテ後
洲濱取(ニワレニ通レ前ノ洲濱(板テ前ノ左右
塩手ニ結付其ヲ兩股ノ下ヨリ取テ前ニ持置鞞ノ
緒(前論ヲ越テ通シ手綱ニ取添ルニ川中ニテ
馬背ヲ立止取ハ鞞ヨリ放ル者ナリ其取ハ右ノ
緒ヲメテ鎧ヲ強ク踏左右ノ午ヲ取髮(懸レシ
馬ヲヨガハ前ヲ引メテ渡スレ川上ノ泥ヲ踏(踏
馬足ノ働クヤウニ踏カカヨシ如此業ハ自國ニテ常ニ
執行スレ(行ニ臨ニテ自由ナラヌハ馬術ナリ

秘術条々

- 一 後節自然切タラハ朝ヲ外ニ用テ朝代ハ障泥ノ緒ヲ左右シヤリ越苗ルナリ
- 一 力草切クハ不切方ノ力草ヲマリ越テ用テ定不台トキハ當座ニ明レ之左右ニ切タラハ障泥後下リヲ洲濱散リ通シ後節通テ定ヨリ通シ左右(分テ)當座ニ定テ改テアフミヲ刺ヘシ
- 一 鞅切タラ下リク名緒ヲ組遠ノ処ニ結ヒ尾ノ下ニテ苗ル切ヤリニテ一方ノ障泥ノ紐ヲモ用ユ
- 一 手細切タラハ切板ニヨリテ一方ノ長キヲ用テ三段際両方切タラハ口取繩ヲ左右ノ嚙輪(廻シ)唯ノ下(廻シ)障泥ノ緒ヲ結合テ止ル
- 一 右四ノ条馬具ヲ以テ他ノ具ヲ不交用ル利方ニ

旅陳行軍心得条々

- 一 旅馬之夏五七日之前ヨリ増飼ヲシテ旅立ノ一兩日前ヨリ扱ハ旅立日ハ旅立日ハ三外秘も飼タル馬ニハ一併カ一併五合飼テ道出テ次第ニ少究坊テ飼フヘシ是ニテ長途ヲ往ル馬不疲ナリ
- 一 押前ニ馬當リヨリ肝液クナリテ執カヒ勇ニバ

二里モ皆不ヤウ(シ)馬ノ氣静マラハ皆ヨウ(シ)

- 一 陣中ニテ俄ニ馬ニクム取ハ何ニテモ金ヲ燒テ夜目ニ交スヘシ又足ノ蜘蛛尻ニ交スヘシ

一 陣中(持飼料)心得豆ヲ馬ノ喰加減ニ着テ能クテ堅豆一併ノ積ニ仕合飼ルハ湯ニテモ水ニテモ能ホトバカシ草カワラヌハ繩ニテモ切交テ飼

一 物音ニ敏ク馬ニ欲ニテモ圖ノ耳ニ押入テヨシテラ賜莫ノ如ク作り置テ面ニ急テ駭掛(る)目上ヲ覆ハハ足本ヲ見ニ物ニ不怒ニ當座ニテハ扇ヲモカサシ通ル

一 夜討心得ノ夏馬具ニ不限其外具足ホニ心手目ニ立及長急シ響ノ遊舎ヲ指ニテ卷馬ノ舌覽布ニテ卷書下ニ滑草ヲ入テ澄ヲ後節(結付ル)音セヌカナリ先障泥ヨシ板障泥音テシテ

一 恩ハ曲ヲ前論(結付テ)別ニテ電ヲ遊舎(廻)カ(シ)是ヲ忍手細ト云

一 戦強キ日ハ夜討必ス入物ノ馬ノ鞍モ取受ハ油酌ニ馬ヲ休ムヘキ様ナキニ湯ニ塩ヲ入馬糞ノ定ヨリ大分流シ入テヨシ馬ノ茶又戰場押前モ小便ヲセハ馬糞ノ定ヨリ小用モモノ人ノ小用馬ニ大ナル茶ニ

一 戦強キ日ハ夜討必ス入物ノ馬ノ鞍モ取受ハ油酌ニ馬ヲ休ムヘキ様ナキニ湯ニ塩ヲ入馬糞ノ定ヨリ大分流シ入テヨシ馬ノ茶又戰場押前モ小便ヲセハ馬糞ノ定ヨリ小用モモノ人ノ小用馬ニ大ナル茶ニ

一 馬上ニテ太刀ヲ板ヤウ左キヲ一ノ足ノ処ニ掛テ
左肘ニテ鞘ヲ押身ヲ左ニ披キ上ノ首ニ板ヲカ
ヨシ此習ヲナケルハ午細ヲ切又ハ馬ノ首ニ大刀先
當ル者ニ常ニ習練スヘシ

一 馬上ニテ淺納マウ右腰ニ當テ四寸ノ策又ハ
軍扇ニテ留ル傳又鑿ヲ踏テ力草ノ間ニ
狹モヨシ川ヲ越ストキハ腰ニトメテ後ノ塩手ニ
結付ルナリ

一 馬上鎖合ノ交敵ヲ左ニ請テ馬ニツカセヨト
云世話ナリ 腰ノ捻ヤウ淺ノ踏ヤウ等采
馬ニテ任習ニ其後生馬ニテ習練スヘシ互ニ太
刀ホハ敵ノ左ニ掛ルカヨシ我ハ太刀敵ヤリヲ
持ハ右ニ掛ルニシ歩卒ヨリ馬上ノ人ヨハ人ヲ
切シヨリハ馬ヲ切シ馬ヲ切シヨリハ午細ヲ切ト
義經モ申サルト云

一 弓納ヤウ當座ニ木彈ヲ左ニシテ弦ツ尻
下ニ敷テ用支ヲ弁ヘシ又弓ヲ獨ニ當テ矢ヲ
モ納ムナリ久シク納ルニ左ノ力草ノ間ニ木彈
ヲ狭テ鳥カノ処ヲ前ノ丸塩手ニ付ルナリ
弦切ノ辰馬上ニテ弓張ヤウ本彈方ニ弦輪ヲ

ハダテ左鞭ノ先ニ本言ヲ指込弓ノ大中ヲ左
足ニテ踏弓ヲタホメテ木彈ニ弦ヲ掛ルナリ
是ニ雲張ト云ナリ

一 馬上ノ弓射様手細ハ前ニ天地ニ重午細ヨシ
又手細ノ曲ヲ右ノ前ノ塩手ノ中ニ引通シテ
右ノ肩ニ掛テモ射ルニ鞍中ニ追立馬午ノ
鑿ヲ強ク踏ハ踏ヒラキ弓手ノ鑿ヲ一文字
踏弓筈ヲ股ニ押當ルヤウニ腰ヲ直ニ馬ヲ馬手
ニ廻ス様ニ弓手ニテ引テ馬手ニ廻ス様ニ弓
手ニテ引テ馬手ニ廻シ矢ヲ放スモノナリ是
ヲ弓手強シ馬手ノ物ト云射方ナリ常ニ木
馬ニテ弓ノ引鑿ヲ踏脚作ヲ習テ其後ニ生
馬ニテ射ヲ見ヘシ

一 赤タル鉄炮ヲ馬上ニテ納ル辰ハ筒口ヲ前ニシ
テ臺尻ヲ力草ノ間ニ狭筒中ヲ塩手ニ當ルニ
亦背ニ負ニハ筒口ヲ右ノ肩先ニ出ヒテ布ニテ
ツウ束ニスルニ

一 芝繫ト云ハ籠ノナキ辰ニ馬ヨリ下リ其馬ヲ
他ニヤラヌ術也 鑿ニテスルモアリ手細ニテスルモ
アリ 靶ニテ繫モアリ 糸々口傳

一 舟ニ乘兼ル馬ニハ馬ノ左ノ耳ハ口ヲアテ、此哥ヨ
ニ返ヨミテ聞ヌナリ奇妙ニ乘ルトイヘリ
天竺ノ竜沙川ナルワクシ舟駒モロトモニリノ道カナ
又賦ノ字ヲ策カ扇ニテ馬ノ額ハ唇武ノ字、舟
舟ハ唇ケハ乗ニ秘ヌナリ

一 陣小屋ニ諸士ノ馬ヲ繫クハ小屋ノ左ツナクヘシ
早ク乗ルニ利アリ

一 敵方ヨリ北来ル馬ヲ主人ニ見セハ鑿ヲハワシ
尾ノ方ト馬ノ左ヲ見セル者也是ヲ北馬ト云之
尾髪ヲ切テ馬ヲ放スニ又其馬ニ乗ラハ尾先髪
ヲ少切テ軍神ヘ奉リ馬代ニテ馬ヲ神ヨリ申シ
請テ戦ニ出ル也地乗ヲシテ馬ノ心ヲ様シテ乗ル
ハシ多ハ己カ陣ハ掛込タル古例多シ馬代ヲハ
青銅一貫二百文又ハ百廿文上止ニ

一 軍馬ニハ四処ノ塩チニ勝色ノ組系ヲ長サ二尺
八寸ヲ二重ニ取結ヒ付ル是ヲ首付ノ緒ト鳥
首結ト云ナリ結ヤウ口傳上輩ノ首ハ左ノ前ノ
塩チニ付ル下首ハ右ノ塩チニ付ルニ
一 馬茶持ヤウ馬櫃ニ代衣アラハ入タルカヨシ茶
能ク委クハ付テ持ヘシ

一 水沓摺ニ付ル茶方

一 楊梅皮粉五文

一 蕨繩黒焼十五

右澁ニテ煉テ付ル

一 馬ノ背ヲ摺ヌハ足摺剥タルニハ石ヲ赤ク焼水ハ入
其湯ニテ洗ハハ愈ルナリ石首ノ根ヲ刻ニ右湯
ノ中ハ入レ馬足ニ物出来ルモ此湯ニテ洗ニ

一 臭足ヲ着テ馬足ヲ出ヌ時鞍下カ浮ハ落馬
スル直アリ強ク敷レシ屑木ニ緒ヲ付テ上帶苗
チリ横畝ナトヲ乗ニモキニ口傳

一 舟ノ中ハ立カヌル馬ノ臭臭ハ水ヲ見テ恐ルハ
故ナリ布ノ切テ馬ノ目ヲ掩ヒテ水ヲ見セヌ
ヤウニシテ馬ノ鼻ノ中ヨリ毛ヲ抜テ取レハ馬ノ
心シツトリテ騷カヌモノニ

一 落馬モセス馬上ニテ過モセサル秘文

十七一天畜跡馬頭竜馬噫嘻喇澄婆訶南無
大慈大悲馬頭觀世音并

此文ヲ唱ヘテ乗レハ落馬セヌニ當流秘ヌナリ
一 騎馬方、叱鞭ヲ付弓持人ハ馬上ニテ午ニ鼻
カム法ナリ抑前ノ眩上共ナリ此法古実ナリ

置ニテカゴマ者ナリ俗語ニ石多ク氏子鼻ト云ハ此更トイヘリ

一 右法ハ馬上ニ五法ノ礼アリ騎馬チノ人宿入ト宿ト宿外ニテシタル故実ナリ宿入ハ鞍ノ礼ト云テ騎馬鞍手覆ヲ左右氏ニニクル更ナリ宿中ニテハ籠礼トテ貴人ノ在ス宿ノ前ニテ其方ノ籠ヲ踏名方ノ足ヲ屈更ニ宿外シノ礼ニハ弓ノ礼トテ持タル弓ノ弦ヲ外ヘシテ弓ノ末弭ヲ我カ右ヘスル更ナリ又午綱ノ礼ト云ハ今迄ノカゴヲ解テ午綱ヲサハキ真ス更ナリ是下馬シタルニ准スルナリ母衣ノ礼ト云ハ貴人ニ逢岐左右ノ礼ノ緒ヲ解更ナリ已上是迄ノ馬上五法ノ礼ト云

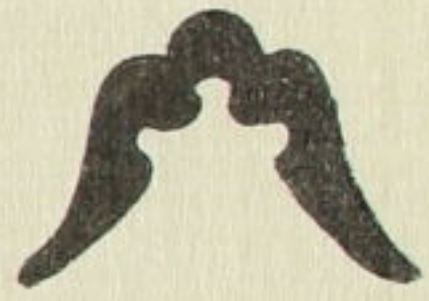
軍馬秘術

一 小身ノ一騎立ノ人ハ馬ノ乗替モ牽セズ鞍ノ替モ不持故成程丈夫ナル鞍ヲ專用ス其内金具アルハ軍ニ矢玉ノ目當ト成惡シ又金具ニ心ヲ掛盗人ノ難アリ若シ金具アリテ光アル鞍ヲ是非ナク用ヒハ出陣前漆ニ塗陰シ用ヒハ鞍ノ山形前輪ヲ左ノ如クホセヘシ是ヲ鏡鞍ト云利多シ甲州市川ノ庄加々美ノ御ヨリ初リ古戦皆此鞍ヲ用ユ當流秘更ナリ

一 刀草更馬具屋ニテハ草モ晒サス糊合ニニ惡シ草ヲニ幅程ニ切水ニテ能クホトハカシテテ四常ノ通ニ穴ヲ明ルヘテニ隨ヒテ中ニカス成程能成シテモシヲ置テ能クカスニ取ヲ切テ三枚合漆ニテ合ルナリ其上ヲ又シホ草ニテモ慰斗草ニテモ縫合ムナリ虫モ不喰水ニ入テモ不離ナリ

一 後者ノ更馬ノ如ク鏝ノ方ヲ切自ノ穴ヨリ通シ美女金ノ方ヲ居木ノ上ヨリ右ノ取カギニ付ル穴ハ美女金ヲ通スニ鞍ヲ敷鏝ヲ右ノ取カギニ鑰付タル草端ヲ取シメル草穴多クキハ馬ニヨリ替ルニナリ尤美女金ハ治タル金ニ彫板テヨシ

加々義鞆



義全大守帯ノ腰帶ノ鞆トニスルニ方
モ右ニ心スル常ノ如ク古ノ鞆ニテ備セ

カキノ大ナ更斗テスレハ華ノ中ハ
昔ノ鞆テヨシ滑革ニ又イ合シ

一 障泥ノ夏板障泥ヨシ馬皮ニテモ裏ヲ付圖ノ如
中ヲ一通縫袋ニシテ何ニテモ

ハル中張テ悪キニ中ヲ

縫袋ニラニスルニ秋ハ圖ノ

如シ常障泥ハ下ニ角アル

故ニ遠路乗ス馬ノ足ニ當リ悪シ櫻持ニモ是ヲ用ユ

一 同緒ハルハ繩ヨシニ合ニシテ一筋長サ三尺ニシテ

良短キ手綱ハ悪シ

一 午肋ノ夏何ニテモ強キヲ用ユ但滑草ヲ細ク

切繩ニテ漆ニテ塗テ用ユ

一 板馬檀ノ夏裏ヲ付袋ニ

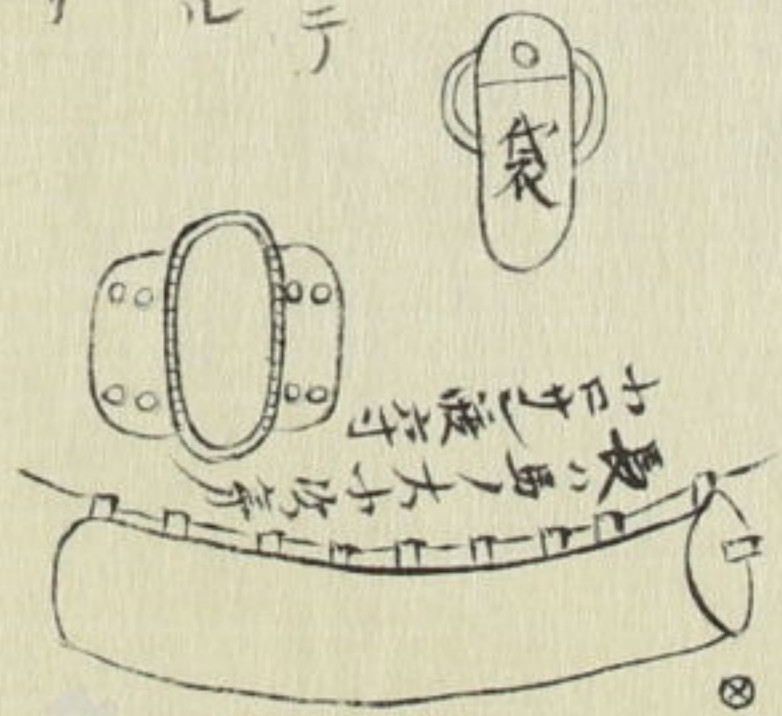
シテダホナトヲ入ルニ

一 高麗馬檀ハ裏ヲ付袋ニシテ

兵糧ナト又ハ尉斗ナトモ入ル

三尺繩小作ノ節ヲ込テ長サ

一寸ニ切中ヲ繰板鯨ノ鬚ヲ



細ク削三本程通シ竹ノ間ヲ一寸充滑草ニテ
縫合漆ニテ塗ナリ兩端ヲ如高出スナリ鞆ニ用テ

一 曹夏軍用ハ中衝ヲ用ユ能治テ音ヨキヲ用ユ
馬ノ背ヲ健ニスルナリ能磨名ヲ用ユサレハレハ
馬息ヲスルニ

一 午綱ノ夏強キ布ヲ用ユ之ニ長サ九尺又ハ一丈モ
何名ニ成ヒ漆テ其ユラ青松葉ヲ煎シ其汁ヲ漆テ
置ル年経テモ弱ミナク名モ損セヌナリ軍用ガ給
手綱惡シ加賀布モ弱シ中ハ鏢ヲ入名モアリ
一 兩午綱ノ夏是ヲ二重午綱トモテナリ午綱ノ
端ニ圖ノ如ク一尺切板損セテヤウ坪ニシテ一カ
ヲ曹ニ通シ塩午ニ付ル

一 自是草ハ旅鼻草ヨシ馬ハ草ヨリモ皆テニテ作ルカ
ヨシ

一 浮沓之夏馬ニ付ル中ニツハ前鞆ヲ廻シ前ノ
塩午ニ留ル後ハ鞆ノ尾狹ニ結付兩端ヲ塩午ニト
ナル又尾狹ニ繩ヲ付片腹ニテ腹ヲ付ルモアリ

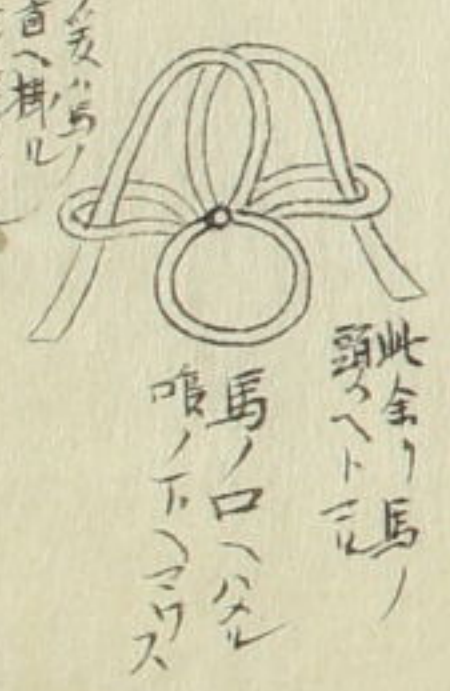
仕様、桐板ヲ凡クシテ縁ニ樋ヲ搔布ヲ木綿ニ
モ長サ三尺余指渡六寸代衣ニ縫テ兩ノ丸板ヲ
樋ヲ中へ麻糸ニテ堅ク結付桐油ヲ引ニ
一 左右手綱之支斤口ナル馬強方ノ午綱下ニテ
取堅ト乗ルニ乗走ラヌルニハ斤口トラセテ舌口
ニテハ猶引出スナリ

一 六方乗、夏山ノソワ又カケ細道ナトニテ
常ノ如ク乗レサルトキ自由ノ叶乗様ナリ
前ヨリ乗取、鐙ノ舌先ヲ前へ返シ後向乗
鞍直リスルト鐙ヲ踏返ヌヤウニ乗ニ左右同
夏ニ是ヲ鑑着ス乗様トス後ヨリ乗取鐙ノ
上ニ鞞下ル総ヲラセテ踏テ乗レハアツテ前へ
スヘウヌニ是モ左右同前ニ左右氏ニ向テ
乗ルハ常ノ如シ已上六方乗是ヲ土佐ノ入
江ノ舟透ト云ニ

一 獨乗、夏籠ナキ取、夏ニ手綱ヲ取前輪ニ
チ掛左ノ午綱ヲ引メ右ノ余リ名分ヲ平首ヲ
越セ左午ニ持添乗レハ鞍カヘラヌニ午取
髪ニ手綱ヲ持添ルナリ
一 居木合ノ夏馬上ニテハ大小斤ワルモノニカノ

降縮ヲ双方へ取り脇指ノ峯ノ方へ廻シテ
大小ノ間へ取帯ニ袂ニ大小モシテリ鞍堅ニ止
一 芝敷ト云夏當流ヨリ大坪へ傳、其外諸
流ニ秘シテヌル夏也是モ籠ナキ取馬ヨリ下ル
取又軍中ニテ舍人ナキ取用ニ用具ヲ兼テ持ル
ニハ鯨ノ鬚ニテ輪ヲ作右手綱ノ塩午五六寸
先ニ縫合ム雪ノ遊金ヲムリニ通シ程ニスルニ
ツナク取ニ馬ノ顔ヲ引曲テ件ノ輪ヲ遊金ノ
越セレハ馬働ラカヌナリ又馬具ニテスルトキハ
靴鐙ヲ掛ルナリ又午綱ヲ前足ノ間ヨリ右
トリ前輪ニ付ルモアリ口強ニ取ハ強キ方ノ
手綱ヲメルカヨキニ右ノ三品氏ニ此令ニ我夏

一 忍雪之夏是ハ夜討夜込物見ナトニ往トキ
入用具ニ兼テ梅置トモ又當座口取繩ヲ
借り用ユ畷ノ如シ又肝
強クイキル馬ニ毛用ユ
一 留午綱ノ夏午綱ノ左石
ノ引手ヲホクシ雪ノアソヒ
金へ通シ夫ヨリ高頭へ通シ耳ノ際ニテ靴へ



此令ニ我夏
馬ノ口
馬ノ下

結こ付ル是ハ軍中ニ常モ不斗木葉ノ散
如ク掛出ス馬ニ用ヒテコレ又ロヲ割セサル馬
ニテ用ユ

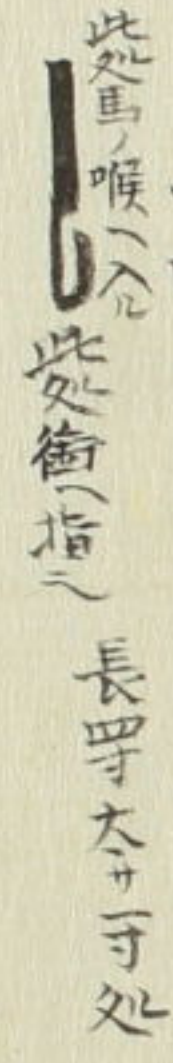
一 居敷ノ変是モ鞅固ナリ鞅ノ下リテモ障泥ノ
緒ニモ後ノ測瀆形(通シ股ノ上ノ上ヨリ越セ前
論ノスワニ 通シ手網ニ取添葉ナリ不立キ立
ヌカセハ右(モ左(モ自由ニ下ルナリ)

一 相引ト云ハ三尺手拭ノ中程ヲ禪ニ結ニ留置
ソレヲ兩股ノ上(取刀草(後ヨリ前(狭ムナリ
下立取ハ立透セハ外ル也午拭ノ長キ其身ノ
午ニテ一尋ニヌルニ火変場其外急ニ葉咬
初心ノ人常ニ用ル鞅固ニ袴着タル人モ是ヲ
用ユ肌ニ午拭付ルニヨリテ人不知ヤリ

一 込馬トハ子ハ馬ニハ肌骨ノ跡ノ血ノ込馬肌ニ當ル
様ニ左右(指也込カハ子ハ後論(強ク當ルハ
仕掛ノ金出之又込馬ニハ鞅ノ尾狹ニ仕掛後
障泥ノ緒ヲ組透(通シ腹等ニ付テ馬込トキ
前論(掛ルハ骨痛ム故ニ馬出ルハ子馬モ同
立馬ニハ前左右ノ血先狹前論ヲ押ス也



一 連馬ノ変鉄ニテ長サ守ニ圖ノ如ク持テ鑰ノ
処ヲ雲ノ銜ノ轆米田ニ付古ヲ押ルヤウ仕掛衆
ニ常ハハ子馬ニ用ユ陣中ニテ午候ニ往片敵
陣近ク又心寄テ様躰ヲ庇視フ此金ヲ古ニ
ノセハ馬嘶古又ナラヌニ秘変ナリ



一 腰手網ノ変午網ノ曲リヲ取テ帯ニ留ル傳
又帯ニ鉄カ銅ニテ鑲ヲシニ入テ是ニ留ルモリ
是ヲ治論ト云馬古弓太刀亦鑊入ルニモ用ユ
下リ立毛其俟解鞅固ナリ

一 白雲ノ鞅固ト云ハ鞅ノ下リヲ後ノ測瀆ハ
左右氏ニ取テ先ヲ結ヒ刀草ハ股ヲ越テ
後ヨリ前ハハセルニ

一 自然鞍ナキ裸馬ニ葉ル変アラハ何ニテモ後等
ノ如馬ノ胴ヲ結夫工足ノ大指ヲ差込繩ヲ結テ
虎畏ノ如ク掛其先ヲ常ニ結付ハ合衆ニ

一 束ノ変是ハ懸出ル馬ヲ急ニ留ル取ハ午網ノ
曲ヲ馬ノ顔(掛テ留ルト云変世ノ人知ル処ニ

然瓦向風強キニハ午網羅掛刺ヲ摺上テ止
タルカヨシ亦午網ノ水舟切クル眼ハ面掛ノ下ニ
総ヲ取テ留ル也

一 午候鞍ノ支ニ重後ヲミテ鞅ノ下ヲ後揚
洲濱取ハ左斗ヲ通シ左股ノ上ハ越セ前左
塩子ニ留テ棄テ下ノ物ヲ取首ハ鑿ニ右膝
突テ午網ヲスワニ持添テ取ニ

一 旅馬ニ四足ハ油ヲ付テ赤出セハ沓摺ヲ多
ク馬スクマシテ吉小腕ニ能ク可塗又馬足ノ
裏ハ瀆ヲ十日斗前ヨリ可塗足裏不痛ナリ
軍馬ニ茅ニ用ニ如此シテハ水白不折トモ吉是
ヲ子更替ト名付テ秘中ノ秘ナリ

一 旅立ノ馬肝強クイキラハ一里モ二里モ沓
不折シテ可乗鎮リタラハ沓ヲ打ハレ
宿ニ着タラハ糟湯ヲモ塩湯ヲモ成程緩ク
ト肩ヨリ股ハ能接下シテ何辺モ裾ヲシテ諸厩ニ
牽入ニ二度コロヒヲ打セ少休セ起テ後掛ヲシ
又立ハレ

一 宵ノ内物音高クテ馬曾糧ヲ不喰ハ馬ヲ休
セ物音鎮テ後飼テ吉

一 飼料持心得ノ支軍中ニ大豆ヲ馬ノ喰如取ニ
者火テ能乾テ堅豆一升ノ積ニ仕分ケ飼費ハ
湯ニテモ水ニテモ能ホトハカシ艸又ハ苜蓿又繩
ヲ切カ何ニテモ飼葉ニ交テ飼ハレ

一 飼料持心得ノ支軍中ニ大豆ヲ馬ノ喰如
減ル処ニ當テ網ヲ右ノ方ヲ解遊金ハ通結
面掛ノ下ヲ願ノ下ニテ結ヒ留テ午網ニハ口
取繩ニテ付小願ノ処ニテ兩方モナリ遊金ハ
通シ結テ飼也

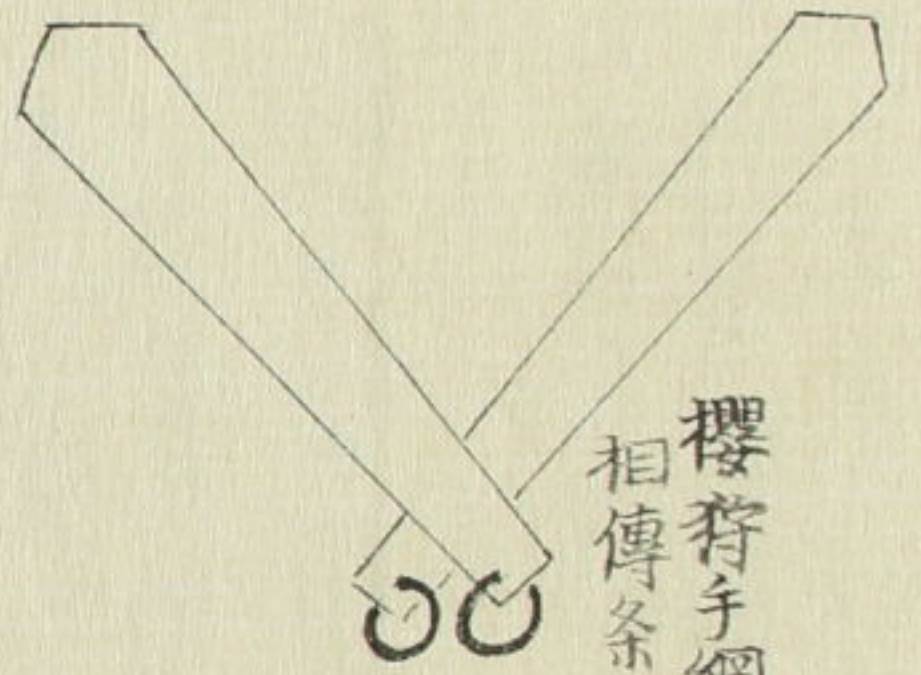
一 火ヲ持支敵ノ方ニテナキ方ノ鑿ヲ母衣付ニ
火繩ヲ引通シ持テ火ヲ馬ノ前足中節結
付ル是ハ道筋不正難ク通ル皆馬火心ニ寄
テ氣不散シテ踏遠ヲナリ兩降ハ柄抄中ハ
入テ取髪ノ処ニ伏テ結付持テ敵前ニ夜通
ルニハ長キ竹ニ火繩ヲ挾馬ヨリ十回程跡ニ
持セテ吉敵ノ目當遠モナリ

一 柄抄柄様當座ニ前ノ洲濱取ニ指込持ニ
太刀柄ノ支敵ヨリ太刀カ柄ヲトスハ敵
午ヲ留テ敵キヲ留テ鑿鳩胸ニテ敵
胸ヲ蹴ナリ

- 一 馬上ニテ太刀板又納様、変物前ニテハ太刀柄ヲ左手ノ外ハナシ、辟月ニテ押ヘテ板ニ同納ルル者ハ、鯉ノ子細ニ取添テ其手細ノ上ニ載テ前ニ寄指込ナリ
- 一 長刀納マウノ刀草下ハ、校四方キニ、笛ノ同遣フ、此ハ兩頭ノ午細ニテ、勸クナリ
- 一 馬上ニテ弦切、弦張ヤウノ、変替弦ノ、弦巻ヨリ取出シ、末弾ハ、掛其上ハ、口取繩ヲ掛テ、弓ヲ右ノ方ハ、指出シ、本弾ヲ右ノ居木ニ當テ、弓ニ付タル、繩ノ、端ヲ左跡、塩手ニ付テウツムキ居テ、塩手ハ、付ル、借張、弦首ヲ仰キ、右足ニテ、握下ヲ踏テ、張ナリ、世ニ、雲張ト云、是ナリ、又左、後鞅ノ、余リニテモ、張ナリ、口傳
- 一 弓手強キ馬ノ物ト云、夏ハ、馬上ノ、弓射様ニ、矢數ヲ、射出ス、此ハ、天地ノ、午細ヨシ、馬ヲ、論ニ、乗テ、弓手ニテ、引馬手ハ、廻シ、射出ス
- 一 馬上組討メ、又、免々、習練可有、取組ト否、鞍ヲ、固ノ、馬ヲ、蹴出ス、此ハ、大歌、歌、此方、鞍ハ、移ルナリ
- 一 坂道、乗心得、夏、真直ニ、乗上ハ、カラス、葛

- 籠折ニ、乗ニ、上ヨリ、前輪、掛、鎧ヲ、強、踏ハ、シ、下リ、坂ハ、後、輪、掛ル、馬ヲ、休、皆ハ、谷ノ、方ハ、向ヘ、レ、上リ、向テ、休、取ハ、馬、息ヲ、スルニ
- 一 小橋、乗心得、手細ヲ、落シ、前輪ニ、取付テ、任馬テ、可、乗
- 一 山ノ、峠ヲ、乗、夏、小橋、乗心得、同シ、谷ノ、方、手細ヲ、小、宛、アイ、シ、ラ、イ、テ、馬ニ、任、ス、ハ、シ
- 一 ス、ハ、リ、道、乗ニ、杏ヲ、ハラ、ヒ、馬ヲ、引、立、油、断ナキ、様ニ、乗、ハ、シ
- 一 細キ、道ヲ、乗心得、小橋、同意、内ニ、午細ハ、取テ、前輪、掛ル、ガ、コ、シ
- 一 首ヲ、馬ニ、付ル、夏、能、首ハ、左ノ、前ノ、塩手ニ、付ル者、也、下、鞅ノ、首ハ、右ノ、塩手ニ、付ル、首付、緒ト、テ、緒、ヤリ、右、色ハ、勝、也、ノ、組ヲ、用、之、長サ、二尺、八寸

右軍用馬法禮乾坤四十八ヶ条也軍馬馬法禮モシタル分斗記之



櫻荷手網用ニ子
相傳糸々口傳

銀指渡一寸五分

太サ五分

此金鍛テ平ク長サ五寸

